

寄塚遺跡群

# 寄 塚 遺 跡

長野県佐久市横和寄塚遺跡群寄塚遺跡発掘調査報告書

2008.3

佐久建設事務所  
佐久市教育委員会

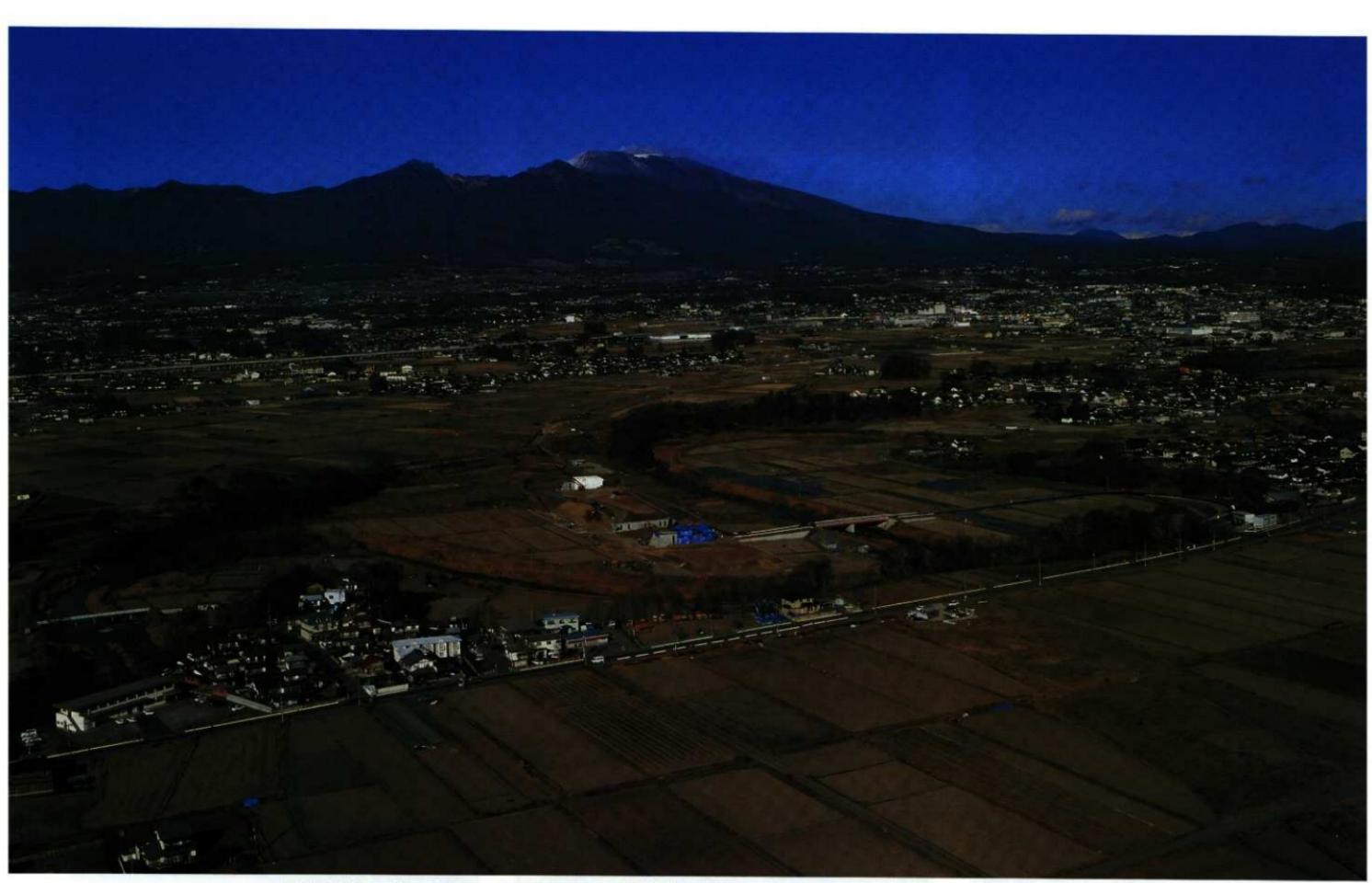
寄塚遺跡群

# 寄 塚 遺 跡

長野県佐久市横和寄塚遺跡群寄塚遺跡発掘調査報告書

2008.3

佐久建設事務所  
佐久市教育委員会



寄塚遺跡群遠景（背景は浅間山・上信越自動車道・北陸新幹線が横切り、蛇行する湯川。中部横断自動車道の輪郭がわかる。）



寄塚遺跡 全景



寄塚遺跡調査区西側



寄塚遺跡調査区東側

## 例　　言

- 本書は、佐久建設事務所が行う県単道路改築事業（一）上原猿久保線佐久市今井（1）に伴う寄塚遺跡群寄塚遺跡の発掘調査報告書である。
- 調査原因者 佐久建設事務所
- 調査主体者 佐久市教育委員会
- 遺跡名及び所在地 寄塚遺跡群寄塚遺跡（Y YY）  
佐久市横和555-7他
- 調査期間及び面積 発掘調査 平成17年10月17日～平成17年12月26日  
整理作業 平成19年7月13日～平成20年3月19日  
調査面積 2,347 m<sup>2</sup>  
開発面積 1,598 m<sup>2</sup>
- 調査担当者 林 幸彦 佐々木宗昭 森泉かよ子
- 本遺跡の報告書作成は遺構・遺物の写真図版を佐々木が、他は林が行った。石材鑑定は羽田が行った。
- 調査から報告書作成に至るまで以下の方々と各機関のご指導ご協力を頂いた。記して厚くお礼申し上げる。（順不同・敬称略）  
横和区長 依田三男 （財）長野県埋蔵文化財センター （株）ネクスコ東日本  
佐久考古学会 地元横和区の皆さん
- 本書及び出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡　　例

- 遺構の略記号は、竪穴住居址（H）・掘建柱建物址（F）・土坑（D）・溝状遺構（M）である。
- 挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。  
竪穴住居址・掘建柱建物址 1/80 炉 1/20 土坑 1/60 土器・石器 1/4 鉄器 1/3  
上記以外については、個々にスケールを記載した。
- 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」として示した。
- 土層・遺物胎土の色調は、1988年版「新版 標準土色調」に基づいた。
- 調査区グリッドの間隔は 4 × 4 m に設定した。
- スクリートーンの表示は以下のとおりである。

遺構	遺物（土器）
	地山断面
	床下の埋め土
	焼土
	抜け込み範囲
	炉
	柱底
	黒色処理
	赤彩
	遺物（石器）
	すり面
	歯打痕

# 目 次

口絵  
例言  
凡例

第Ⅰ章 調査の概要	
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査日誌	2
第4節 遺跡の位置と周辺遺跡	3
第5節 基本層序	4
第6節 遺構と遺物の概要	4
第Ⅱ章 遺構と遺物	
第1節 積穴住居址	5
第2節 掘建柱建物址	33
第3節 土坑	35
第4節 溝状遺構	38
第5節 ピット	42
第6節 遺構外出土遺物	42
第7節 寄塚遺跡出土の石器	44
第Ⅲ章 調査のまとめ	50
写真図版	

# 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

## 第1節 調査の経緯と経過

寄塚遺跡群寄塚遺跡は、佐久市横和に所在し、佐久市の中央部に位置する。湯川の左岸に展開し、標高は670m内外を測る。調査対象地とその南方や西方に水田地帯が広がっているが、江戸時代初頭に三河田用水が開削されて初めて灌漑が可能となった。水利に乏しい遺跡群の東方は現在も畑作が続いている。この台地上では圃場整備、宅地造成、道路改良工事、中部縦断自動車道、などにより弥生時代中期、古墳時代、平安時代から中世にわたる遺構・遺物が発掘調査により数多く検出されている。今回、県単道路改築事業（一）上原猿保線佐久市今井（1）の道路工事が計画された範囲は、寄塚遺跡群内であった。昭和50年代に北西に隣接する横和団地造成時の試掘調査で、100棟を超す弥生時代中期後半を中心とする竪穴住居址が検出されている。佐久建設事務所と当教育委員会で保護協議を行い、拡幅する部分について今回発掘調査を行い記録保存し、現道部分は調査結果を得て再度協議を行うことになった。佐久建設事務所の委託を受け、佐久市教育委員会文化財課が発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成17年10月より行った。調査の結果、検出された住居址等は現道の下部へ延びており、現道築造の影響は受けているものの遺構が残存していることが判明し、報告書の刊行は現道部分の調査後に行うことになった。しかし、平成19年度の保護協議で現道は改良工事を行わないことになり、拡幅部分の調査報告書を作成することになった。整理作業は平成19年7月に始め、原稿執筆・報告書を刊行した。



第1図 寄塚遺跡群寄塚遺跡位置図 (1 : 25,000)

## 第2節 調査体制

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	三石 昌彦（平成17年度） 木内 清（平成19年度）	
事務局	教育次長 社会教育部長 （平成18年度組織改変） 社会教育部次長 （平成19年度組織改変） 文化財課長 文化財調査係長 文化財調査係 調査体制	柳沢 健一（平成17年度） 柳沢 義春（平成19年度） 山崎 明敏（平成19年度） （平成19年度組織改変） 中山 悟（平成17年4月～平成19年6月） 森角 吉晴（平成19年7月～） 高柳 正人（平成17年度） 三石 宗一（平成19年度） 林 幸彦 富沢一明 上原 学 林 幸彦 堺 益子 相澤 昭二 阿部 和人 碓氷 知子 狩野小百合 小林よしみ 佐藤 由枝 大工原かつい 中山 消美 林 まゆみ 堀籠 保子	柳沢 健一（平成17年4月～平成19年6月） 柳沢 義春（平成19年度） 山崎 明敏（平成19年度） （平成19年度組織改変） 中山 悟（平成17年4月～平成19年6月） 森角 吉晴（平成19年7月～） 高柳 正人（平成17年度） 三石 宗一（平成19年度） 須藤隆司 神津 格（平成17年10月～） 赤羽根太郎（～平成17年9月） 佐々木宗昭 森泉かよ子 須藤隆司 神津 格（平成17年10月～） 赤羽根太郎（～平成17年9月） 出澤 力 小林真寿 羽田卓也 小林真寿 羽田卓也 上原 学 赤羽根太郎（～平成17年9月） 出澤 力 森泉かよ子 赤羽根充江 上原 悅子 小幡 弘子 小池慎一郎 佐藤 瑞希 清水 律子 土屋 和見 橋詰 勝子 羽田 貴恵 細谷 秀子 依田 三男	
調査担当者	林 幸彦	須藤隆司	小林真寿 羽田卓也	
調査副主任	堺 益子	上原 学	赤羽根太郎（～平成17年9月） 出澤 力	
調査員	相澤 昭二 阿部 和人 碓氷 知子 狩野小百合 小林よしみ 佐藤 由枝 大工原かつい 中山 消美 林 まゆみ 堀籠 保子	浅沼 勝男 磯貝 律子 白田 真杉 北村 亨 齐藤 恵李 清水 木子 大工原達江 橋詰 信子 林 美智子 森泉こずえ	浅沼 君子 市川 昭 小倉 荣子 木次 順子 齐藤 俊一 清水 澄生 田中ひさ子 橋詰 勝子 広瀬梨恵子 山元有美子	赤羽根充江 上原 悅子 小幡 弘子 小池慎一郎 佐藤 瑞希 清水 律子 土屋 和見 橋詰 勝子 羽田 貴恵 細谷 秀子 依田 三男

## 第3節 調査日誌

### 平成17年度

平成17年10月17日 器材搬入。トイレ等設置。

10月18日 ブレハブ設置。

10月18日～12月2日 調査区道路拡幅部分西側より重機による表土削平。並行して遺構確認・遺構掘り下げ・記録・写真撮影。

11月14日 自動車道より東側の遺構掘り下げに入る。

12月5日～12月9日 遺構覆土から遺物抽出。(削片・細片)

12月5日～26日 調査区重機により埋め戻し。

12月13日 器材撤収

### 平成19年度

平成19年7月6日～整理作業。注記・復元作業。図面修正・写真整理。取り上げた遺構覆土から遺物抽出作業。

平成19年8月21日～平成20年3月17日 遺物実測・トレス。遺構図面トレス。原稿の執筆、報告書の作成。遺物・図面・写真整理、保管庫へ収納。

## 第4節 遺跡の位置と周辺遺跡

寄塚遺跡群は湯川と滑津川に挟まれた東西に長い通称中込原の台地上にある。この台地は20~30mにおよぶ浅間第一軽石流（P1）に覆われている。P1の上部には湯川層といわれる基本層序第VI層の砂層が堆積しており、かつ北の湯川南の滑津川との比高は10~30cmを測り、水利に乏しく江戸時代初頭に市川五郎兵衛により補完完成したと伝えられる三河田用水堰が開削されて初めて灌漑され、横和・三河田・今井周辺で水田耕作が可能となった。用水の通水以前は、本遺跡南方今井の集落北にみられる湧水を利用した水田だけであった。遺跡群の東方は横和・三河田の集落から長野種畜場に至る広大な平地は、現在まで開田されず、畠作が続けられている。本遺跡の2.5km東の番屋前遺跡IIで中世の井戸址が掘り下げられ、第VII層の砂層は地表下7mよりさらに下方へ続いていることが判明した。また、本遺跡の南西100mにある今井西原遺跡で調査された中世以後とされる井戸址は、深さ2.8mを測り湧水点は地表下1.5mであった。現在の三河田の集落は、三河田用水の完成後（17世紀初頭）に成立した。

このように中込原一帯は農業用水はもとより生活用水を得ることが困難な環境であり、佐久市役所が新築されるまで先ほどの三河田・横和・今井が既存の集落であった。三河田の滑津川を臨む断崖には幾つかの湧水地点があり小さな沢がある。横和の集落内や付近にも湧水地点があり小さな沢や小沼がある。今井まで下がってみると集落の付近に水を集められる。今井の集落の北西には北東から続く大きな低地があり、千曲川に臨んだ断崖では比較的大きな沢となっている。

このような広大な中込原の遺跡の分布状況は、生活用水が得られる台地縁辺に寄っている。台地

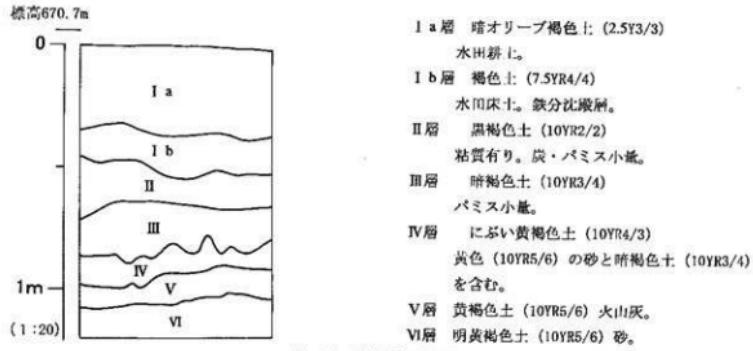


第2図 寄塚遺跡群寄塚遺跡と周辺遺跡 (1 : 15,000)

内部は希薄である。湯川を臨んだ台地北側縁辺部には、本遺跡群はじめ東に宮ノ上遺跡群・寺畠遺跡群が知られている。本遺跡群内では、昭和56年に横和田地造成時に試掘調査され100棟を超す弥生時代中期後半～平安時代の竪穴住居址が検出されている。団地内に寄塚古墳がある。一見したところ横穴石室を持たないようである。東に隣接する宮の上遺跡群宮の上遺跡で2棟の平安時代竪穴住居址等が、宮ノ上遺跡群根々井芝宮遺跡では、弥生時代後期後半竪穴住居址43棟（この他にプラン確認できた26棟）、古墳時代後期竪穴住居址3棟、平安時代竪穴住居址14棟等が調査されている。さらに東の寺畠遺跡群の調査では、縄文時代草創期の爪形文等が出土している。南西100mでは昭和49年度長野県営高瀬地区圃場整備事業に伴い、今井西原遺跡が発掘調査されている。古墳時代前期後半～平安時代の竪穴住居址7棟、中世頃の井戸址1基等が検出された。その西方の白山遺跡群では試掘調査で弥生時代中期後半・古墳時代後期・平安時代の竪穴住居址12棟が確認されている。古墳は湯川に臨んだ寄塚古墳、台地中央の土堂古墳や県下屈指の大型の横穴石室を持つ滑津川に面した三河田大塚古墳が所在する。弥生時代中期後半の集落址である本遺跡群と根々井芝宮遺跡は、湯川が大きく北に蛇行するのに合わせるように台地が湯川にせり出した台地縁辺に立地している。

## 第5節 基本層序

寄塚遺跡群は、千曲川に東方から注ぐ湯川左岸の切り立った断崖上にあり、標高は670m内外を測る。浅間第一軽石流の堆積がみられる最南端にあたる。台地の南端断崖下には、滑津川が湯川と同じく西流している。遺跡の基本層序は6層に分かれ、遺構は第IV・V・VI層面で確認された。第V層は調査区西にかけて堆積は薄い。第VI層は湯川層とされる水平な砂層で、中部自動車道掘削面で地表下7mまでは確認できた。



第3図 基本層序模式図

## 第6節 遺構と遺物の詳細

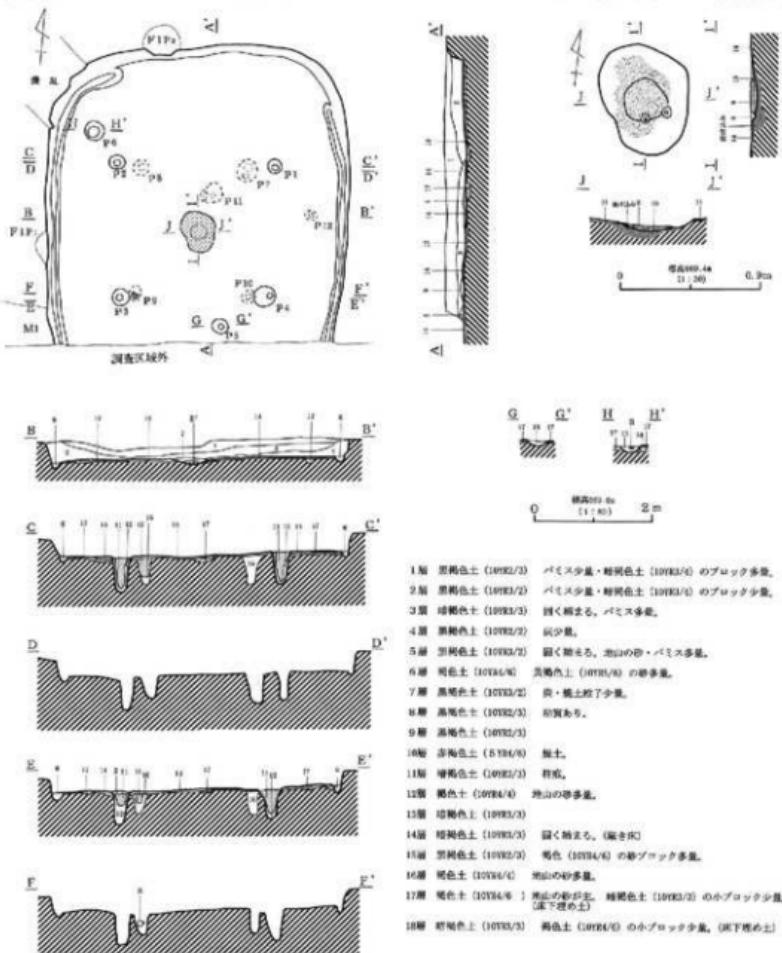
遺構	竪穴住居址	13軒 (弥生時代中期後半・古墳時代前期後半)	遺物	弥生時代中期後半土器・石器 古墳時代前期後半土器・石器 古墳時代後期～平安時代 須恵器・土師器
掘建柱建物址	6棟			
土坑	17基			
溝状遺構	12条			
ピット	106基			

## 第Ⅱ章 遺構と遺物

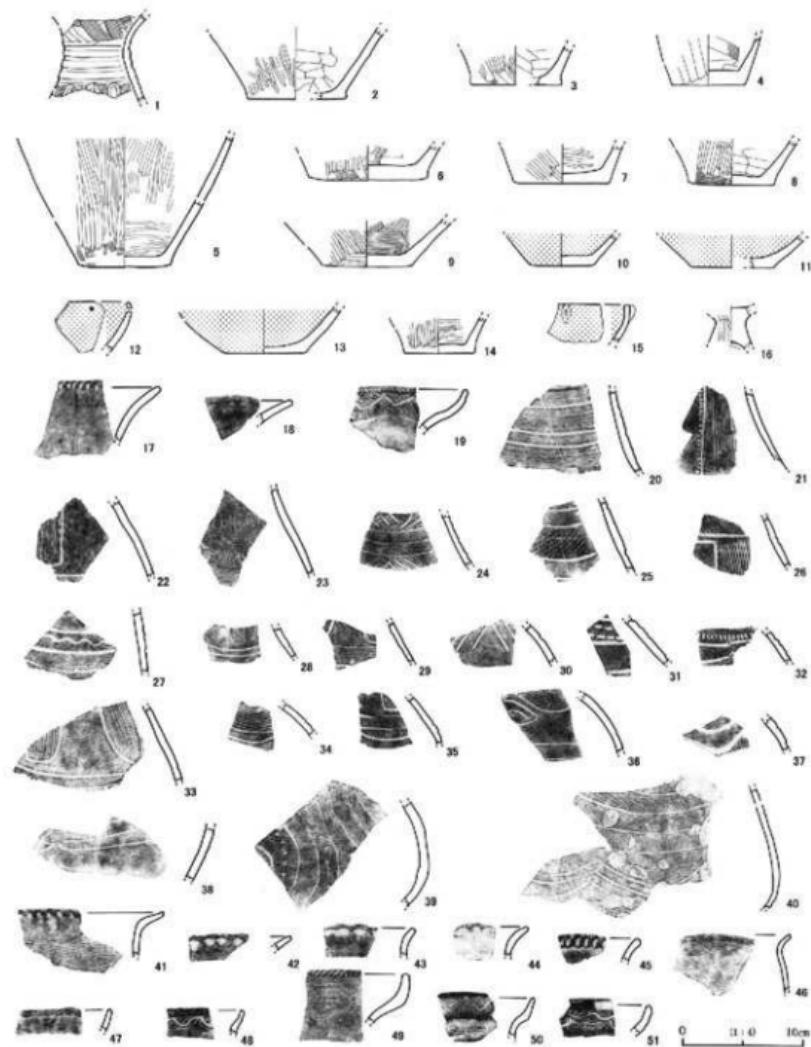
### 第1節 竪穴住居址

#### (1) H 1号住居址

本址はた・ち-101・102Grで検出された。M 1号・F 1号・D 2号土坑に切られ、H 2号を切って

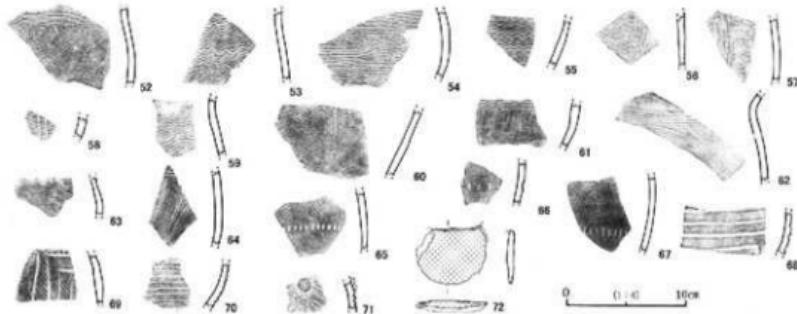


第4図 H 1号住居址実測図



第5図 II-1号住居址出土遺物実測図

いる。隅丸長方形で北壁4.5m、東壁検出部4.8m、西壁4.6m、最深の壁残高は北壁で38cmを測る。主軸方位はN-2°-Wを示す。主柱穴P1～P4が南北2.2m東西2.6mの正方形に配置されている。



第6図 H1号住居址出土遺物実測図

柱痕はP1・P2・P3で18cm、P1は径26cm深さは52cm、P2は径26cm深さ60cm、P3は径30cm深さ56cm、P4は径34cm深さ60cmを測る。床下からのP7～P10は、P1～P4の内側に方形に配置されている。主柱が建て替えられたと考えられる。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は2～8cmで浅い。周溝が北壁の一部を除き壁下を回る。炉は主柱穴P1～P4でつくられる方形の中央に設置され、長径70cm短径58cm深さ7cmの楕円形で地床炉である。1cm程の焼土の堆積があり、下部が焼け焼け込んでいた。図示した遺物は弥生土器壺・甕・鉢・高杯、石器がある。図示した以外の土器片1,325片の内79片が内外面赤彩された鉢・高杯片で、壺片は僅か6片しかもすべて小形壺。1・6・17～40は壺、壺口縁部は外反する口縁と、内擗して受口状の口縁がある。口唇部にヘラの刻目や縄文が施される。19の口縁部は縄文後ヘラ描連続山形文が施される。21～40は頸部・肩部片である。20・23・25・27・31・32・35はヘラ描平行沈線文間に横の櫛描条線文・縄文・ヘラ描波状文・櫛描斜状文が、21・22・26・28・29・33にはヘラ描「U」字文内に縦の櫛描条線文やヘラ描刺突文、ヘラ描「U」字文の外にも縦の櫛描条線文やヘラ描刺突文が、24・30には山形文が重ねて施文される。38～40は胴下部でヘラ描沈線区画内に縄文が施され、40にはその下位にヘラ描連続孤文、39は縄文の上にヘラの刺突文が施される。2・3・5・7～9・14・41～71は甕、41～46は外反する単純口縁の甕で、口唇部縄文と刻目・押捺が施される。47～51は受口や受口状の口縁で、50以外は口唇部に縄文が、48と51は口縁部に縄文・ヘラ描波状文、50に縄文・ヘラ描連続山形文が施される。52・62・64には横・縦の櫛描条線文が、65～67は櫛描斜走文にヘラの刺突文が、53～55・61は櫛描波状文が、56・57・60は櫛描波状文・縦の櫛描条線文が、58は櫛描波状文後縦のヘラ描沈線・波状文が、68・69はヘラ描連続「コ」字文が、70はヘラ描横走文、71はヘラ描斜走文・円形刺突文・円形貼付文が施される。10～13・15は内外面赤彩の鉢で、12には1孔、15は突起を有す。赤彩された曲面が無い平らな板状の72は、この大きさで一枚の粘土板で作られている。貼付されていたもので器種不明である。石器

第1表 H1号住居址出土遺物観察表

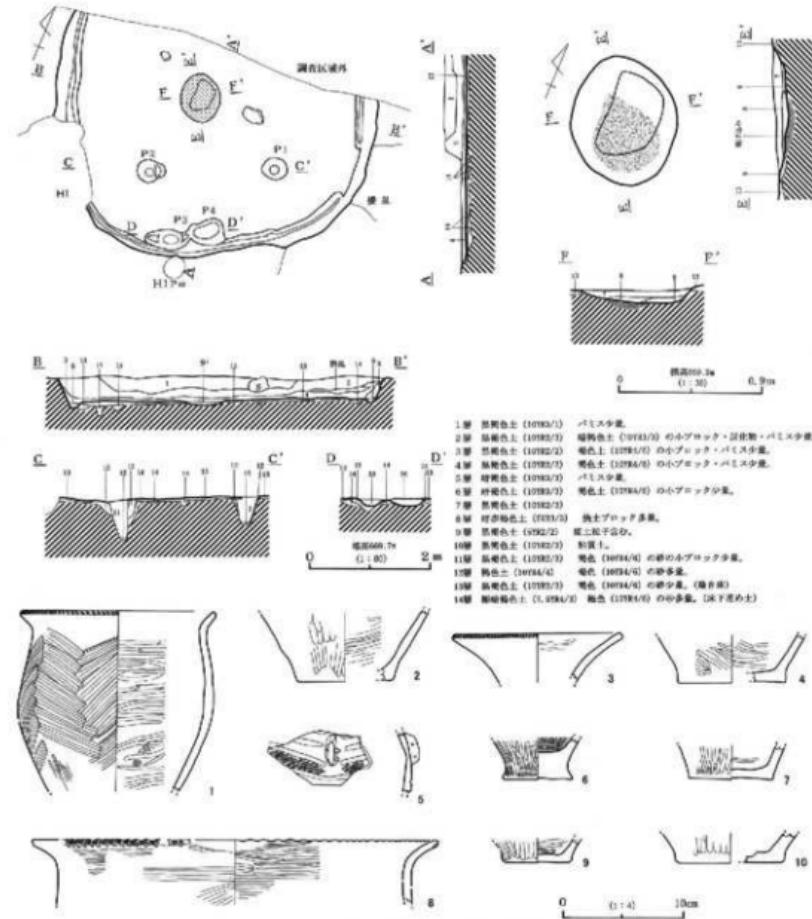
No.	種別	基標	法 線	内 面	底 形	縁 形	基 標	文 線	種 別	出土地點	
1	甕	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	—	1区、2区	
2	甕	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	—	2区	
3	甕	—	(2.4)	<3.3>	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	—	1区	
4	甕	4.7	—	6.0	<4.1>	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
5	甕	—	—	7.0	<10.0>	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区、2区	
6	甕	—	—	7.0	<10.0>	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
7	甕	—	—	7.0	<10.0>	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
8	甕	—	—	7.0	<10.0>	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
9	甕	—	—	7.0	<10.0>	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
10	甕	—	—	7.0	<10.0>	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
11	甕	—	(5.2)	<9.7>	ヘラテテ	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
12	甕	—	(6.0)	<9.7>	ヘラテテ	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
13	甕	—	—	8.0	<10.0>	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
14	甕	—	—	8.0	<10.0>	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
15	甕	—	—	8.0	<10.0>	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
16	甕	—	—	8.0	<10.0>	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
17	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
18	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
19	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
20	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
21	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
22	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
23	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
24	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
25	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
26	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
27	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
28	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
29	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
30	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
31	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
32	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
33	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
34	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
35	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
36	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
37	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
38	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
39	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
40	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
41	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
42	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
43	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
44	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
45	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
46	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
47	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
48	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
49	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
50	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
51	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
52	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
53	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
54	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
55	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
56	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
57	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
58	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
59	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
60	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
61	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
62	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
63	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
64	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
65	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
66	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
67	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
68	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
69	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
70	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
71	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	
72	甕	—	—	—	—	ヘラテテ	ヘラテテ	—	—	1区	

は石鏃5点・石錐（石錐？）未製品1点、未製品の打製石斧1点、砸石2点、磨石2点、横形削器1点、二次加工ある剥片1点がある。他に多量の石器製作の所産である剥片・細片・石核が出土した。石核は黒曜石7点・硬質砂岩1点、剥片・細片は硬質砂岩18点・黒曜石55点。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

## (2) H2号住居址

本址は、そ・た-101・102Grで検出された。F1号掘立柱建物址・H1号住居址に切られている。形態は隅丸方形を呈するとみられる。検出規模は東壁検出部1.1m、南壁4.1m、西壁検出部3.4mで最



第7図 H2号住居址実測図および出土遺物実測図



深の堀高は住居東壁で38cmを測る。主軸方位はN-25°-Wを示す。  
ピットが4個検出され、位置から主柱穴がP1・P2、P3・P4の2基

が出入りの施設である。P1・P2の柱間2m、柱痕はP1・P2で30cmを測る。P1は径40cm深さは47cm、P2は「8」の字で深さ67cm。P3は長径60cm短径40cm深さ16cm、P4は長径60cm短径30cm深さ20cmを測る。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は2~8cmで一部分除き浅い。周溝が東壁の一部を除き壁下を回る。炉は中央に設置されていた。長径80cm短径66cm深さ8cmの楕円形を呈する地床炉である。2cm程度の焼土の堆積があり、下部が焼け込んでいた。図示した遺物は弥生土器壺・甕、石器がある。その他土器片が556片有り内41片が内外面赤彩の鉢・高环片で壺片は小形壺7片である。3・10~23は壺、3・11~13は口縁外反し、面取りの口唇部に繩文・押捺・刻目が施される。14~23は頭部と胴部に文様帶を持つ。ヘラ描平行沈線間に14には繩文が、ヘラ描「U」字文の外に縦の櫛描条線文が、16には縦文とヘラ描斜走文、17には縦文が、18・22・23には横の櫛描条線文が施される。23は円形貼付文を持つ。15には2帯の横の櫛描条線文間に櫛描波状文が、19には3段の櫛描簾状文が施される。21には縦文・ヘラ描連続孤文と連続「コ」字文が施される。1・2・4~9は甕、1は短く口縁外反し口唇部に繩文が胴部には櫛描斜走文が羽状に施文される。5はヘラ描山形文内に繩文が施され、耳状の突起が貼付される。8の口唇部には縦文・ヘラ刻目が、頭部に横の櫛描条線文、胴部に櫛描斜走文が施される。24の口唇部には縦文・ヘラ刻目が、25・26には縦文が施文される。27・28には横の櫛描条線文・波状文が、28・29は縦の櫛描条線文施文後櫛描波状文が施される。31は櫛描斜走文、32は櫛描斜走文後ヘラの刺突文、33にはヘラ描斜走文が施文される。

石器は石鎚4点・石鎚木製品2点、打製石斧1点・打製石斧未製品1点、石錐2点、二次加工ある剥片1点、磨石(兼敲石)1点、敲石1点、磨製石斧片1点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。石核は黒曜石7点、剥片・細片は硬質砂岩9点・黒曜石81点。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

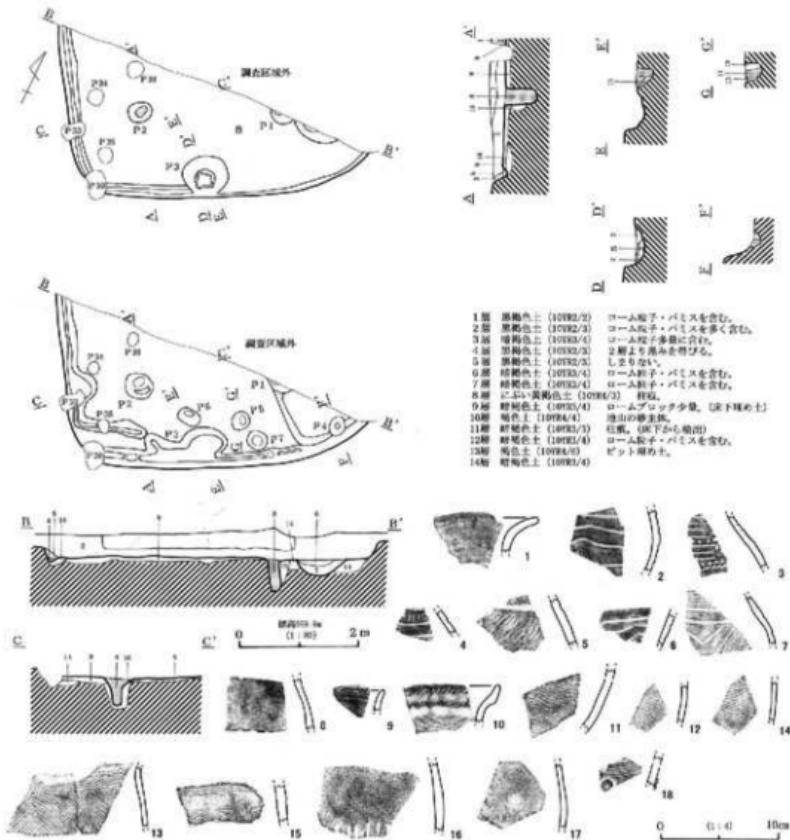
第2表 H2号住居址出土遺物観察表

No.	種別	形状	法量			内面	成形・焼・文様		備考	出土位置
			口径(Φ)	底面(Φ)	高さ(Φ)		外側	内側		
1	甕	壺	16.3	—	<10.0>	ハク面・ヘラミガキ	円形横輪文・H・ヘラミガキ	—	完全な壺	手延・正位
2	甕	甕	(7.9)	<5.8>	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	丸形横輪文	手延
3	甕	甕	(14.2)	<9.8>	—	ヘラミガキ	U横輪文	—	丸形横輪文	手延
4	甕	甕	—	6.8(8)	<4.0>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	丸形横輪文	手延
5	甕	甕	—	<4.4>	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	丸形横輪文	手延
6	甕	甕	—	<3.5>	—	ハク面・ヘラミガキ	ハク面・ヘラミガキ	—	完全な甕	P2
7	甕	甕	—	(7.0)	<2.8>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	丸形横輪文	手延
8	甕	甕	(33.6)	—	<5.4>	ヘラミガキ	U横輪文・H・ヘラミガキ・櫛の櫛描条線文(日本)	ヘラミガキ	丸形横輪文	手延・正位
9	甕	甕	—	5.6	<2.0>	ハク面・ヘラミガキ	ハク面・ヘラミガキ	—	丸形横輪文	手延
10	甕	甕	—	(18.0)	<10.0>	ナジ	ヘラミガキ	—	丸形横輪文	手延

### (3) H3号住居址

本址は、そ・た-99・100Grより検出された。P30~P36に切られている。大部分が現道の下に延びる。形態は隅丸方形を呈するとみられる。検出規模は、南壁4.6m、西壁検出部2.6mで、最深の壁

残高は南壁で30cmを測る。主軸方位はN-31°-Wを示す。ピットが7個検出され、位置から主柱穴がP1・P2、P3が出入口の施設である。P1・P2の柱間は2.4m、柱痕はP1が16cm・P2が長径26cm短径16cmを測る。P1は深さ60cm、P2深さ54cm、P3は長径76cm短径60cm深さ17cm、底面10cmから(第48図112)の台石が出土した。P4～P7は床下から確認された。P5・P6の柱痕14cmを測る。床面は全体に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は部分的で浅い。周溝が南壁から西壁の壁下を回る。



第9図 II-3号住居址実測図および出土遺物実測図

図示した遺物は弥生土器壺・甕、石器がある。その他土器片135片の内12片が内外面赤彩の鉢・高环で壺は小形壺1片である。1～8は壺、1は口縁外反し、面取されない口唇部に繩文が施される。3～5はヘラ描平行沈線間に3にはヘラ描刺空文が、4には櫛描刺空文が5には繩文が施される。2・6は胴部下位でヘラ描平行沈線下にヘラ描連續孤文が、2は繩文も施される。7にはヘラ描平行沈線下にヘラ描山形文が施される。9～18は甕、1は短く口縁外反し口唇部に繩文が施される。

2は受口状の口縁で口縁部に縄文、頸部に横の櫛描条線文が施される。11・12には櫛描波状文が、13は胴部縁の櫛描条線文施文後頸部に櫛描波状文が施される。14は櫛描斜走文後波状文が施される。15には縦の櫛描条線文後櫛描波状文が、16には縦の櫛描条線文後櫛描斜走文・ヘラ描刺突文が、17は櫛描斜走文後ヘラ描刺突文が施される。18は櫛描山形文・後円形貼付文が貼付される。

石器は石鎌1点、敲き痕のある磨石1点、光沢あるスリ面を持つ台石1点が出土した。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

#### (4) H4号住居址

本址は、そ・た-99・100Grより検出された。H5号住居址を切っている。形態は隅丸方形で北壁4.4m、南壁4.0m、東壁3.9m、西壁4.0m、最深の壁残高は北壁で22cmを測る。主軸方位はN-17°-Eを示す。ピットが12個検出され、位置から主柱穴がP1～P4で、柱痕は20～24cm、南北2.1m東西2.6・2.1mの台形に配置されている。深さはP1が60cm、P2が61cm、P3が41cm、P4が72cmを測る。P8が出入口の施設で、底面に3個の凹みがある。P5・P7・P9の深さは34～51cm、P9の柱痕は18cmを測り、上屋を支えた柱穴であろう。P6は径70cm深さ20cmで貯蔵穴か？床下からP10～P14が検出された。P12は柱痕が確認された。柱の取り替えが考えられる。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平均である。床下の掘方は2～12cmで浅い。周溝が3コーナーで切れながら壁下を回る。炉は主柱穴P1～P4でつくられる方形の中央に設置され、長径86cm短径56cm深さ8cmの楕円形の地床炉で、南側に2個の炉縁石（砂岩）が置かれる。8cm程度の焼土の堆積がある。

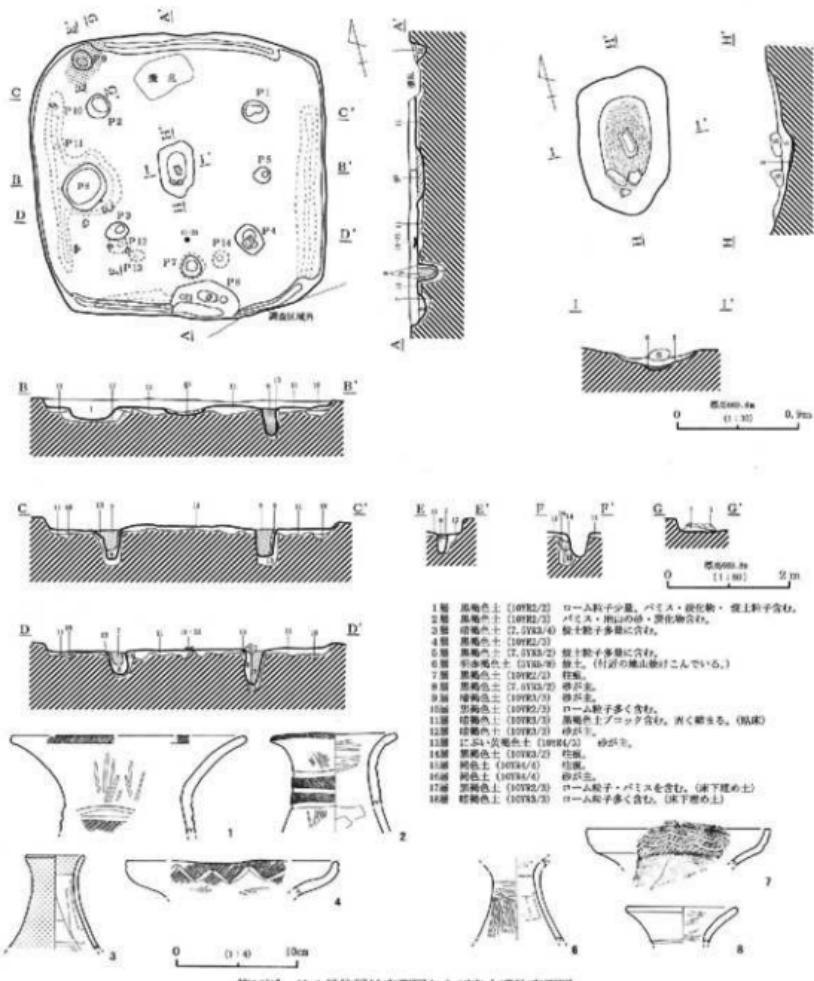
図示した遺物は弥生土器壺・甕・鉢・高杯、石器がある。その他土器片402片の内22片が内外面赤彩の鉢・高杯で壺はない。

壺は1～4・6～10・24～35、口縁部は外反するU字縁と、内擣して受口状の口縁がある。1・2・7・24～26の口唇部に縄文が施される。1・2・27頸部のヘラ描平行沈線間に縄文が施される。4・7・26口縁部は縄文後ヘラ描刺続山形文・ヘラ描波状文が施される。3・6は細頸の小形壺で3は唯一赤彩される。30・34・35にヘラ描平行沈線、31～33はヘラ描三角文内にヘラ描刺突文さらに周囲を櫛描条線文が、28はヘラ描沈線下にヘラ描山形文が重ねて、29には横の櫛描条線文が施される。

甕は11～20・36～61、口縁部は外反するU字縁11・12・15・16・18と、内擣して受口状の口縁42・43、直立するU字縁13・14もある。口唇部には縄文・ヘラの刻目15・16、縄文・押捺11・12、縄文36～38、ヘラの刻目39・40、押捺の41がある。42は口唇部に縄文受け口状U字縁部に縄文・ヘラ描刺続山形文、43は小形の甕で口唇部に縄文が直立する口縁に縄文・ヘラ描刺続山形文、44は面取された口唇部に縄文が口縁部に縄文・ヘラ描刺続山形文が施される。

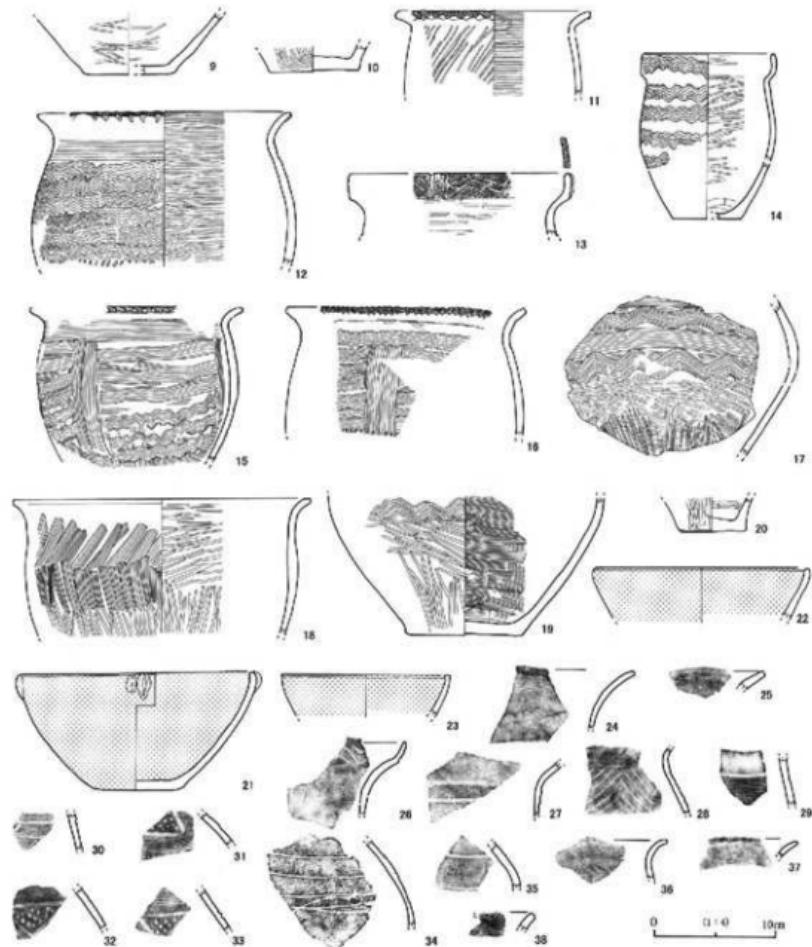
第3表 H4号住居址出土遺物観察表

No.	遺物名	基盤	法 線	成 形・施 工・文 標				標 号	出土位置	
				口縁(高さ)	底面(幅)	高さ(厚)	内・外			
1	壺	円	(19.5)	-	<6.0>		ヘラミガキ	ヘラミガキ、U字縁、直壁、口縁内側、底面、内擣、U字縁、ヘラミガキ	四輪窓	赤文
2	甕	円	10.5	-	<4.0>		ヘラミガキ、ヘラナゲ	ヘラミガキ、U字縁、直壁、口縁内側、底面、内擣、U字縁、ヘラミガキ	四輪窓	赤文
3	甕	円	(5.0)	-	<2.8>		口縁ミガキ	口縁ミガキ、直壁、頭部ヘラナゲ	三段窓	日本
4	甕	円	(5.0)	-	<2.8>		ミガキ	口縁ミガキ、直壁、頭部ヘラナゲ	三段窓	日本
5	甕	円	(18.2)	-	<3.0>		ヘラミガキ	ヘラミガキ、直壁、口縁内側、底面	三段窓	日本
6	甕	円	-	-	<6.0>		頭部ヘラナゲ	頭部ヘラナゲ、口縁ミカタ→ミカキ	三段窓	日本
7	甕	円	(15.3)	-	<3.1>		ヘラミガキ	ヘラミガキ、「腰壁構造と口縁」口縁内側、U字縁、ヘラミガキ	四輪窓	「区
8	甕	円	9.3	-	<3.0>		ハサミ	ハサミ	四輪窓	「区」
9	甕	円	-	(7.0)	<2.0>		ヘラミガキ	ヘラミガキ	四輪窓	「区」
10	甕	圓	-	5.6	<2.9>		ミガキ	口縁ミガキ、直壁、頭部ヘラナゲ	三段窓	日本
11	甕	圓	(16.2)	-	<2.7>		ミガキ	口縁ミガキ、直壁、頭部ヘラナゲ	三段窓	日本
12	甕	圓	(21.0)	-	<1.8>		ミガキ	口縁ミガキ、直壁、頭部ヘラナゲ、頭部ヘラナゲ	四輪窓	日本
13	甕	圓	(18.6)	-	<2.9>		ミガキ	口縁ミガキ、直壁、頭部ヘラナゲ、頭部ヘラナゲ	四輪窓	日本
14	甕	圓	(11.3)	(5.6)	(13.7)		ヘラミガキ	ハサミ、ヘラミガキ、口縁内側、底面	四輪窓	1・2・IV
15	甕	圓	(17.6)	-	<13.3>		ミガキ	口縁ミガキ、頭部ヘラナゲ	四輪窓	日本
16	甕	圓	(20.0)	-	<10.6>		ミガキ	L型腰壁文(しりわ)・泡吹、櫛描波状文(6.0cm)、頭部櫛描波状文(6.0cm)・泡吹、口縁内側・ミカタ	四輪窓	日本
17	甕	圓	-	-	-		ハサミ	ハサミ	四輪窓	日本
18	甕	圓	24.8	-	<11.3>		ヘラミガキ	ハサミ、頭部ヘラナゲ	四輪窓	日本
19	甕	圓	-	9.8	<11.3>		ミガキ	ハサミ、頭部ヘラナゲ	四輪窓	日本
20	甕	圓	-	7.8	<1.5>		ミガキ	ハサミ、頭部ヘラナゲ	四輪窓	日本
21	甕	圓	20.5	底面	クレマチス		ヘラミガキ、直壁	ヘラミガキ、直壁	四輪窓	日本
22	甕	圓	(18.1)	-	<1.3>		ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	四輪窓	日本
23	甕	圓	(14.0)	-	<4.5>		ミガキ、直壁	ミガキ、直壁	四輪窓	日本



第10図 H-4号住居址実測図および出土遺物実測図

頸部から胴部の文様は、頸部横の櫛描条線文後12に胴部波状文、15に胴部縦の櫛描条線文さらにその後波状文と横の条線文、16に縦の櫛描条線文さらにその後波状文が施される。17には横の櫛描条線文間に波状文が、18には櫛描斜走文が縦の羽状施文される。胴部片では57の櫛描斜走文、49~51の櫛描波状文・ヘラの刺突文、56の櫛描斜走文・ヘラの刺突文、52~55の頸部横の櫛描条線文後胴部櫛描斜走文がある。

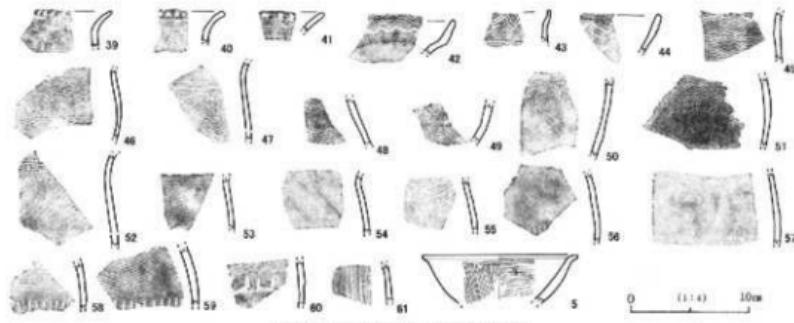


第11図 H4号住居址出土遺物実測図

直立する口縁の14は、口縁部から胴下部まで櫛描波状文が5帯施される。13の直立する口縁部には縄文・ヘラ描連続山形文の後棹状の突起が2本一対で貼付される。

鉢は21~23内外面赤彩される。21は大形で口縁部に2個一対の楕円形の突起が4カ所に貼付される。23はしっかり面取されている。5は短く水平な口縁部を有す無彩の高坏である。図示不可能な赤彩され水平に開く口縁部の高坏もある。

石器は石鏃4点、打製石斧未製品1点、石錐？1点、二次加工ある剥片1点、赤色顔料が付着した



第12図 H4号住居址出土遺物実測図

磨石1点、磨石（兼敲石）1点、敲石1点、砥石1点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。石核は黒曜石5点、剥片・細片は硬質砂岩14片・赤褐色チャート1片、黒曜石135片。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

#### (5) H5号住居址

本址は、た・ち-97・98Grに位置する。H4号に切られている。形態は隅丸方形を呈するとみられる。検出規模は、東壁検出部1.6m、西壁検出部1.9mで、最深の壁残高は東・西壁で23cmを測る。主軸方位はN-2°-Wを示す。ピットが12個検出され、位置から主柱穴がP1-P2で、東西柱間2.3m、深さはP1が66cm、P2が74cmを測り深い。P5は径50cm深さ35cmで棟持柱とみられる。P4は径24cm深さ12cm、P3は長径36cm短径30cm、P7-P12は床下から検出された。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は4-20cmであった。周溝が北壁東寄りから東壁、西壁の一部にみられる。

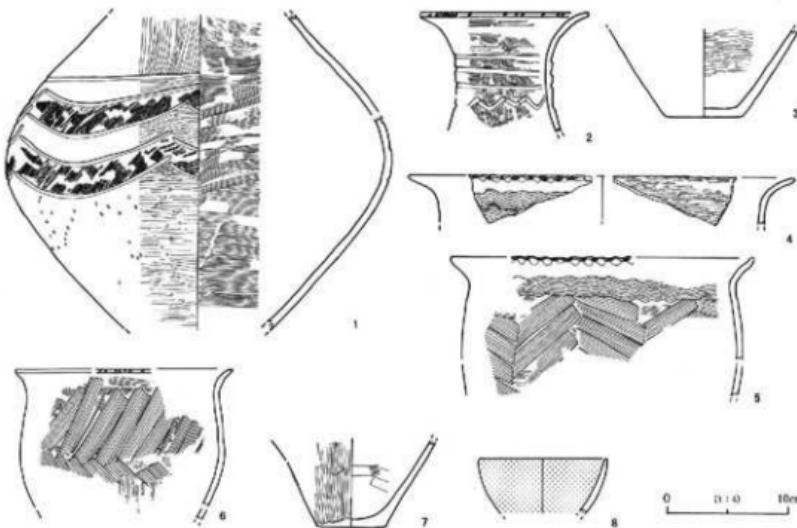
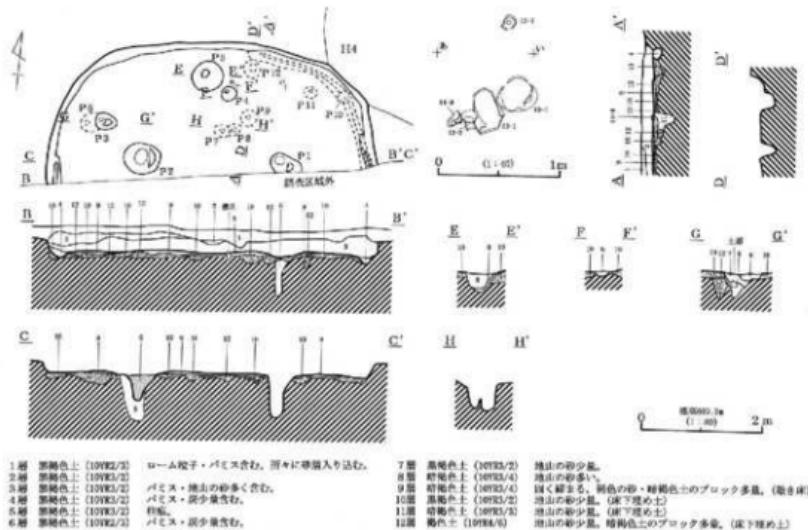
図示した遺物は弥生土器壺・甕・鉢・高環・土製品、石器がある。その他土器片256片の内14片が内外赤彩の鉢・高環で赤彩の壺片は1点のみである。

壺は1・2・9・10・12-22、口縁部は外反する口縁2と、内彎して受口状の口縁12があり、共に口唇部に繩文が施される。1は大形の壺で胴部中央にヘラ描沈線・ヘラ描連続孤文内に繩文が施文される。2は刷毛目調整が残る頸部にヘラ描平行沈線を3本、その下にヘラ描連続山形文が施される。17は外面黒色を呈し、頸部から胴部中央までヘラ描平行沈線で画された文様帶にヘラ描連続山形文やヘラ描山形文が重ねて、さらにその下部にヘラ描連続山形文が施文される。16も同様にヘラ描平行沈線の上下にヘラ描山形文・連続山形文が施される。14の頸部には横の櫛描条線文と縦の櫛描条線文が、15の頸部にはヘラ描平行沈線間に繩文が施される。18はヘラ描沈線・ヘラ描刺突列・繩文・ヘラ描連続山形文が、19・20はヘラ描「U」字文内に縦の櫛描条線文が施文される。「U」字文の沈線には赤彩される。21・22はヘラ描沈線の下に繩文が施文され、ヘラ描山形文が重ねて施される。

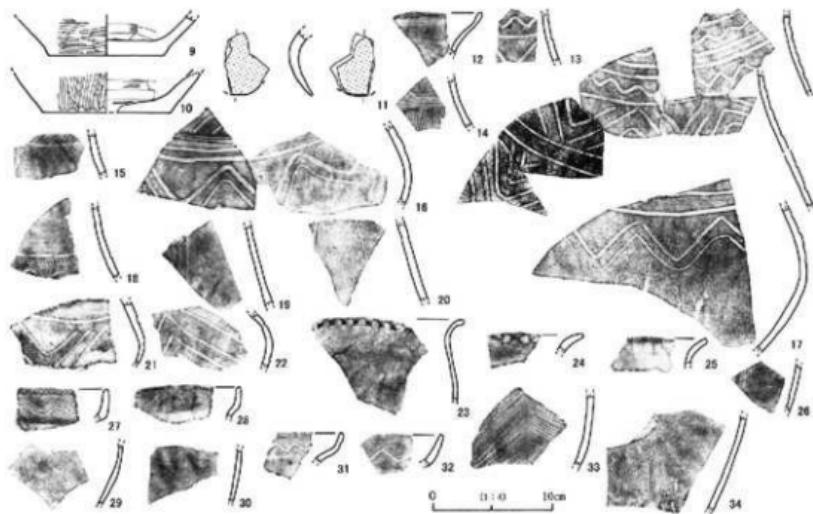
甕は3-7・23-34、口縁部は外反する口縁4-6・23-25と、内彎して受口状の口縁28、直立する口縁26・27もある。口唇部には繩文・押捺4・5・23・24、繩文25-29、ヘラの刻目6がある。26

第4表 H5号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法 異			底 形・調 様・文 横		備 考	出土位置
			口縁(直)	口縁(彎)	底面(直)	内 形	外 形		
1	甕	1-2	-	△(6.5)	△(6.5)	八角形	直縁直底(1.1)・ヘラ描リニア・ヘラ描平行・連続孤文	1段	1段
2	甕	3-7	△(6.4)	△(2.2)	△(2.2)	八角形	八角形・八角底・直縁直底(1.1)・ヘラ描平行・連続孤文	1段	1段
3	甕	23-25	-	△(2.1)	△(2.1)	八角形	八角形・八角底・直縁直底(1.1)・ヘラ描平行・連続孤文	1段	1段
4	甕	26-27	-	△(1.1)	△(1.1)	八角形	八角形・八角底・直縁直底(1.1)・ヘラ描平行・連続孤文	1段	1段
5	甕	28	△(2.1)	-	△(2.1)	八角形	八角形・八角底・直縁直底(1.1)・ヘラ描平行・連続孤文	1段	1段
6	甕	29	-	△(2.1)	△(2.1)	八角形	八角形・八角底・直縁直底(1.1)・ヘラ描平行・連続孤文	1段	1段
7	甕	30	△(2.1)	△(2.1)	△(2.1)	八角形	八角形・八角底・直縁直底(1.1)・ヘラ描平行・連続孤文	1段	1段
8	甕	31	△(2.1)	△(2.1)	△(2.1)	八角形	八角形・八角底・直縁直底(1.1)・ヘラ描平行・連続孤文	1段	1段
9	甕	32	△(2.1)	△(2.1)	△(2.1)	八角形	八角形・八角底・直縁直底(1.1)・ヘラ描平行・連続孤文	1段	1段
10	甕	33	△(2.1)	△(2.1)	△(2.1)	八角形	八角形・八角底・直縁直底(1.1)・ヘラ描平行・連続孤文	1段	1段
11	甕	34	△(2.1)	△(2.1)	△(2.1)	八角形	八角形・八角底・直縁直底(1.1)・ヘラ描平行・連続孤文	1段	1段



第13図 H-5号住居址実測図および出土遺物実測図



第14図 H5号住居址出土遺物実測図

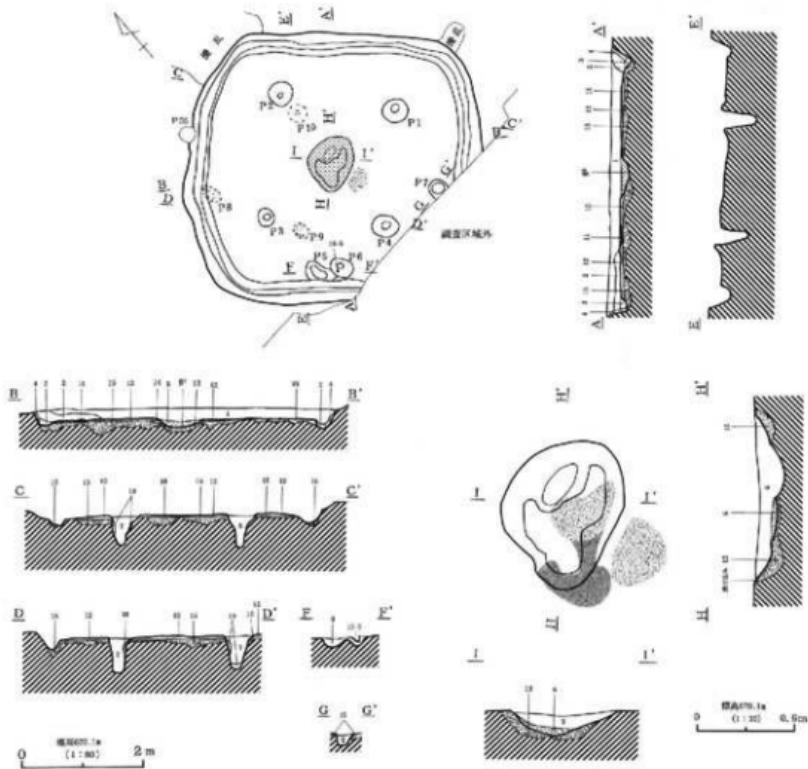
は口唇部に繩文直立する口縁部に櫛描波状文、27は口唇部と直立する口縁部に繩文が、28・29は口唇部に繩文が口縁部に繩文・ヘラ描連続山形文が施される。4・5の頸部には櫛描波状文胴部には櫛描斜走文が、6・30・34は櫛描斜走文が、34にはヘラ描刺突列も施される。31は縦の櫛描条線文後櫛描波状文が、23・32・33には格子目状に櫛描斜走文が施される。8は内外面赤彩の鉢、11は外面赤彩の鉢である。石器は石鍬1点・石鎌未製品2点、打製石斧未製品1点、横形削器1点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。石核は黒曜石5点、剥片・細片は黒曜石25片・黒色泥岩3片・硬質砂岩2片がある。本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

#### (6) H6号住居址

本址は、そ・た-90・91Grに位置し、P56に切られている。形態は隅丸方形で北壁4.0m、南壁検出部1.7m、東壁3.8m、西壁検出部2.1m、最深の壁残高は東壁で23cmを測る。主軸方位はN-40°-Eを示す。ピットが10個検出され、位置から主柱穴がP1-P4で、南北2.0m東西2.0mの方形に配置されている。P1は径40cm深さ53cm、P2が径40cm深さ52cm、P3が長径30cm短径26cm深さ61cm、P4が長径40cm短径34cm深さ57cmを測る。床下から検出されたP9は深さ50cm P10は深さ63cmを測り、主柱穴P2・P3より内側に配置されている。位置等からP2・P3以前の主柱穴とみられる。P5・P6が入口の施設で、P6上面から第15図の甕が出土した。床面から検出されたP7と床下下

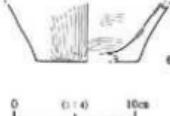
第5表 H6号住居址出土遺物観察表

No.	種別	断面	通量			成形・装飾・文様		備考	出土位置
			口径(目)	底面(目)	側面(目)	内面	外面		
1	弥生	圓	-	(5.6)	<3.7>	ヘラフテ	ヘラフテ	四輪文鏡	Ⅱ区
2	弥生	杏	-	(3.2)	<1.8>	ハケ豆	ハケ豆	四輪文鏡	Ⅱ区
3	弥生	△	-	(7.8)	<3.1>	ハケ豆	ヘラフテ半	四輪文鏡	Ⅱ区
4	弥生	圓	-	(4.6)	<4.2>	ハケ豆→ヘミガキ	ヘラフテ半	四輪文鏡	Ⅱ区
5	弥生	圓	(12.6)	5.2	10.2	ヘラミガキ	櫛描波状文・櫛描斜走文文、ヘラミガキ	完全葉形	Ⅱ区、Ⅲ区
6	弥生	圓	-	(8.6)	<4.8>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	四輪文鏡	Ⅱ区
7	弥生	圓	-	(8.6)	<1.7>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	四輪文鏡	Ⅱ区
8	弥生	圓	-	4.2	<1.8>	ヘラミガキ	ヘラフテ	完全葉形	検出場
9	弥生	ニーチコフ(角鉢)	正五	-	<3.4>	凹部・周部・ハケ豆	ヘラミガキ	完全葉形	Ⅰ区
10	弥生	林	(18.6)	-	<7.2>	ヘラミガキ→赤色斑點	ヘラミガキ→赤色斑點	四輪文鏡、完全葉形	丸を有す Ⅰ区、Ⅱ区



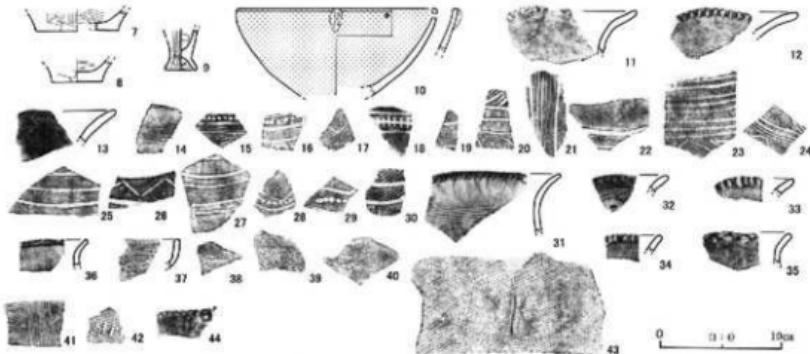
- 1層 黒褐色土 [10YR3/2] パミス・炭化物粒子・褐色の砂ブロック少見。  
 2層 黒褐色土 [10YR2/3] パミス・炭化物粒子・ブロック少見。  
 3層 塗覆土 [10YR3/4] 褐色の砂多量に含む。  
 4層 塗覆土 [10YR3/4] 褐色の砂多量に含む。(3層より多い)  
 5層 塗覆土 [10YR2/3] 焼成の小ブロックを含む。  
 6層 明褐色土 [10Y6/9] 粘土。  
 7層 黒褐色土 [10YR2/2] 黒褐色土。  
 8層 黒褐色土 [10YR2/3] 黑色の砂少見。

- 9層 黒褐色土 [10YR2/2] 黑色の砂少見。  
 10層 黑褐色土 [10YR2/4] 黑色の砂多量に含む。  
 11層 塗覆土 [10YR2/4] 黑色の砂多量・上部が上位の床面。  
 12層 黑褐色土 [10YR2/3] 黑色の砂・パミス少量含む。(底床)  
 13層 塗覆土 [5YR2/2] かの粗粒性土。  
 14層 塗覆土 [7.5YR1/3] 粘土粒多量。  
 15層 黑褐色土 [10YR2/3] 黑山の砂少見。(床下埋め土)



第15図 H6号住居址実測図および出土遺物実測図

ら検出されたP8は東西壁中央下に位置し、上屋を支えたものであろうか。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は4~40cmで部分的に深い。周溝が検出部壁下を全周する。炉は主柱穴P1~P4でつくられる方形の中央に設置され、長径90cm短径76cm深さ15cmの楕円



第16図 H 6号住居址出土遺物実測図

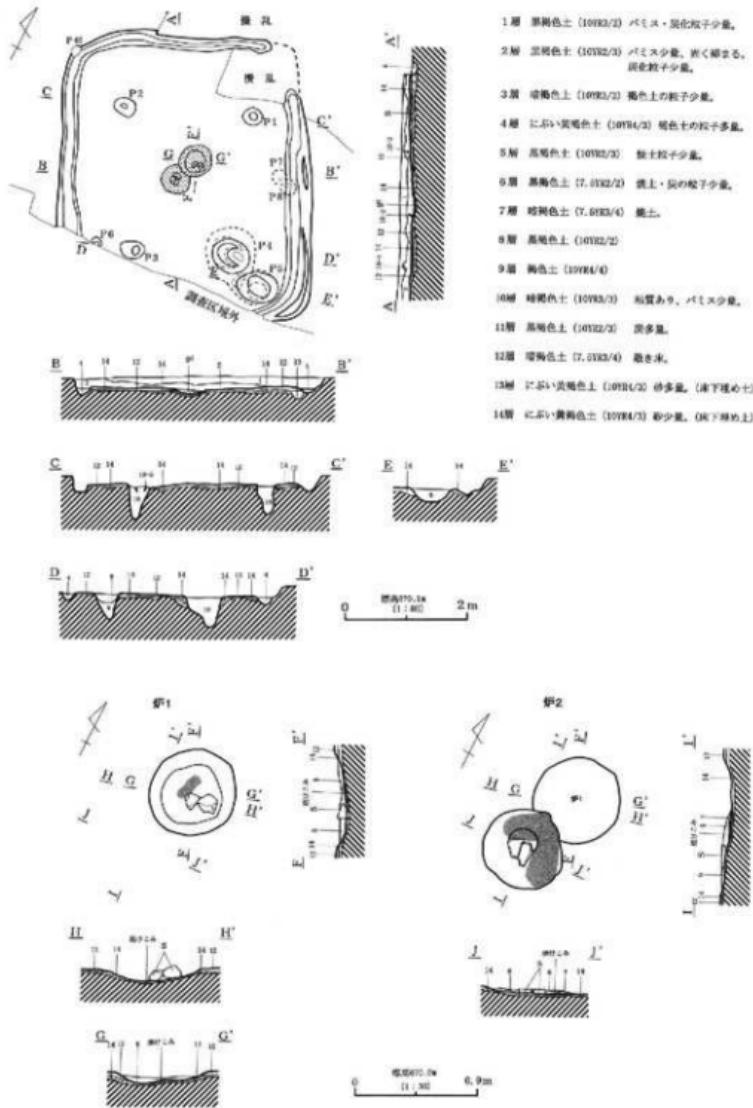
形の地床炉である。4cm程度の焼土の堆積がある。炉の南側は掘方上部まで焼け込んでいる。

図示した遺物は弥生土器壺・甕・鉢・ミニチュア土器・石器がある。その他土器片628片の内56片が内外面赤彩の鉢・高杯で赤彩された壺は4片ある。壺は1~3・11~30がある。11~13口縁部外反し11・12の口唇部にはヘラの刻目が、13には縄文が施される。14~20の頸部の文様帶には横の櫛描条線文、ヘラ描平行沈線間にヘラ描刺突列が施文される。21~30の胴部上半から中央部の文様帶には、ヘラ描「U」字文内に縦の櫛描条線文が、ヘラ描平行沈線間やヘラ描孤文・ヘラ描山形文の区画内に縦文・ヘラの刺突列・ヘラ描刺突山形文などが施される。

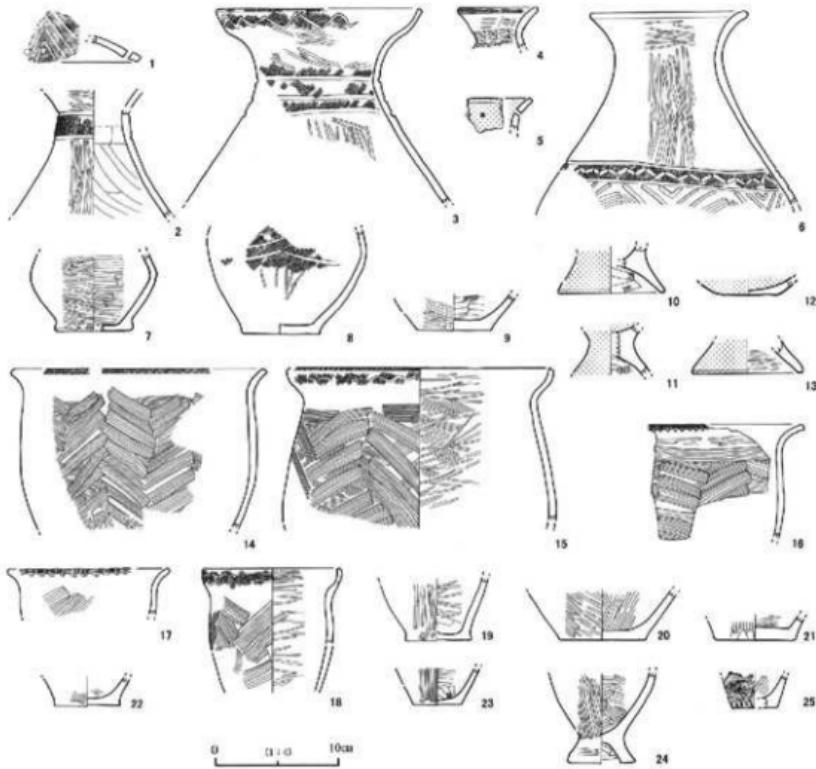
甕は4~8・31~43、口縁部は外反する口縁5・31~36と、直立する口縁37がある。口唇部には縦文・押捺31、縄文36、ヘラの刻目32~34、押捺35が施文される。32~33は短い口縁部に櫛描波状文が施される。直立する口縁37の口唇部は面取され縦文が、口縁部には櫛描波状文が施文される。38~40の胴部には櫛描波状文が、42は櫛描波状文にヘラの刺突列が、43には櫛描斜走文が施される。41は縦の櫛描条線文・櫛描波状文・縦の櫛描条線文の順に施文されている。44は円形の刺突文に円形貼付文が貼付される。5は小形で頸部に櫛描波状文、胴上半部に櫛描斜走文が施文される。9は台付甕のミニチュア品。

第6表 H 7号住居址出土遺物観察表

No.	種別	基準	法	内	外	備考	出土位置	
				寸法(高)	底面(横)	高底(厚)		
1	牛生	壺	-	-	<10	/	ヘラミガキ ナメ	ヘラミガキ山形文でなく、ヘラミガキ ナメ
2	牛生	甕	-	-	<16	/	ヘラミガキ	ヘラミガキ、頭部横文・外縁、ヘラ横平行・外縁
3	牛生	壺	(17.0)	-	<16	/	ヘラミガキ	ヘラミガキ、頭部横文・外縁、頭部横平行・外縁、頭部横文・外縁
4	牛生	甕	6.0	-	<3.0	/	ヘラミガキ	ヘラミガキ
5	牛生	甕	-	-	-	-	ヘラミガキ→赤彩波状	ヘラミガキ→赤彩波状
6	牛生	甕	13.1	-	<16	/	ヘラミガキ	ヘラミガキ、ヘラ描平行斜走文・外縁、ヘラミガキ→赤彩波状
7	牛生	甕	(6.2)	<5	4.0	/	ヘラミガキ	ヘラミガキ
8	牛生	甕	-	5.4	<3	/	ヘラミガキ	ヘラミガキ
9	牛生	甕	-	6.0	<3.0	/	ヘラミガキ	ヘラミガキ
10	牛生	臼付甕	-	(8.8)	<16	/	ヘラミガキ→赤彩波状・頭部横文	ヘラミガキ→赤彩波状・頭部横文
11	牛生	高杯	-	-	<4.0	/	ヘラミガキ→赤彩波状	ヘラミガキ→赤彩波状
12	牛生	杯	-	5.0	<1.5	/	ヘラミガキ→赤彩波状	ヘラミガキ→赤彩波状
13	牛生	高杯	(0.2)	<2	1.7	/	ヘラミガキ→赤彩波状	ヘラミガキ→赤彩波状
14	牛生	甕	(2.1)	-	<1.3	/	ヘラミガキ→ヘラミガキ	ヘラミガキ、口縁波状文・外縁、体部横斜波状文 (赤文)
15	牛生	甕	(22.0)	-	<1.2	2.7	ヘラミガキ	ヘラミガキ、口縁波状文・外縁、口縁波状文・外縁、ヘラミガキ→赤彩波状文、体部横斜波状文、体部横斜波状文 (赤文)
16	牛生	甕	(15.4)	-	<1.3	/	ヘラミガキ	ヘラミガキ、口縁波状文・外縁、體部横斜波状文、體部横斜波状文 (赤文)
17	牛生	甕	(13.4)	-	<1.3	/	ヘラミガキ	口縫波状文・外縁、體部横斜波状文 (赤文)
18	牛生	甕	11.5	-	<1.3	/	ヘラミガキ	口縫波状文 H1 線、ヘラミガキ (赤文)、体部横斜波状文 (赤文)
19	牛生	甕	-	5.5	<1.2	/	ヘラミガキ→ヘラミガキ	ヘラミガキ→ヘラミガキ
20	牛生	甕	-	(7.0)	<4	1.7	ヘラミガキ	ヘラミガキ
21	牛生	甕	-	6.8	<2	1.7	ヘラミガキ	ヘラミガキ
22	牛生	甕	-	(5.4)	<2	4.2	ヘラミガキ	ヘラミガキ
23	牛生	甕	-	4.0	<3	/	ヘラミガキ	ヘラミガキ
24	牛生	臼付甕	-	5.6	<2.5	/	ヘラミガキ、臼付ヘラミガキ	ヘラミガキ
25	牛生	ミニチュア	-	(3.6)	<2	/	ヘラミガキ	ヘラミガキ、頭部横斜波状文



第17図 H-7号居住址実測図



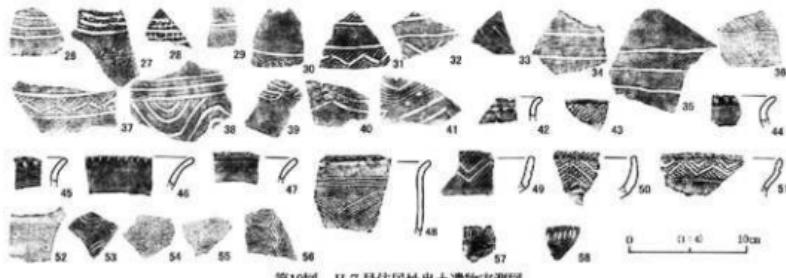
第184図 H7号住居址出土遺物実測図

石器は石鎚2点、石鎚未製品6点、石錐1点、二次加工ある剥片1点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。石核は黒曜石20点、剥片・細片は黒曜石1166片、硬質砂岩5片、緑色チャート1片がある。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

#### (7) H7号住居址

本址は、そ・た-88・89Grに位置しP40に切られ、北東コーナーを攪乱で壊されている。形態は開丸長方形で北壁3.6m、南壁検出部0.7m、東壁4.3m、西壁検出部2.9m、最深の壁残高は東壁で18cmを測る。主軸方位はN-30°-Wを示す。ピットが8個検出され、位置から主柱穴がP1～P4で、南北2.3m東西2.1・1.7mの南側が狭い台形に配置されている。P1は径32cm深さ45cm、P2が長径36cm短径28cm深さ53cm、P3が長径42cm短径28cm深さ47cm、P4が長径62cm短径54cm深さ56cmを測る。P5は貯藏穴であろうか、長径70cm短径50cm深さ22cmで炭が多量に出土した。P6は径18cm深さ6cm。床下からP7・P8が検出され、P7の深さ21cm P8は深さ18cmを測る。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は4～10cmで浅い。周溝が攪乱部分を除いて検出部壁下



第19図 H7号住居址出土遺物実測図

を全層する。炉は主柱穴P1～P4でつくられる方形の中央から新旧2基が検出された。南側の炉2個が古い。炉1は径54cm深さ6cmの円形地床炉である。石質輝石安山岩の炉縁石2個が置かれる。焼土粒子が少量で焼上はみられず、炉底面は焼け込んでいた。炉2は径50cm深さ4cmの円形地床炉である。石質輝石安山岩と流紋岩の炉縁石2個が置かれる。僅か1cmほどの焼土が堆積していた。

図示した遺物は弥生土器の蓋・壺・台付壺・甕・台付甕・鉢・高杯・ミニチュア土器、石器がある。その他土器片854片の内54片が内外面赤彩の鉢・高杯で赤彩された壺は2片ある。1は無彩の2孔を有す蓋でヘラ描平行沈線で重ねて施文される。壺はいずれも無彩で2～9・26～41がある。2は頸部の文様帯にヘラ描平行沈線を巡らし中に縄文を施す。受口状口縁の3は、口唇部に縄文が口縁部に縄文・ヘラ描連續山形文、頸部にヘラ描平行沈線・縄文が施文される。4は小形で口唇部に縄文、頸部に横縦状文・横描波状文が施され、頸部のみ赤彩される。5は残存する内外面が赤彩され、口縁部に2孔を有す。6は胴部中央に文様帯を持ちヘラ描平行沈線間に縄文・ヘラ描連續山形文がその下部にはヘラ描山形文が重ねて施文される。8はヘラ描連續弧文内に縄文が施文される。26は頸部にヘラ描平行沈線、27はヘラ描平行沈線内に縄文、28はヘラ描平行沈線内に横描刺突列文が施文される。30～37の胴部上半から中央部の文様帯には、ヘラ描平行沈線に縄文・横縦状工具の刺突列・ヘラ描連續山形文・横描条線文・横縦状文などが施される。38にはヘラ描平行沈線・ヘラ描孤文が重ねて、40にはヘラ描連續弧文が41にはヘラ描山形文と横描山形文が施文される。

甕は14～24・42～58、口縁部は外反する口縁14・16・17・44～48と、直立する口縁18・49・50、受口状口縁15・51がある。口唇部17には縄文・押捺、14・15・47～51には縄文、46はヘラの刻目、44に押捺、16・45にヘラの刻目・縄文が施文される。15・18・49～51の直立する口縁部と受口状口縁部には、縄文・ヘラ描波状文（15・18）・ヘラ描連續山形文（49～51）が施文される。16・48の頸部には横の横描条線文、胴部には縦羽状の横描斜走文が施文される。14・15・17・18の胴部には縦羽状の横描斜走文が施文される。52～54には横描波状文、55・56には横描波状文・縦の横描条線文・縦の波状文が、57・58には横描波状文・横縦状工具とヘラの刺突列文が施文される。24は小形の台付甕。12は内外面赤色塗彩の鉢、10は台付壺、11・13は高杯。

石器は石鎌7点、石鎌未製品6点、石錐1点、磨製石斧1点、打製石斧1点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。黒曜石の原石3点、石核は黒曜石16点・硬質砂岩1点、剥片・細片は黒曜石707片・硬質砂岩9片・緑色チャート1片・チャート1片・千枚岩1片がある。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される

#### (8) H8号住居址

本址は、そー94・95Grに位置する。大半が調査区域外の現道下に延びており、調査範囲からは柱穴や炉は検出されなかった。南壁検出部2.5m、西壁検出部1.1m、最深の壁残高は南壁で28cmを測る。

床面は平坦であるが軟弱であった。床下の掘方は、南壁下に5cmほどのテラスを残して掘られている。全体層序第Ⅲ層中から掘り込まれているようである。



第20図 H8号住居址実測図及び出土遺物実測図

図示した遺物は弥生土器の壺・甕・高杯がある。その他土器片93片の内3片が内外面赤彩の鉢・高杯で赤彩された壺はない。1は口縁部短く緩く外反する高杯の環部で、内外面が赤色塗装される。

壺はいずれも無彩で2~7がある。2は口縁部外反し頸部まで無文である。3~7は胴部片である。3は「U」字形内に櫛描条線文・ヘラ描平行沈線文内に繩文が、4はヘラ描平行沈線文内とヘラ描山形文内に横の櫛描条線文が施される。5はヘラ描平行沈線文の下位にヘラによる刺突列を斜めに「U」の字に配し、内部に櫛描条線文を施す。6はヘラ描平行沈線文内に繩文・櫛描条線文・ヘラ描連続山形文が施される。7はヘラ描平行沈線・繩文が施される。

甕は8~18、8・9の口縁部は短く外反し、口唇部に繩文が施文される。10~13には櫛描波状文・縦の櫛描条線文が、11・12には櫛描波状文が、15の頸部には横の櫛描条線文・櫛描斜走文が、16~18には櫛描斜走文、17にはヘラの刺突列文が施文される。

他に黒曜石の石核2点、硬質砂岩の剥片1片、黒曜石の剥片・細片10片が出土した。

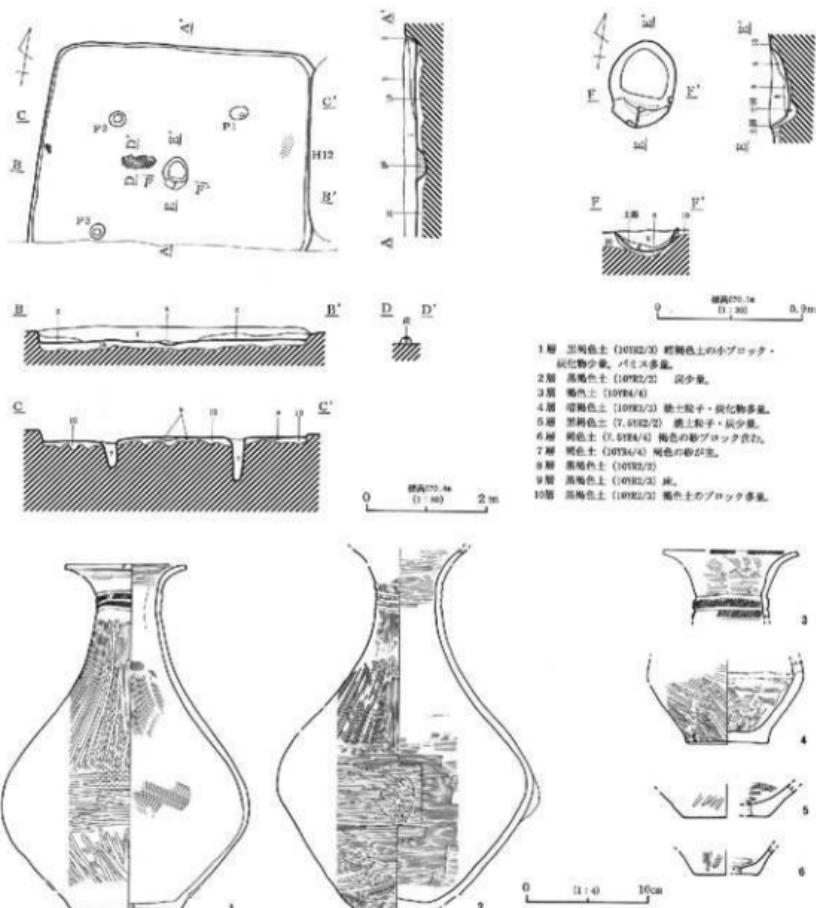
本址は、出土量は少ないが、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定されよう。

#### (9) H9号住居址

本址は、セ・ソ-81・82Grに位置する。H12号住居址に切られている。形態は隅丸方形であろう。北壁4.1m、東壁検出部3.1m、西壁検出部3.2m、最深の壁残高は西壁で22cmを測る。主軸方位はN-2°-Wを示す。ピットが3個検出され、位置から主柱穴がP1~P3で、南北柱間1.9m東西2.0m西側が狭い台形に配置されている。P1は長径30cm短径22cm深さ72cm、P2が径26cm深さ46cm、P3が径24cm深さ58cmを測る。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は8cm前後である。周溝は見られなかった。P1と東壁間の床面に南北80cm東西20cm厚さ5cmの焼土がみられた。炉の西側と西壁下中央に床面から7cm浮いて炭化材が出土した。

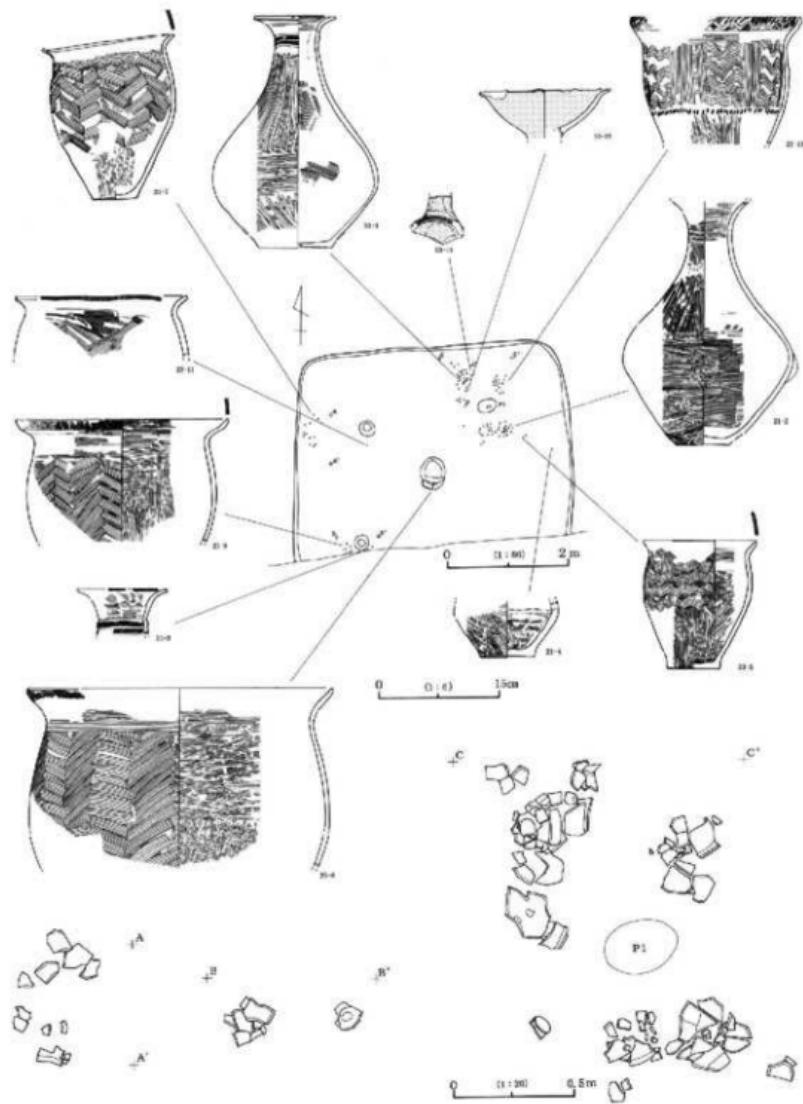
炉は住居中央部から検出された。長径50cm短径40cm深さ12cmの楕円形地床である。炉の南縁にはガリ石の代用であろう甕（第23図8）が逆位に置かれていた。この土器を固定するためか土器の下部の炉掘方は、他より5cmほど深めである。炉の覆土は、焼上粒子が少量で焼土はみられなかった。

遺物は多量の土器がP1・P2の周辺床面より出土した。図示した遺物は弥生土器の壺・甕・鉢・高杯、土製品、石器がある。その他土器片257片の内14片が内外面赤彩の鉢・高杯で赤彩された壺は

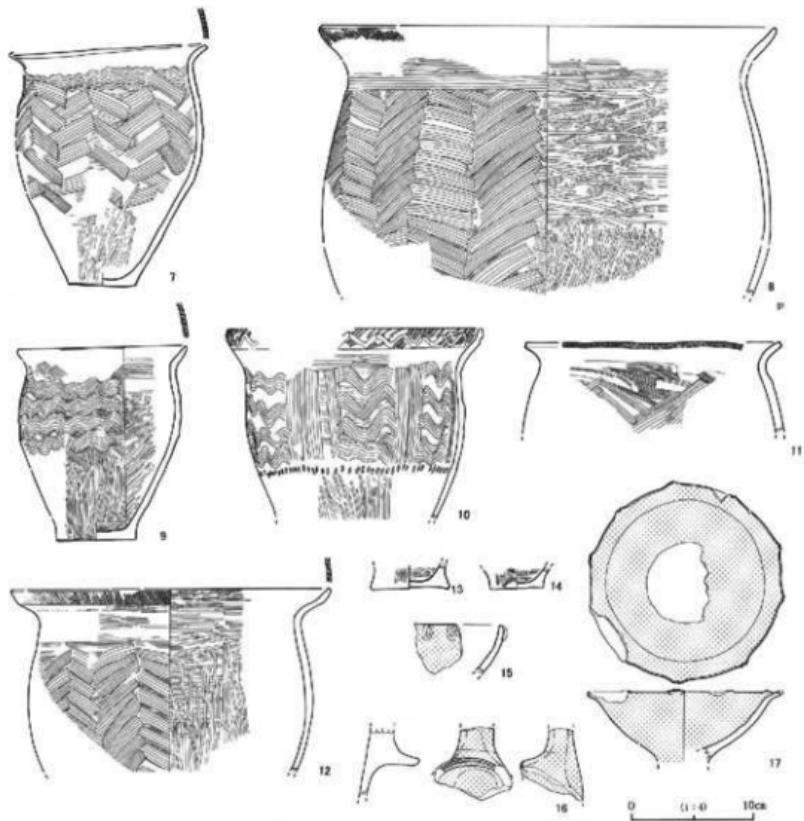


第21図 H9号住居址実測図および出土遺物実測図

5片ある。壺はいずれも無彩で1~6・18~32がある。1は細い頸部から短く外反する口縁部を持ち、胴部は中央部の下位に最大径を持ち無花果状を呈する。面取された口唇部に縄文、頸部の文様帯にヘラ描平行沈線を巡らし中に縄文を施す。外面のミガキはハケ調整が窓え入念でない。胴部上半は縦に胴部中央は横に胴部下半は斜めにミガかれる。頸部から胴部中央下位にかけて疎らに僅かな範囲に赤色塗彩される。2は筒状の頸部から短く外反する口縁部を持ち、胴部は中央部の下位に最大径を持ち無花果状を呈する。文様は頸部に4本のヘラ描平行沈線文を持つだけである。胴部器形の変換点に突起が1個貼付される。外面のミガキはハケ調整が窓え入念でない。胴部上半は縦に胴部中央以下は横



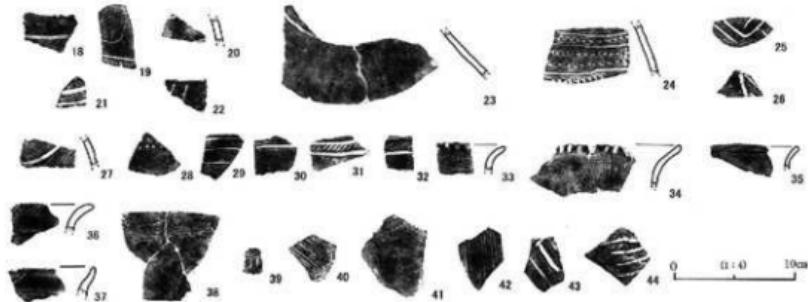
第22图 H9号住居址遗物出土状态实测图



第23図 II-9号住居址出土遺物実測図

にミガされる。外反する口縁の3は、面取された口唇部に縄文が頸部にヘラ描平行沈線文・縄文が施される。4は底部内面と胴部の割れ口に赤色顔料が付着している。23の頸部にはヘラ描沈線、18～22・19～27の胴部片にはヘラ描平行沈線・縄文・ヘラ描「U」字文・短い斜めの櫛描条線文・櫛描突列文・ヘラ描刺突列文・ヘラ描山形文等が施文されている。

甕は7～14・33～44がある。口縁部は外反する口縁7・9・11・33～36と、受口状口縁8・10・12・37がある。7～9・11は胴部上部に張りを持ち口縁部径と胴部最大径が同じである。10は口縁部に最大径を持ち胴上部はあまり張らずに底部に至る。7～9・11・12・35～37の口唇部17には縄文、28・29にはヘラの刻目が施文される。7は頸部に櫛描波状文施文後に胴部に櫛描斜走文を縦の羽状に施される。9は胴部に、4帯の櫛描波状文が施文される。炉に使用された8は、内面の火熱を受けていた部分が鈍い赤色に変色している。口縁部に縄文、頸部に横の櫛描条線文施文後に胴部に櫛描斜走文を縦の羽状に施される。10は口縁部に縄文・ヘラ描連続山形文、胴部は2帯または3帯の縦の櫛描



第24図 H9号住居址出土遺物実測図

第7表 H9号住居址出土遺物観察表

No.	種類	器形	法面		底面		備考	出土位置
			内面	外面	内面	外面		
1. 鋸齿	鉢	(10.0) 8.9	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	丸太束縫隙	1. 鋸歯
2. 鋸齿	鉢	8.6	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	丸太束縫隙	2. 鋸歯
3. 鋸齿	鉢	(11.3)	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	丸太束縫隙	3. 鋸歯
4. 鋸齿	鉢	8.6 <7.0	ハロ目一列	ハロ目一列	ハロ目一列	ハロ目一列	丸太束縫隙、山形木炭料付	4. 鋸歯
5. 鋸齿	鉢	12.0 <9.0	ハロ目一列	ハロ目一列	ハロ目一列	ハロ目一列	丸太束縫隙	5. 鋸歯
6. 鋸齿	鉢	(16.4) 15.5	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	丸太束縫隙	6. 鋸歯
7. 鋸齿	鉢	33.8	-	<21.6> 口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	丸太束縫隙	7. 鋸歯
8. 鋸齿	鉢	(10.4) 9.5	19.7	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	丸太束縫隙	8. 鋸歯
9. 鋸齿	鉢	14.0	6.5	15.0	口縁三枚折、鋸歯一列	口縁三枚折、鋸歯一列	丸太束縫隙	9. 鋸歯
10. 鋸齿	鉢	21.2	-	<15.5>	王字	王字	丸太束縫隙	10. 鋸歯
11. 鋸齿	鉢	(17.0)	-	<15.5>	王字	王字	丸太束縫隙	11. 鋸歯
12. 鋸齿	鉢	(20.4)	-	<15.5>	ハロ目一列	ハロ目一列	丸太束縫隙	12. 鋸歯
13. 鋸齿	鉢	2	<15.5>	ハロ目一列	ハロ目一列	ハロ目一列	丸太束縫隙	13. 鋸歯
14. 鋸齿	鉢	(20.4)	<15.5>	ハロ目一列	ハロ目一列	ハロ目一列	丸太束縫隙	14. 鋸歯
15. 鋸齿	鉢	20.0 <15.5>	ハロ目一列	ハロ目一列	ハロ目一列	ハロ目一列	丸太束縫隙	15. 鋸歯
16. 鋸齿	鉢	20.0 <15.5>	ハロ目一列	ハロ目一列	ハロ目一列	ハロ目一列	丸太束縫隙	16. 鋸歯
17. 鋸齿	鉢	20.0 <15.5>	ハロ目一列	ハロ目一列	ハロ目一列	ハロ目一列	丸太束縫隙	17. 鋸歯
18. 石器	石核	3.8	-	-	-	-	丸太束縫隙	18. 石器
19. 石器	石核	3.9	-	-	-	-	丸太束縫隙	19. 石器
20. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	20. 石器
21. 石器	石核	4.4	-	-	-	-	丸太束縫隙	21. 石器
22. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	22. 石器
23. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	23. 石器
24. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	24. 石器
25. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	25. 石器
26. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	26. 石器
27. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	27. 石器
28. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	28. 石器
29. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	29. 石器
30. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	30. 石器
31. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	31. 石器
32. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	32. 石器
33. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	33. 石器
34. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	34. 石器
35. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	35. 石器
36. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	36. 石器
37. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	37. 石器
38. 石器	石核	4.2	-	-	-	-	丸太束縫隙	38. 石器
39. 細片	細片	4.0	-	-	-	-	丸太束縫隙	39. 細片
40. 細片	細片	4.0	-	-	-	-	丸太束縫隙	40. 細片
41. 細片	細片	4.0	-	-	-	-	丸太束縫隙	41. 細片
42. 細片	細片	4.0	-	-	-	-	丸太束縫隙	42. 細片
43. 細片	細片	4.0	-	-	-	-	丸太束縫隙	43. 細片
44. 細片	細片	4.0	-	-	-	-	丸太束縫隙	44. 細片

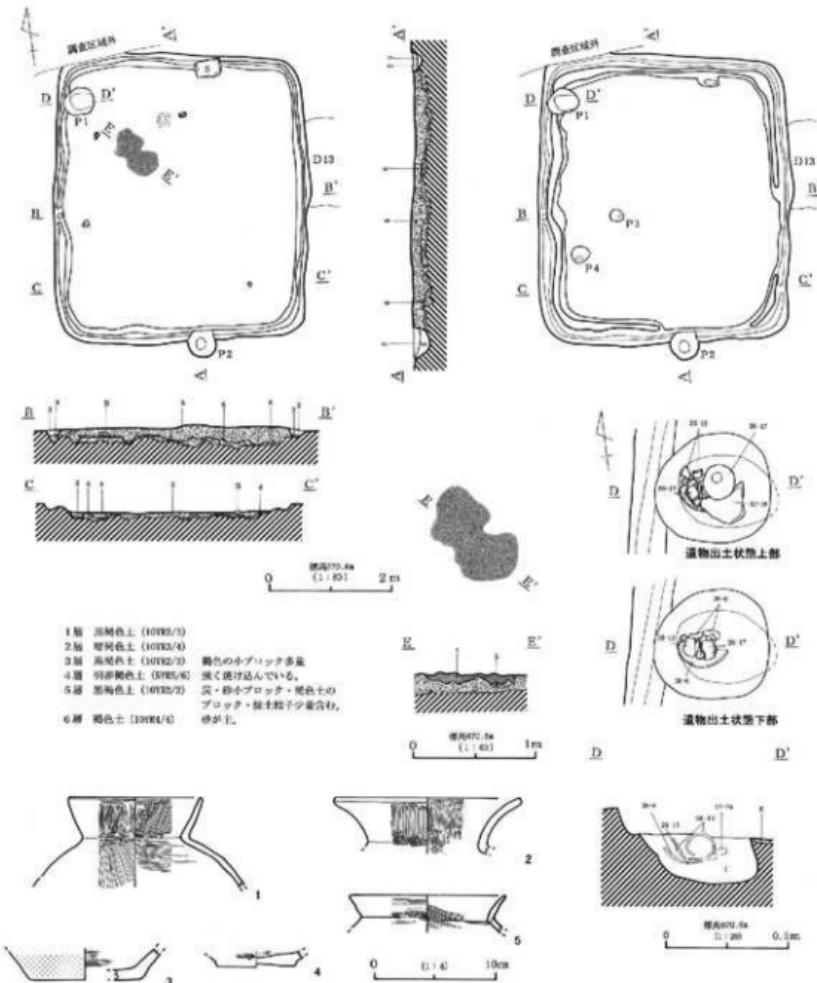
条線文で5区画し間に櫛描波状文を施文する。文様帶の最下位に櫛描刺突列を1周させる。11・12の肩部には櫛描斜走文を縦の羽状に施文する。12の口縁部には繩文が施されている。38~44の肩部片には、櫛描波状文・櫛描斜走文・ヘラ捕「コ」字重ね文が施文される。15は内外面赤色塗彩される鉢、口縁部に2個の楕円形の突起が貼付される。16は内外面赤色塗彩される鉢。17は内外面赤色塗彩される高杯、口唇部に10個の突起が輪花状に貼付される。

石器は石核2点、石核未製品6点、二次加工ある剥片1点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。石核は黒曜石2点、剥片・細片は黒曜石190片・硬質砂岩1片。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

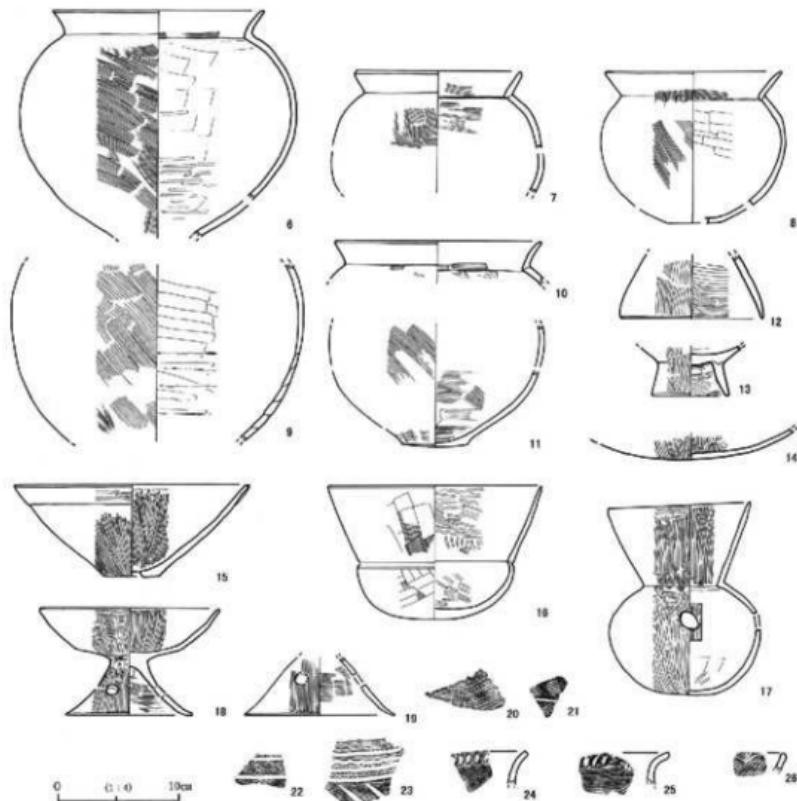
#### (10) H10号住居址

本址は、す・せ-77・78Grに位置する。D13号土坑を切っている。形態は隅丸長方形で、北壁3.8m、南壁3.9m、東壁4.2m、西壁4.4m、最深の壁残高は北壁で5cmを測る。主軸方位はN-10°-Eを示す。ピットが床面から2個、床下から2個検出された。位置からP2が入口の施設か棟持柱であろう。円形で径46cm深さ24cmを測る。P1は北西コーナーにあり径44cm深さ30cm、多量の土器が出た。P3は径24cm深さ28cm、P4は径30cm深さ30cm床下から検出された。床面は全体に平坦であるが非常に軟弱で、調査中に正確に床面を把握できなかった。炉は明確な掘り込みを確認できなかつた。北壁・西壁に寄った80cm×40cmの範囲で、10cmほど5層が焼け込んでいて炉と思われる。床下の掘方は20cm前後、周溝の内側を堤状に幅5~15cm掘り残している。周溝が全周する。



第25図 H10号住居址実測図および出土遺物実測図

遺物は土師器壺（1・2・14）・甕（4～11）・台付甕（12・13）・高壺（18・19）・壙（17）・小形丸底（16）・瓶（15）、石器がある。他に弥生時代後期末壺片（20）、弥生時代中期後半土器片（21～27）があるが、21～27は混入品である。P1内から第26図-17の壙が底部を上の逆位で、その下部から15の甕・6の壺が出土した。他のほとんどがP1東側から埋立地の北側から出土した。



第26図 H10号住居址出土遺物実測図

壺第25図1・2は外面頸部にハケメ調整を残すが口縁部内外面・胴部外面ヘラミガキされる。第26図14は、ほとんど丸底に近い底部から大きく開きながら立ち上がる。内外面ヘラミガキされ、底部もよくミガキされる。壺5～8は口縁部直線的に外反する。10はやや外脣しながら外反する。胴上部に最大径を持つ球形の胴部である。いずれも外面口縁部・頸部はヨコナデ、胴部外面ハケメ調整される。5・8・10は頸部にハケメがみえる。内面の調整は口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部上半部ヘラナデ、7・11はハケメ調整もされる。6は胴下部にヘラミガキされる。12・13は大小の台付壺の台部、外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ調整。15の壺は1孔を持つ底部から「八」字状に大きく開いて薄い折り返し口縁部に立ち上がる。外面の口縁部・底部ナデ調整、他はヘラミガキされる。いわゆる小形丸底の16は小さな体部を持ち、口縁部直線的に外方へ開く。外面口縁部から体部上部ヘラナデ、口縁部にハケメが残る。内面ヘラナデ・ヘラミガキ。16の壺は直線的に口縁部外反し、胴部は球形を呈し小さな平底を持つ。胴部に焼成後の1孔が穿たれている。外面口縁部と胴部・内面口縁部ヘラミガキされる。

第8表 H10号住居址出土遺物観察表

品番	種類	形態	法面	成形・構造・文様		備考	出土位置	
				内面	外面			
1	土器鉢	盃	11.0	- <7.4>	口部部へミヨリ半、底部ハラミカリ	口部部 前部ハラミガキ	完全実用	J-1区
2	土器鉢	盃	(15.4)	- <4.6>	ヘラミガキ	口部部ハラミガキ、底部ハケメ	完全実用	柱立山
3	土器鉢	盃	-	(9.2) <2.6>	ハラミ	ヘラミガキが赤茶彩	完全実用	柱立山
4	土器鉢	盃	-	(6.4) <1.3>	ナデ	ハラミ、底部ハラミ	完全実用	柱立山
5	土器鉢	盃	(12.8)	- <2.1>	口縁三コナーボコナデ、底ハラミ	口縁部コナーボコナデ、底ハラミ	完全実用	柱立山
6	土器鉢	盃	(17.4)	- <18.7>	口部部(サメ・ヨコナテ)、底部ハラミカリ+ヘラミ	口縁部、底部コナテ、底ハラミ	完全実用	I区、J区、H-1
7	土器鉢	盃	(13.8)	- <10.0>	ハラミ	口縁部、底部コナテ、底ハラミ	完全実用	J区、H区
8	土器鉢	盃	(14.6)	(4.2) 12.5	口縁部ハケメ後ハラミナデ、底部ハラミナデ	口縁部コナタ、底部ハラミ	完全実用	J区
9	土器鉢	盃	-	- <14.5>	ヘラミナデ	ハケ目	完全実用	I区、J区
10	土器鉢	盃	(17.0)	- <3.6>	口縁部ハケメ後コナテ、底部ハラミナデ	口縁部コナテ、底部ハケメ	完全実用	柱立山
11	土器鉢	盃	-	5.4 <10.0>	ハラミ後ハラミ	ハケ目	完全実用	柱立山
12	土器鉢	台付碗	-	(11.8) <5.3>	ハラミ後ハラミ	ハケ目	完全実用	柱立山
13	土器鉢	台付碗	-	(6.4) <4.1>	底部ナデ、台脚ハケメ後ハラミナデ	ハケ目	完全実用	柱立山
14	土器鉢	盃	-	7.4 <2.3>	ヘラミガキ	底部、底部ハラミガキ	完全実用	柱立山
15	土器鉢	盃	(9.4)	4.4 7.6	ヘラミガキ	口縁部ナデ、底ハラミガキ	完全実用	柱立山
16	土器鉢	台付碗	(17.8)	- 11.0	口縁部ハラミガキ、底部ハラミナデ、ヘラミカリ	口縁部ハラミナデ、体部ハラミナデハラミカリ	完全実用、柱立山	J区
17	土器鉢	盃	11.8	4.4 15.4	ヘラミガキ	ヘラミナデ	完全実用	P区
18	土器鉢	盃	(14.8) (10.4)	8.8	底部ハラミガキ、底部ハケメ後ナデ	底部ハケメ後ハラミガキ、底部ハラミガキ	完全実用	J区
19	土器鉢	盃	-	(12.4) <4.7>	底部ハケメ後ナデ	底部ハラミガキ	完全実用	J区

18の高杯は坏部があり明瞭でない稜を持ち浅く大きく開く、脚部は外彎気味に「八」字状に開く。脚部に3孔を有す。外面坏部にハケメがうかがえるが、脚部・内面坏部とともにヘラミガキされる。脚部内面はハケメ後ナデ調整。19も高杯の脚部で残存部で2個の孔がある。20は無彩の盃でヘラ描T字文が施文される。21~27は弥生時代中期後半の壺片・甕片であり、混入品である。

石器は台石（石質輝石安山岩）が2点出土した。他に混入品と考えられる石鎌1点、石鎌未製品1点、黒曜石の石核2点、黒曜石の剥片・細片72片・硬質砂岩1片が出上した。

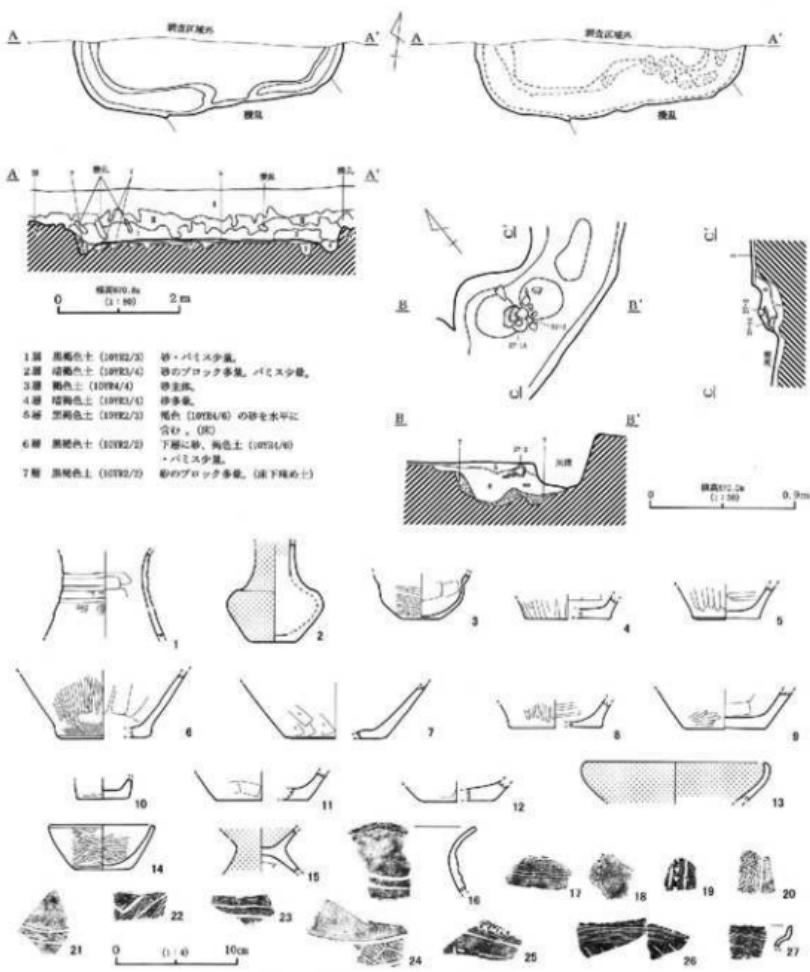
本址は、土器の特徴から占墳時代前期後半に比定される。

#### (11) H11号住居址

本址は、セ-89・90Grに位置する。大半が調査区域外の現道下に延びる。調査範囲内で柱穴や炉は検出されなかった。東壁検出部0.5m、南壁4.0m、西壁検出部1.1m、最深の壁残高は南壁で18cmを測る。周溝が南壁中央部を除き床面下を巡る。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は全体は浅いようである。南壁中央部から南東コーナーにかけての壁よりは、幅60cm前後の範囲が30cmほど深く掘られていた。この範囲から第27図2・14のミニチュア土器等が出土した。

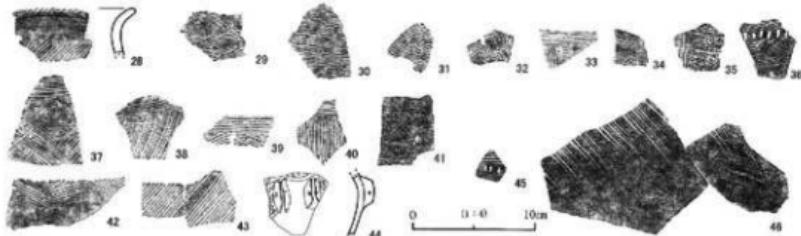
第9表 H11号住居址出土遺物観察表

品番	種類	形態	法面	成形・構造・文様		備考	出土位置	
				内面	外面			
1	手作	盃	-	- <2.1>	ヘラナデ	ヘラミ平行T字(3本)	完全実用	柱
2	手作	盃	4.0	<6.2>	水色透青	ヘラミガキ・水色透青	完全実用	床下
3	手作	盃	(3.1)	<9.8>	ナラカデ	ヘラミガキ	完全実用	フクタ一筋
4	手作	盃	-	(7.0) <9.0>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実用	柱立山
5	手作	盃	-	(5.6) <2.7>	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実用	フクタ一筋
6	手作	盃	-	(7.6) <5.5>	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実用	柱立山
7	手作	盃	-	(8.4) <6.6>	ナデ	ヘラナデ	完全実用	柱立山
8	手作	盃	-	(7.8) <6.4>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実用	柱立山
9	手作	盃	-	(6.8) <1.1>	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実用	柱立山
10	手作	盃	-	4.3 <1.7>	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実用	柱立山
11	手作	盃	-	(7.1) <2.3>	-	ヘラナデ	完全実用	柱立山
12	手作	盃	-	(6.4) <1.7>	-	ヘラナデ	完全実用	柱立山
13	手作	盃	(14.9)	<3.3>	ヘラミガキ・水色透青	ヘラミガキ・原白透青	完全実用	柱
14	手作	盃	8.8	4.6 3.8	ヘラミガキ・墨透	ヘラミガキ・墨透	完全実用	床下
15	手作	盃	-	- <3.9>	底部ハラミガキ・水色透青、底部ハラミナデ	ヘラミガキ・水色透青	完全実用	フクタ一筋



第27図 H11号住居址実測図および出土遺物実測図

図示した遺物は弥生土器の壺・甕・鉢・高杯、ミニチュア土器、石器がある。4~12の底部は、6の甕以外は器種が明確でない。壺は1・16~26でいずれも無彩、16の口縁部短く外反し口唇部に縄文が施される。頭部にはヘラ描平行沈線文が1・16に、横の櫛描条線文が17に施文される。18~20の胴上部から中央部には縦のヘラ刺突列・櫛描波状文・ヘラ描沈線文が施される。21~25にはヘラ描平行沈線・縄文・ヘラ描連続山形文・ヘラの刺突列・櫛歯状工具の刺突列・横櫛描条線文が施文される。



第28図 H11号住居址出土遺物実測図

甕は28~45、28は口縁部短く外反し、口唇部に繩文、胴部には櫛描斜走文が施される。頸部から胴部の文様は、33が頸部に横の櫛描条線文胴部に縦の櫛描条線文と波状文、頸部から胴部まで櫛描波状文が施文される30がある。37~40は頸部に横の櫛描条線文胴部に櫛描斜走文が施される。胴部には櫛描波状文・櫛描波状文と縦の櫛描条線文が施文される31・32・34・35、櫛描斜走文の41~43がある。36・46にはヘラの刺突列が加えられる。45は2孔を持つ突起が2個貼付されている。13は内外面赤色塗彩の鉢で口縁部内弯する。

2・3・10・14はミニチュア土器で、2は外面と内面の口縁部まで赤色塗彩される。胴上部に稜を持ち特異な器形である。3は外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ、底部はヘラケズリされる。14は底部を除き内外面丁寧にヘラミガキされる。

石器は石錐5点、石錐木製品6点、石錐1点、横形削器1点、砥石1点、磨石(敲石)1点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。石核は黒曜石3点、剥片・細片は硬質砂岩11片黒曜石1307片・輝石安山岩2片・緑色チャート6片が出土した。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

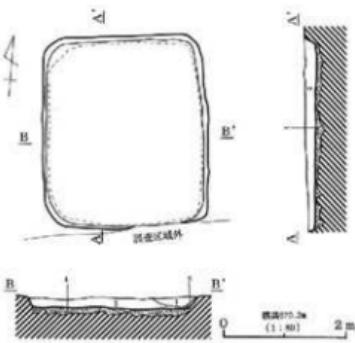
#### (12) H12号住居址

本址は、せ・そ-80Grに位置する。H9号住居址を切っている。形態隅丸長方形で、北壁・南壁2.5m、東壁・西壁3.0m、最深の壁残高は北壁で23cmを測る。長軸方位はN-8°-Eを示す。床は平坦であるが軟弱で敲き縮められた形跡が窺えない。柱穴・炉・周溝等といっさい認められない。

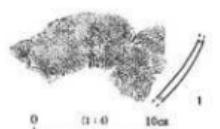
遺物は第30図の外面ハケメ調整の土師器壺片を図示した。他に同様の土師器壺片を主とする土師器小片127片と弥生時代中期後半の土器小片7片、黒曜石の石核2点・剥片2点が出土した。以上の遺構と遺物の状況から、本址の所産時期は、弥生時代中期後半より新しいとしかいえない。

#### (13) H13号住居址

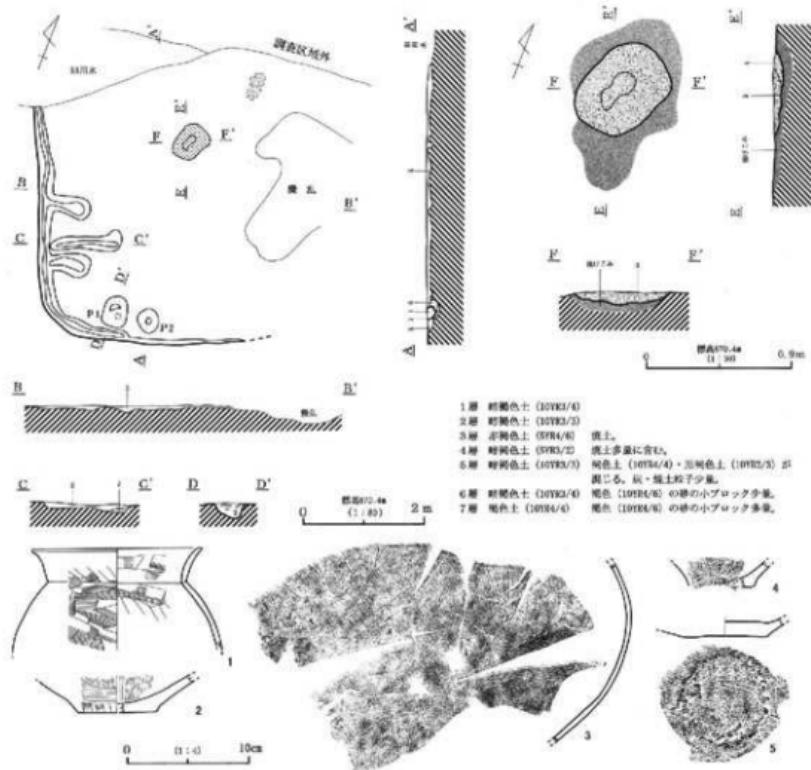
本址は、せ・そ-83・84Grに位置する。北西を旧い用水で切られ、全体が圃場整備等で削平を受



第29図 H12号住居址実測図



第30図 H12号住居址出土遺物実測図



第31図 H13号住居址実測図および出土遺物実測図

けている。形態は隅丸長方形（方形？）で、西側と南側に周溝がみられた。西壁下から東へ延びる深さ5～8cmの溝が3本あるが、間仕切り等に関するものであろうか。ピットが2個南壁下にある。P1は長径52cm短径40cm深さ24cmの楕円形で、土器が多く出土した。P2は円形で径18cm深さ17cmを測る。炉は住居址ほぼ中央に110cm×70cmの範囲で、H10号住居址と同様に不整形に5cmほど地山が焼け込んでいた。炉本体は80cm×60cmの楕円形を呈し、最厚3cmの焼上がレンズ状に堆積していた。掘方は残存部で2～10cm前後を測る。

遺物は土師器壺（1・3～5）、壺？2が図示できた。1・3・5がP1から出土した。1は口縁部外縁気味に外反し口唇部で外に開く。胴上部に最大径を持つ球形の胴部である。外面口縁部ヨコナデ後ハケメ調整、頭部から胴部はハケメ調整される。内面は口縁部から頭部ハケメ調整、胴部はヘラナデされる。3は球形胴部の壺で外面ハケメ調整。5は外面胴下部から底部全面までハケメ調整される。4も外面ハケメ調整の壺。2は内外面粗いミガキがされているが壺であろうか。

本址は、土器の特徴から古墳時代前期後半に比定される。

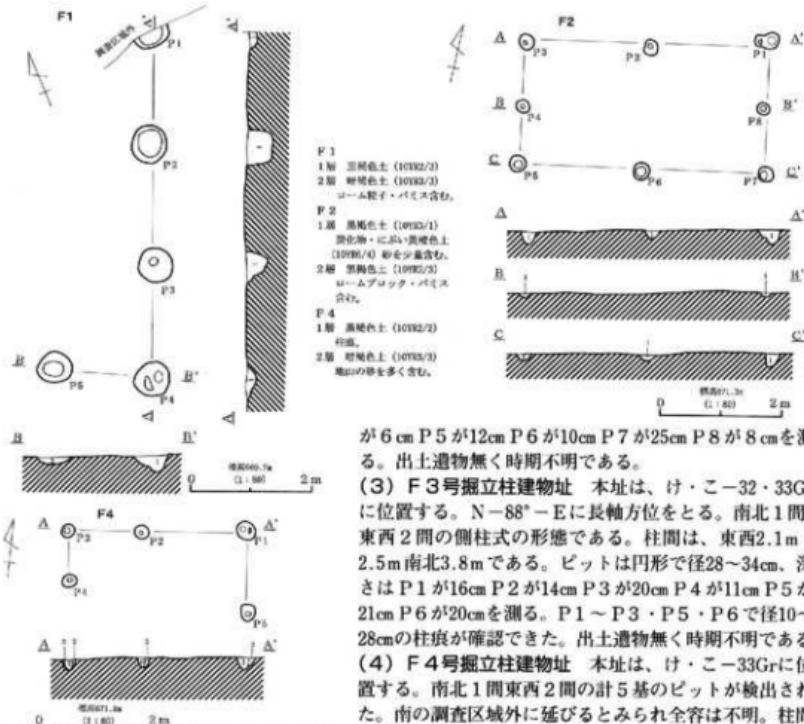
第10表 H13号住居址出土遺物観察表

名	種類	基標	法 量			成 形・質・質・文 横		備 考	出土位置
			(口幅)	(底幅)	(高さ)	内 面	外 面		
1 土器底 磁	破	(14.0)	—	<3.5>		ハケ目	ハケ目	四輪車痕	H区
2 土器底 磁	破	—	(6.6)	<3.0>		ヘラミガ半	ヘラミガ半	四輪車痕	検出地
3 土器底 磁	破	—	—	—		ヘラナテ	ハク目	差置突頭	H区
4 土器底 磁	破	—	(5.4)	<2.1>		ヘラナテ	ハク目	四輪車痕	H区
5 土器底 磁	破	—	2.2	<1.5>		ハケ目	ハケ目	完全火照	H区

## 第2節 挖立柱建物址

(1) F 1号掘立柱建物址 本址はそーちー101・102Grに位置する。H 1・H 2号住居址を切っている。南北3間東西1間の計5基のピットが検出された。柱間は東西0.9m南北0.9mである。ピットは円形を呈し、径30cm前後深さはP 1が14cm P 2が21cm P 3が38cm P 4が29cm P 5が12cmを測る。柱穴内から弥生時代の土器小片が出土したが混入品とみられる。時期は弥生時代中期後半以降である。

(2) F 2号掘立柱建物址 本址はさ・しー55・56Grに位置する。N-78°-Eに長軸方位をとる。南北2間、東西2間の側柱式の形態である。柱間は東西2.0m南北1.0m・1.1mである。P 1は長径40cm短径26cmの8の字、他は円形で径20~30cmを測る。深さはP 1が26cm P 2が16cm P 3が22cm P 4

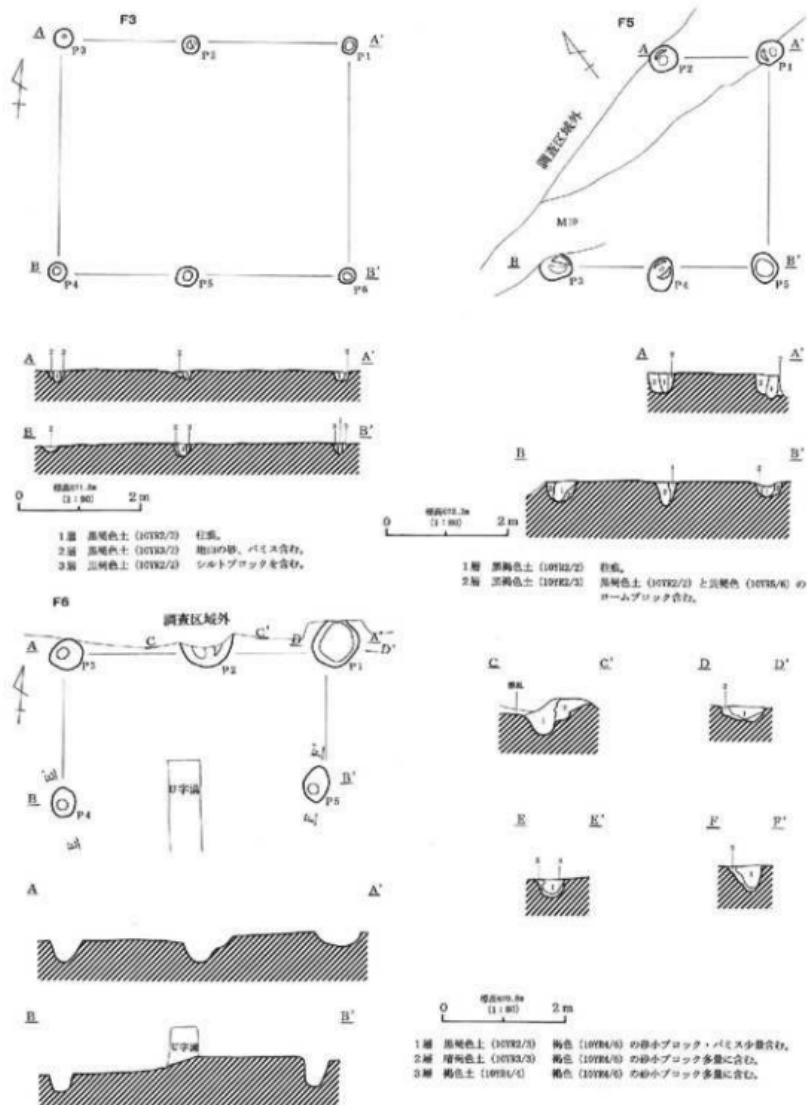


第32図 掘立柱建物址実測図 (F 1・F 2・F 4号)

が6cm P 5が12cm P 6が10cm P 7が25cm P 8が8cmを測る。出土遺物無く時期不明である。

(3) F 3号掘立柱建物址 本址は、け・こー32・33Grに位置する。N-88°-Eに長軸方位をとる。南北1間、東西2間の側柱式の形態である。柱間は、東西2.1m・2.5m南北3.8mである。ピットは円形で径28~34cm、深さはP 1が16cm P 2が14cm P 3が20cm P 4が11cm P 5が21cm P 6が20cmを測る。P 1~P 3・P 5・P 6で径10~28cmの柱痕が確認できた。出土遺物無く時期不明である。

(4) F 4号掘立柱建物址 本址は、け・こー33Grに位置する。南北1間東西2間の計5基のピットが検出された。南の調査区域外に延びるとみられ全容は不明。柱間は東西1.6m・1.2m南北0.8m・1.4mである。ピットは



第33図 掘立柱建物址実測図 (F 3・F 5・F 6号)

ほぼ円形を呈し、径20~34cm前後深さは、P1が20cm P2が18cm P3が18cm P4が19cm P5が21cmを測る。P1~P3で径10~28cmの柱痕が確認できた。出土遺物無く時期不明である。

(5) F5号掘立柱建物址 本址はい・う-6・7Grに位置する。M10に切られている。南北1間東西2間の計5基のピットが検出された。調査区域外に延び全容は不明である。柱間は東西1.8m・1.9m南北3.4mである。ピットは楕円形・円形を呈し、P1が長径46cm短径40cm深さ41cm、P2が径44cm深さ33cm、P3が長径46cm短径40cm深さ29cm、P4が長径52cm短径38cm深さ38cm、P5が長径52cm短径40cm深さ35cmを測る。P1~P5で径12~22cmの柱痕が確認できた。出土遺物無く時期不明である。

(6) F6号掘立柱建物址 本址はせ・そ-87・88Grに位置する。調査区域外に延び全容は不明である。南北1間東西2間の計5基のピットが検出された。柱間は東西2.3m南北2.4mである。ピットは楕円形・円形を呈し、P1が長径76cm深さ24cm、P2が径88cm深さ45cm、P3が径48cm深さ37cm、P4が長径46cm短径40cm深さ31cm、P5が長径48cm短径40cm深さ48cmを測る。柱穴内から弥生時代の土器小片が出土したが混入品とみられ、時期は不明である。

### 第3節 土坑

(1) D1号土坑 ち-102Grに位置する。深さ41cmで弥生中期後半の土器壺・甕の破片9点が出土した。

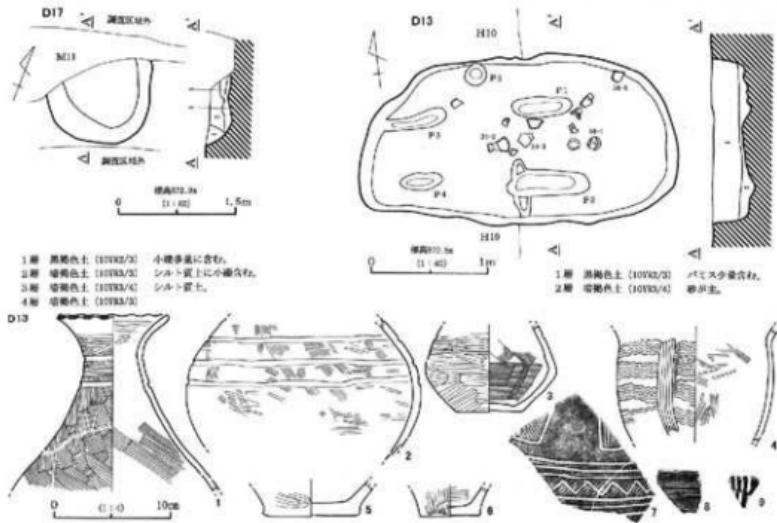
(2) D2号土坑 ち-101・102Grに位置する。H1を切り、F1に切られる、台形で底に浅いピットが2基。弥生中期後半の土器壺・甕・鉢の破片68点が出土した。第37図10~16、10は内外面無彩の鉢。

(3) D3号土坑 た・ち-99Grに位置する。P24・25・62に切られ、長方形で浅いピット1基。弥生時代中期の土器甕(第37図17)他に甕・壺の破片6点が出土した。

(4) D4号土坑 ち-99Grに位置する。P29に切られる。底から深さ30cmのピットを有す。

(5) D5号土坑 そ-95Grに位置し、2層は人為的な堆積で弥生時代中期後半の土器が多量に(295片)出土した。第37図23~49・51の甕・壺・ミニチュア土器、第45図29の石錐、黒曜石の剥片12点。

(6) D6号土坑 た-93Grに位置する。第37図18~22の甕・壺の他に24点の壺・甕・鉢片、第48図



第34図 D13・D17号土坑実測図

111の台石（輝石安山岩）、黒曜石の石核1・剥片3が出土した。

(7) D7号土坑 そー93Grに位置する。長方形で覆土は人為的な堆積状況をみせる。弥生時代中期後半の土器壺・甕の破片6点、黒曜石核1点が出土した。

(8) D8号土坑 そー94Grに位置し、弥生中期後半土器壺・甕・鉢の破片27点、黒曜石核1点が出土。

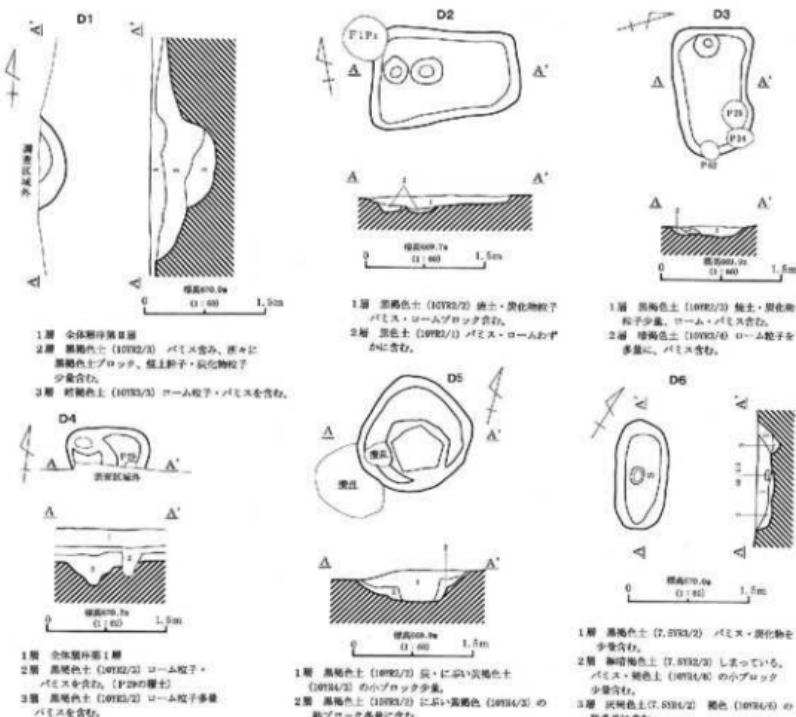
(9) D9号土坑 そー95Grに位置する。楕円形を呈すると思われる。深さ43cmで出土遺物はない。

(10) D10号土坑 しー56Grに位置する。M4に切られる。楕円形で長軸2.92m・深さ25cmを測る。底に逆木が埋め込まれたような小ピットがみられた。出土遺物はない。

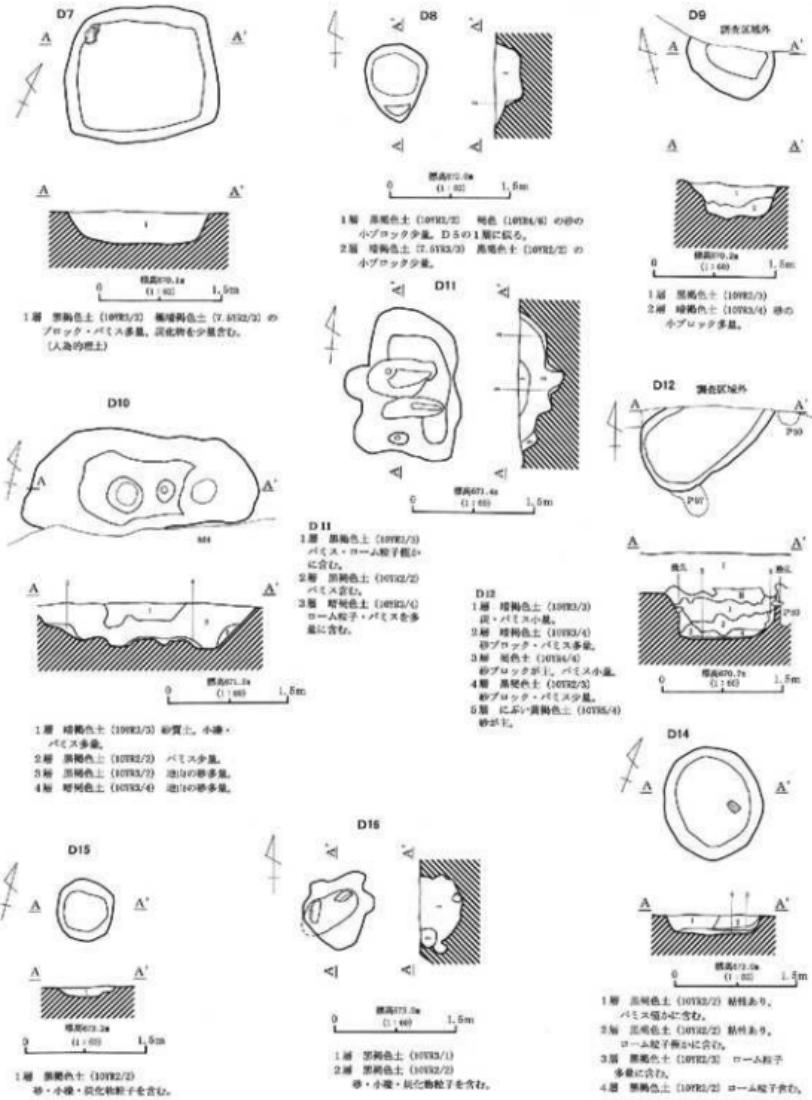
(11) D11号土坑 す・せー76Grに位置する。底に楕円形で深さ20cmのピットがある。出土遺物はない。

(12) D12号土坑 セー91Grに位置する。P53・58を切り、P57に切られる。第37図52~58の弥生時代中期後半甕・壺・鉢の他に壺・甕・鉢片35点、黒曜石の剥片3点・硬質砂岩の剥片1点が出土した。

(13) D13号土坑 す・せー76Grに位置する。H10号住居址に切られる。長軸2.7m短軸1.4m深さ28cmのやや不整楕円形を呈する。底から木棺墓の小口穴のような楕円形のピットが4個検出された。規模は、P1が50×18cm深さ13cm、P2が70×22cm深さ15cm、P3が52×12cm深さ17cm、P4が36×14cm深さ7cm、P5は円形で径20cm深さ15cmを測る。P1・P2間は70cm、P3・P4間は50cmを測り、木棺が置かれたとすれば規模が小さく児童用であろうか。覆土などの科学的分析がされていないので積



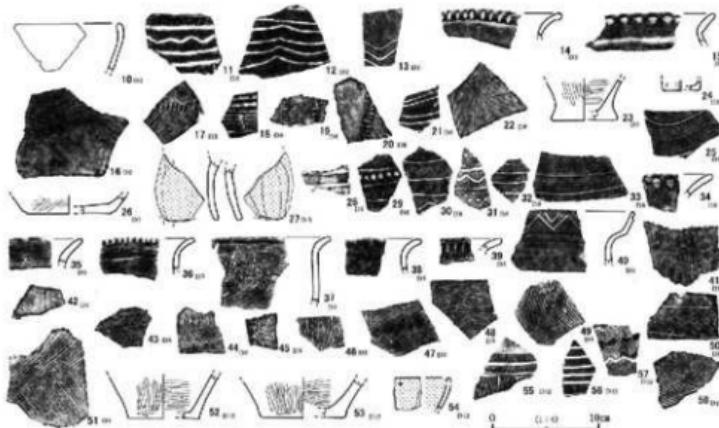
第35図 土坑実測図 (D1・D2・D3・D4・D5・D6号)



第36圖 土坑實測圖 (D7·D8·D9·D10·D11·D12·D14·D15·D16號)

第11表 土坑出土遺物観察表

No.	種別	器種	内 容		外 观		考 参	出土位置
			口径(Φ)	底面(Φ)	底面(Φ)	底面(Φ)		
1	弥生	壺	(9.8)	—	<15.1	縦部ハケ口、口近部へうなぎ半	口部鉢 縞文→斜面斜面、口近部ハケ口→へら三ガキ。縦部ハケ口→へら平行波状文(2列)、横幅延長波状文(4本)。	D13・波状上
2	弥生	壺	—	—	<12.1	ハケ口	ハケ口→へら三ガキ、へら平行波状文(4本)。	D13・波状上
3	弥生	壺	—	—	<7.4	ハケ口	へら平行波状文(6本)、縦幅延長波状文(6本)。	D13・フクチ
4	弥生	壺	—	—	<19.0	ハケ口→へら三ガキ	縦幅延長波状文(6本)、縦幅延長波状文(6本)。	D13・フクチ
5	弥生	壺	—	—	<8.4	—	へら三ガキ	波状上
6	弥生	壺	—	—	<2.5	ハラミガキ	ハラミガキ→へら三ガキ	波状上
10	弥生	壺	—	—	<4.5	ハラミガキ	へら三ガキ	D2・H2
23	弥生	壺	—	—	<3.8	ハラミガキ	へら三ガキ	D3・波状上
24	弥生	ミーティア	(3.5)	<1.0	—	—	ハケ口	波状上
26	弥生	壺	—	(8.2)	<1.7	—	へら三ガキ	波状上
27	弥生	壺	(6.0)	—	<3.7	へら三ガキ→赤色波状	へら三ガキ→赤色波状	波状上
52	弥生	壺	—	(6.7)	<4.1	ハラミガキ	ハラミガキ	波状上
53	弥生	壺	—	(7.9)	<3.7	へら三ガキ	へら三ガキ	波状上
54	弥生	鉢	—	—	—	へら三ガキ→赤色波状	へら三ガキ→赤色波状	波状上



第37図 土坑出土遺物実測図 (D 2・D 3・D 5・D 6・D 8・D 12号)

極的には言及できないが、遺物は第34図1～9の弥生時代中期後半の壺・甕と95点の壺・甕・鉢の破片、第45図30・31の石錐（黒曜石）があり、大半は第2層から出土した。

(14) D14号土坑 うー8Grに位置する。ほぼ円形で深さ26cmを測る。弥生時代中期後半の土器片2点、輝石安山岩の打製石斧1点、黒色緻密安山岩の石核1点が出土した。

(15) D15号土坑 いー5Grに位置する。円形で南北78cm東西72cm深さ15cmを測る。出土遺物はない。

(16) D16号土坑 うー7Grに位置する。不整形で深さ56cm、覆土に炭化粒子含み底に煤けた安山岩礫2個が出土した。上器等の遺物は無い。

(17) D17号土坑 えー11Grに位置する。M11に切られる。深さ17cm、出土遺物は無かった。

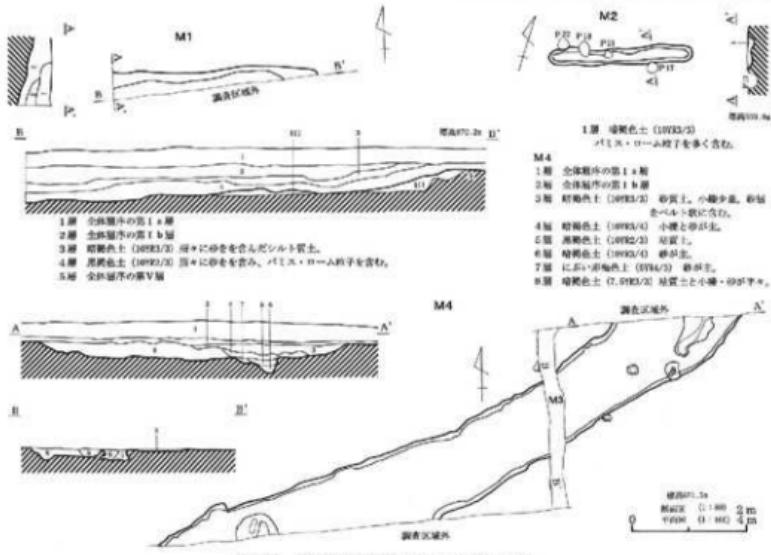
#### 第4節 溝状遺構

(1) M1号 ちー101・102Grに位置する。H1を切る。覆土に砂やシルトを含む東から西へ緩く傾斜する自然流路である。付近の住居址からの混入品弥生時代中期後半の土器円盤（第41図1）壺・甕87点が出土した。

(2) M2号 たー98・99Grに位置する。P17・P18・P21・P22に切られる。人為的な溝であり区画

第12表 土坑計測表

調査名	検出位置	平面形	高さ	幅	深さ	備考	調査名	検出位置	平面形	高さ	幅	深さ	備考
D1	5102	円筒?	(112)	(34)	41	F1に切られ。H1を切る。弥生中期土器5片、鉢1片	D10	5-16	円筒形	292	(130)	53	M4に切られる。
D2	5-101-102	台形	180	126.90	17		D12	サ-91	長方形	100	32	P53-P56を切り、P57に切られる。弥生中期土器42片、鉢1片	
D3	た-99	台形	180	103.80	12	P24-25 石に切られる。弥生中期土器3片	D11	エ-4B	長方形	180	120	60	
D4	ち-99	等高線	108	(46)	26	P26に切られる。	D13	す・サ-26	角円形	270	140	28	H10に切られる。本標識?
D5	チ-95	円形	150	144	39	弥生中期土器295片、石器1、鉢12片	D14	う-8	円形	140	120	26	弥生中期土器104片、石器2、鉢1片
D6	た-93	等高線	138	84	24	弥生中期土器229片、石器1、石椎1、鉢13片	D15	レ-6	円形	70	72	15	
D7	そ-93	畠内田	190	166	46	弥生中期土器6片、石器1	D16	エ-7	不規則	90	90	58	
D8	そ-94	丸形	74	70	40	弥生中期土器27片、石器1	D17	え-11	円形?	140	(104)	17	M11に切られる。
D9	そ-95	椭円形	112	(70)	43								



第38図 溝状遺構実測図 (M1・M2・M4)

を目的としたものであろうか。幅0.46~0.64m、東西長5m、深さ4~8cm、出土遺物はない。

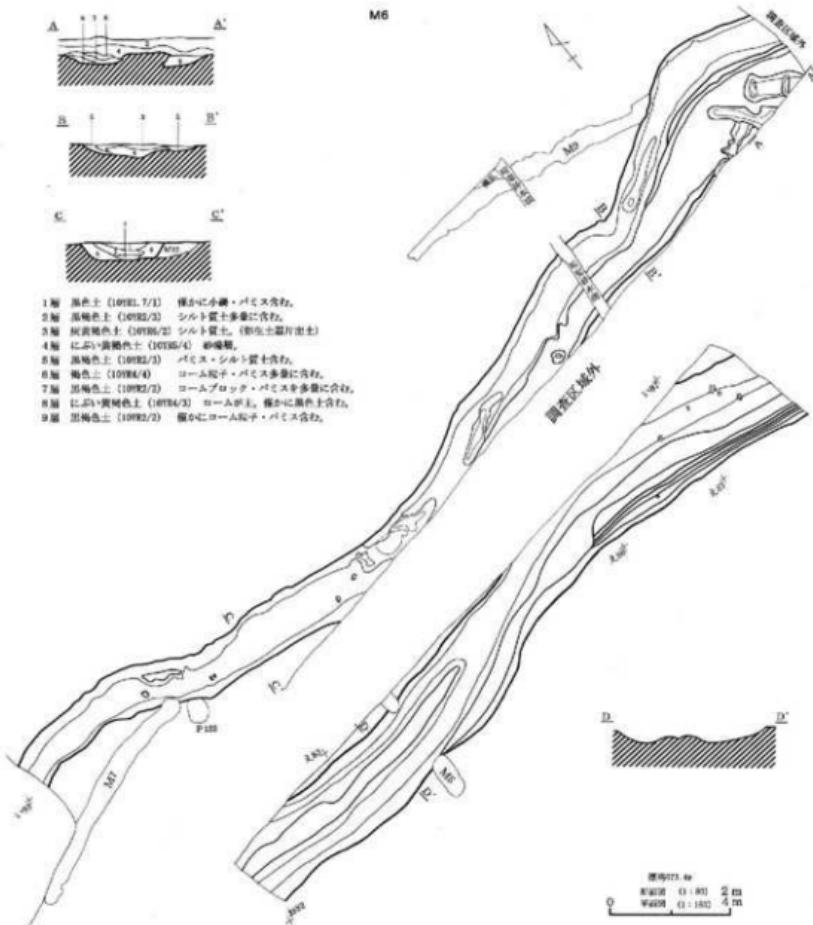
(3) M3号 さ・し-53Grに位置する。M4を切る。地形の傾斜に沿って南北に延びる。幅0.4~0.64m、深さ14~18cm覆土に小円礫を含み自然流路である。出土遺物はない。

(4) M4号 さ・し-52~57Grに位置し、M3に切られ、D10に切られる。地形の傾斜に沿い北東から南西に延びる。覆土に小円礫・砂を含み自然流路である。弥生時代中期後半土器1点・土師器20点・須恵器4点の破片、第48図110の回石（黒色多孔質安山岩）・113の回石（溶結凝灰岩）が出土した。

(5) M5号 か-19Grに位置し、M6を切る。幅0.54~0.64m深さ6~19cm、出土遺物はない。

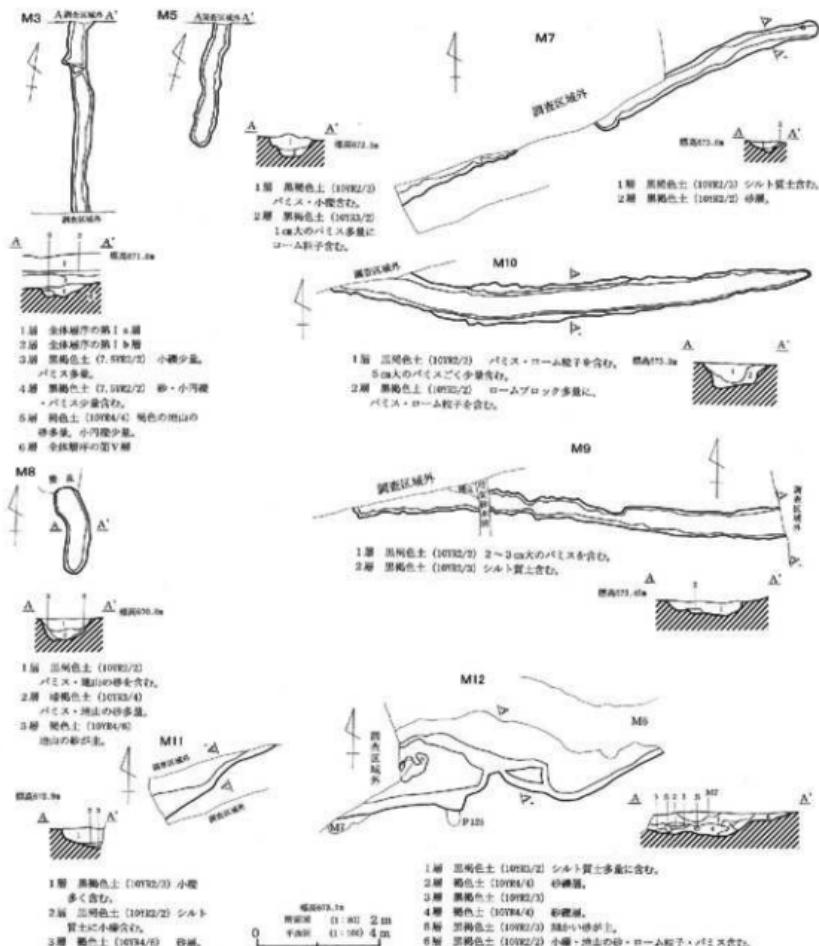
(6) M6号 あ~か-1~21Grに位置し、M12・P122を切り、M5・M7・M9に切られる。幅1.4~4m深さ20~92cm、覆土に円礫・シルト・砂・砂礫を含み、自然流路である。西に傾斜し東端と西端の比高は80cmを測る。弥生時代中期後半土器10点・土師器31点・須恵器9点の破片、第47図88・90・91の打製石斧、87の打製石斧未製品、黒曜石石核7点・剥片13点が出土した。

(7) M7号 え・お-8~11Grに位置し、M6・M11・M12を切る。幅0.46~0.7m深さは浅く1~20cm、東から西へ流れる自然流路である。第47図92の打製石斧（輝石安山岩）が出土した。



第39図 M 6号溝状遺構実測図

- (8) M8号 そ・た-92Grに位置する。幅0.74~0.94m深さ20cm前後、流水の痕跡無く人工溝址である。土師器6点・弥生中期土器3点の破片、黒曜石の剥片1点出土した。
- (9) M9号 あ・い-1~4Grに位置する。M 6を切る。幅0.34~1.02m深さ5~20cm、覆土にシルト含み自然流路である。土師器破片1点出土した。
- (10) M10号 あ・い-1~4Grに位置し、F 5を切る。断面「U」字状で幅1m前後深さ2~30cm、底は東から西に低くなる。流水の痕跡はない。弥生中期土器2点の破片が出土した。



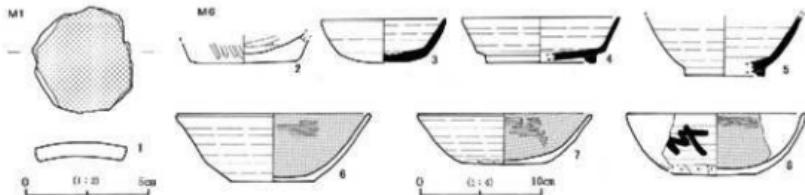
第40図 溝伏造構実測図 (M 3・M 5・M 7・M 8・M 9・M 10・M11・M12号)

(11) M11号 お-11Grに位置し、D17を切りM7に切られる。覆土に円礫・シルト・砂を含み、自然流路である。西に傾斜し深さ30cmを測る。出土遺物ない。

(12) M12号 え-7~10Grに位置し、M6・M7・P122・P125に切られる。覆土に円礫・シルト・砂礫を含み、自然流路である。弥生時代中期土器・土師器の破片7点、打製石斧（輝石安山岩）1点、黒曜石核1点が出土した。

第13表 溝状遺構出土遺物観察表

No.	種別	器種	法面			内面	底形・裏面・文様	備考	出土位置
			口部(Φ)	底部(Φ)	高さ(Φ)				
1	弥生	土器(?)	-	-	-	赤色塗彩	斜面部は高火度加工	完全火焔	M1
2	上野原	縦	-	9.0	<2.30	ヘラナデ	ヘラナギキ	完全火焔	M6
3	深窓型	縦	10.3	8.7	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	完全火焔	M6
4	深窓型	馬山杓形	(18.0)	(9.0)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ→底部斜面へラカリ→馬山斜面	馬山斜面	M6
5	深窓型	馬山杓形	-	(5.6)	<5.0	ロクロナデ	ロクロナデ→馬山斜面	馬山斜面	M6
6	上野原	縦	16.0	8.8	5.7	ヘラミガタ→馬山丸底	ロクロナデ→底部へラカリ	完全火焔	M6
7	上野原	縦	(14.4)	(7.1)	4.2	ヘラミガタ→馬山丸底	ロクロナデ→底部へラカリ→底部斜面へラカリ	馬山斜面	M6
8	上野原	縦	(14.8)	8.7	5.1	ヘラミガタ→馬山丸底	ロクロナデ→底部外縁へラカリ→底部斜面へラカリ 基盤「左」	馬山斜面	M6



第41図 溝状遺構出土遺物実測図

## 第6節 ピット

本遺跡からは132個のピットが検出された。これらピットは、く～こ～32～34GrのF3・F4の周辺、そ～た～91・92GrのH6・M8間、そ～ち～99～102GrのH1・M2間に集中している。その検出位置は不規則で建物等を推測できなかった。P4・P6・P9・P13・P19・P23・P37・P39・P40から弥生時代中期の土器破片が、P60から黒曜石の剥片1点が出土した。



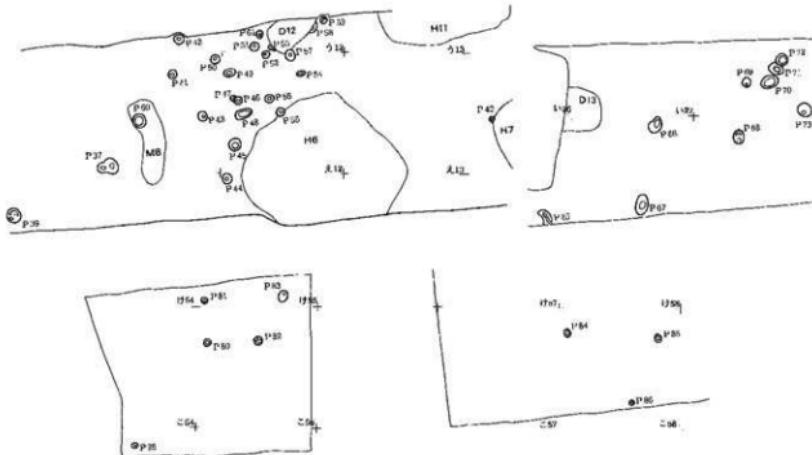
第42図 ピット群実測図

## 第7節 遺構外出土遺物

遺構外の検出面から弥生時代中期後半の土器破片が多く出土した。第43図1は、内外面赤色塗彩の鉢、2は壺で口唇部に網文・口縁部内面に繩文が施文される。無彩である。

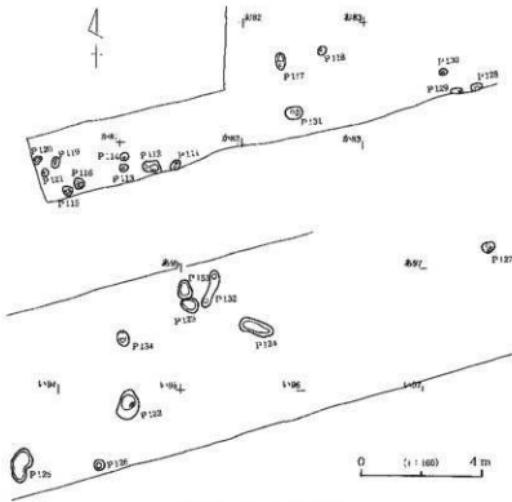


第43図 遺構外出土遺物実測図



第14表 ピット計測表（1）

番号	位置	平野部	横幅 (m)		概要
			左岸	右岸	
1	右101	405	34	30	12
2	左100	405	70	42	9
3	左100	405	22	20	10
4	左100	405	24	6	农地土堤段
5	左100	405	22	22	9
6	左100	405	30	26	31
7	左100	405	34	34	7
8	右100	1-上	36	34	30
9	右100	1-中	44	40	20
10	右100	1-下	98	60	29
11	右100	2-中	36	32	25
12	右100	2-下	48	40	24
13	右100	3-中	32	26	32
14	右100	3-下	60	38	38
15	右100	4-中	32	24	19
16	右100	4-下	32	30	32
17	右100	5-中	40	36	36
18	右100	5-下	54	54	46
19	右100	6-中	54	34	26
20	右100	6-下	76	55	33
21	右100	7-中	28	26	23
22	右100	7-下	40	36	31
23	左100	1-中	96	56	26
24	左100	1-下	32	24	19
25	左100	2-中	36	32	25
26	左100	2-下	42	30	20
27	左100	3-中	36	32	24
28	左100	3-下	36	32	14
29	左100	4-中	109	46	23
30	左100	4-下	32	30	40
31	左100	5-中	32	30	29
32	左100	5-下	24	24	15
33	左100	6-中	48	28	29
34	左100	6-下	30	30	24
35	左100	7-中	30	30	31
36	左100	7-下	30	26	22
37	左92	100-中	70	50	92
38	左93	100-下	80	44	22
39	左93	1-上	48	48	26
40	左89	1-下	20	20	—
41	左82	2-中	32	32	16
42	左82	2-下	30	30	16
43	左82	3-中	30	30	23
44	左81	3-下	36	32	25
45	左81	4-中	40	40	18
46	左81	4-下	30	26	15
47	左81	5-中	26	(16)	15



### 第44回 ピット群大闘合

48	ミ 91	鶴見町	60	29	10
49	ミ 91	鶴見町	36	24	9
50	ミ 92	鶴見町	30	30	41
51	ミ 91	鶴見町	30	30	21
52	ミ 91	鶴見町	20	20	21
53	サ 91	鶴見町	26	(12)	12
54	サ 91	鶴見町	26	15	5
55	サ 91	鶴見町	26	16	16
56	ミ 91	鶴見町	20	19	10
57	ミ 91	鶴見町	26	26	19
58	ミ 91	鶴見町	26	26	20
59	ミ 91	鶴見町	26	26	18
60	ミ 92	鶴見町	46	44	25
61	ミ 91	鶴見町	26	20	23
62	ミ 91	鶴見町	26	20	17
63	次多				
64	ミ 77	鶴見町	26	(20)	20

第15表 ピット計測表(2)

番号	位置	平面形	長径	短径	深さ	備考	番号	位置	平面形	長径	短径	深さ	備考	番号	位置	平面形	長径	短径	深さ	備考
66	E76	円形	51	50	48		80	E38	方形	64	44	41		114	C1	円形	36	26	4	
67	E75	圓形	68	40	48		91	E38	圓形	60	32	27		115	S22	円形	32	32	23	
68	E75	圓形	44	34	47		92	E37	圓形	20	18	1		116	S20	圓形	24	17	17	
69	E75	圓形	28	28	1		93	E37	圓形	20	20	1		117	S20	圓形	24	20	25	
70	E75	圓形	20	14	24		94	E36	圓形	20	20	1		118	S20	圓形	32	24	21	
71	E75	圓形	54	36	5		95	E29	圓形	16	14	8		119	S22	圓形	40	24	19	
72	E75	圓形	38	38	18		96	E22	圓形	22	20	11		120	S22	圓形	30	20	12	
73	E75	圓形	44	42	26		97	E32	圓形	20	20	6		121	S22	圓形	28	26	20	
74	E75	圓形	50	35	18		98	E32	圓形	20	20	12		122	丸形	36	36	11		
75	E57	一形	28	28	30		99	E32	圓形	24	22	10		123	ラ7	圓形	58	40	8	
76	I76	一形	66	66	10		100	E32	圓形	20	20	4		124	ラ7	圓形	110	46	15	
77	I74	一形	30	26	37		101	E33	圓形	30	28	16		125	ス28	圓形	106	66	5	
78	I74	一形	28	28	24		102	E33	圓形	24	24	19		126	丸形	32	34	1		
79	I74	一形	28	28	24		103	E33	圓形	14	14	1		127	ラ7	圓形	24	24	7	
80	E48	圓形	24	22	6		104	E23	圓形	20	20	14		128	ラ7	圓形	36	(20)	17	
81	E61	圓形	16	16	23		105	E34	圓形	16	16	10		129	ラ7	圓形	34	(14)	24	
82	E48	圓形	30	26	15		106	E34	圓形	16	16	1		130	ラ7	圓形	24	22	13	
83	E48	圓形	36	30	25		107	E33	圓形	20	20	8		131	E20	圓形	56	40	32	
84	E48	圓形	28	24	7		108	火薙						132	ラ7	圓形	120	28	10	
85	E45	円形	26	26	P1		109	火薙						133	ラ7	不規則	80	46	5	
86	E45	山形	6	16	12		110	E34	円形	20	18	9		134	ラ7	圓形	60	28	35	
87	E55	二形	20	20	9		111	C21	圓形	(40)	26	24		135	E38	方形	24	22	11	
88	C41	二形	26	22	40		112	C21	圓形	60	40	15								
89	C40	二形	20	20	12		113	C21	圓形	30	20	31								

## 第8節 寄塚遺跡出土の石器

寄塚遺跡から多量の石器や石核・剥片・細片が出土した。そのほとんどは、弥生時代中期後半の栗林期の豊穴住居址からの出上である。多くの石器は、覆土掘り下げ途上や床面で確認できた。剥片や細片も覆土中に多数目視できため、掘り上げた覆土から2mm眼の篩いで抽出した。

石器の器種は、石鎌・石錐・使用痕片石斧・石刀・磨石・砾石・削器・台石・凹石があり、石鎌が大半を占める。石器は、馬場伸一郎(2000.6「下信濃石遺跡」佐久市教育委員会91~99頁)の器種分類・形態分類等を踏襲基準とした。

各石器の石材は、石鎌・石錐・小形剥片石器は主に黒曜石が使用され、他に数少ないが緑色チャート・チャート・黒色緻密安山岩・蛇紋岩がある。打製石斧・打製石斧未製品は、輝石安山岩が主に用いられ他に硬質砂岩・石英安山岩がある。磨製石斧は石英閃绿岩・綠葉片岩が、削器は黒色緻密安山岩と輝石安山岩が、砥石は砂岩・安山岩が使われている。磨石や台石には主として輝石安山岩が、凹石には使用面がより粗い黒色多孔質安山岩や溶結凝灰岩が用いられている。

弥生時代中期後半のH1~H9・H11号住居址内から、石核・原石が77点(黒曜石75点、硬質砂岩2点)、剥片・細片が3,762点(黒曜石3,676点、硬質砂岩65点、緑色チャート8点、その他13点)出土した。これらの出土状態の原位置を把握できなかったため詳細は不明であるが、多くの石器未製品や剥片・細片の出土は、豊穴住居址内外で石器製作の場の存在を想定できよう。

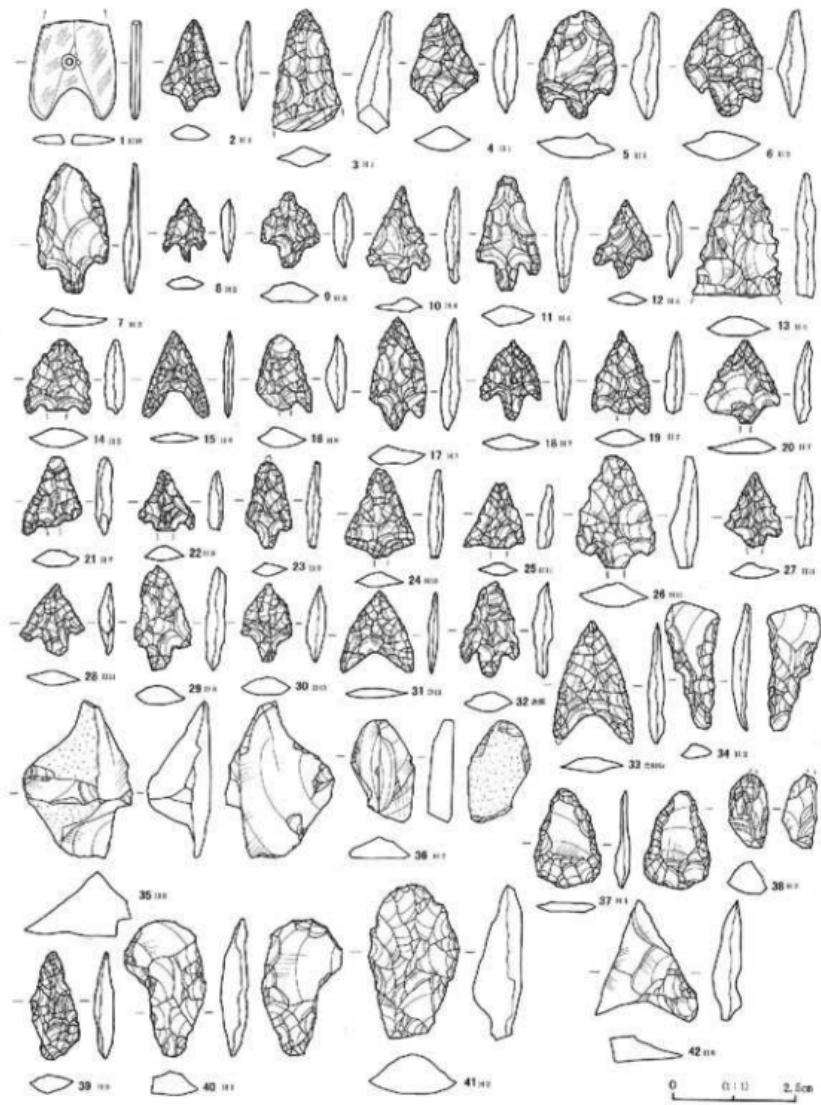
### 石鎌およびその未製品(第45図・第46図)

石鎌は有茎鎌が27点(第45図2・4~12・14・16~30・32)、凹基鎌2点(第45図15・31)、形態不明2点(3・13)、石鎌断片2点(第46図52・53)、磨製石鎌1点(第45図1)である。未製品は30点で有茎鎌の未製品か平基鎌の可能性のあるもの4点(第45図37・第46図62・65・68)、有茎鎌の未製品(第45図39・第46図51・61)、形態不明の未製品(第45図40~42・第46図43~50・54~60・63・64・66・67・70)がある。

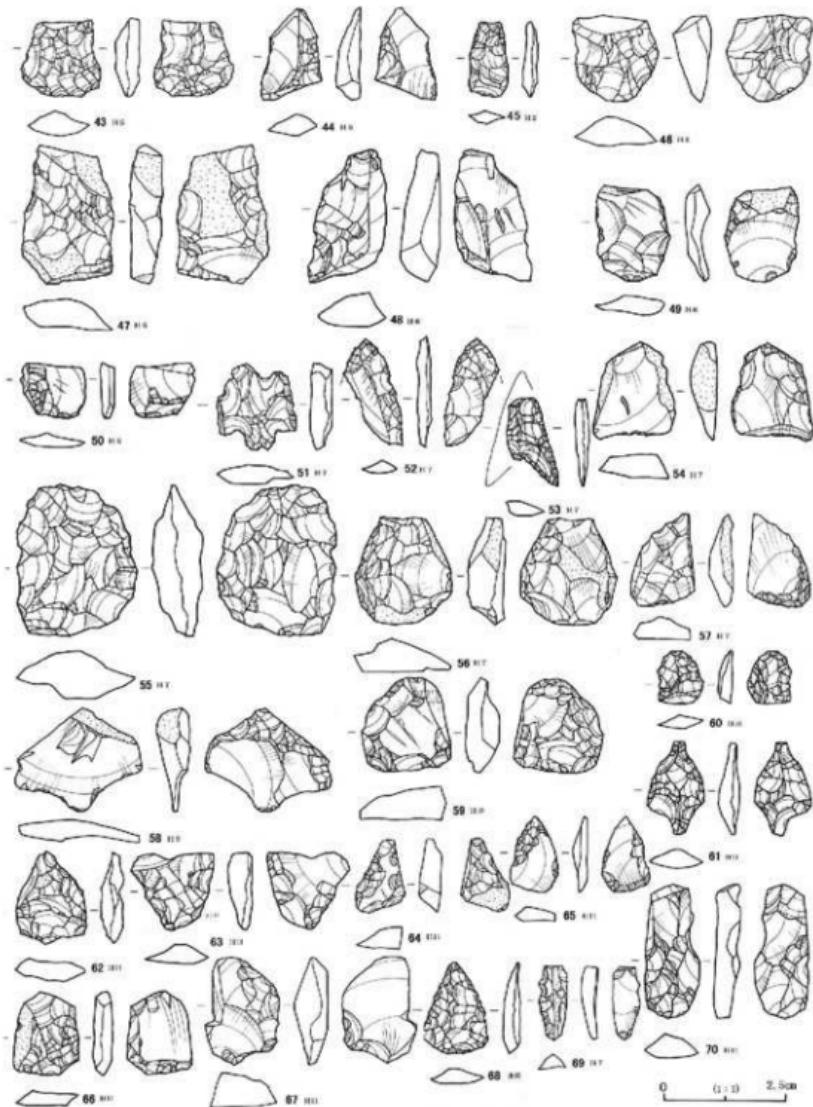
石材は1が緑色チャート、7が黒色緻密安山岩、15がチャート、それ以外はすべて黒曜石である。有茎鎌の鎌身形態は、二等辺三角形状のものが(2・4・10~12・20~27・29・30)14点でもっと

第16表 寄塚遺跡遺物別出土石器一覧表

石器	石種	石器	打製石核	打製石斧	磨製石斧	石刀	石錐	石鎌	石錐	石鎌	石錐	石鎌	石錐	石鎌	石錐	石鎌	石錐		
H1	P	-	3	-	-	-	1	7	1	53	16	5							
H2	3	-	2	1	1	8	-	61	9	3									
H3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	5									
H4	3	1	-	-	-	1	1	15	6	135	15	4							
H5	1	-	2	-	-	-	1	5	25	5	2								
H6	1	1	6	-	-	1	-	-	20	-	11	66	1						
H7	6	2	5	2	-	1	-	19	1	207	12	2							
H8	2	-	-	-	-	-	-	-	2	-	10	1							
H9	-	-	1	-	-	-	-	-	2	-	190	-							
H10	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	72	1	2						
H11	3	8	-	-	-	-	3	-	-	1	3,007	20	4						
H12	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-						
H13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
D5	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12	-						
D6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	1						
D13	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	18	-						
D14	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-						
M4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2						
M6	-	-	-	-	-	3	1	7	-	-	13	-	-						
V7	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-						
V12	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-						
V12	3	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	11	1	-					



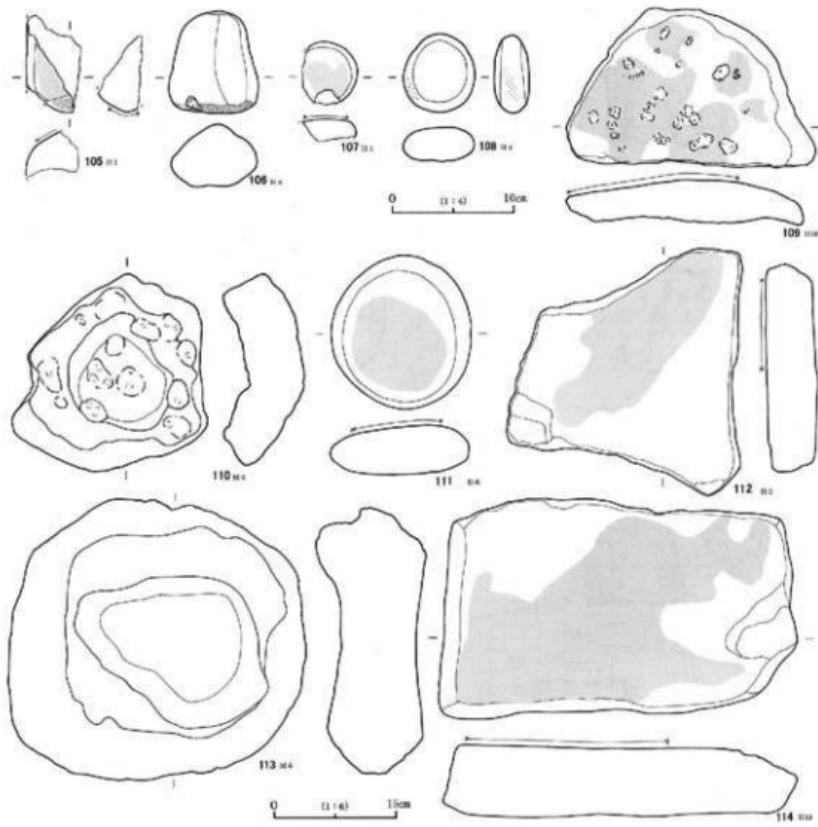
第45図 寄塚遺跡出土石器実測図



第46図 寄塚遺跡出土石器実測図



第47图 寄壤遗址出土石器实测图



第48図 寄塚遺跡出土石器実測図

も多く、丸みを帯びるのが(5・7・14)3点、丸みを帯び先端がとがるものが(18・19・28)3点、縄文晩期に顯著とされる逆剣部の張り出しが下方に発達する名残りとみられるものが(6・8・16・17・26)5点ある。茎部の形態は未製品も含めて、茎の両側が平らなa型(7・20・23・25・29・30)、茎の両側が大きく穿たれ逆剣部が発達するb型(5・6・8~12・14・16~19・21・22・27~29・32・51)、鎌身両端と茎先端が概ね三角形状のものc型(4・24)があり、b型が19点で圧倒的に多い。有茎鐵の製作工程でまず三角形や台形状の未製品を作り、茎の相当する部分の両側を大きく穿ち、茎部を作り出す方法が指摘されている。(馬場2006) 茎部b型の19点には茎部両脇に、大きな剥離面がみられる。また、三角形や台形状の37・43・45~49・55・56・59・60・62・63・65・68は、まさに、茎部を作り出す直前の資料であろうか。なお、37・65・68は平基鐵とも考えられる。

#### 石錐およびその未製品(第45図・第46図)

石錐およびその未製品は、34・38・69・71~73で、いずれも石材は黒曜石である。38・69は先端が

第17表 寄城遺跡出土石器観察表

No	出土位置	種類	石材	長さ 幅 厚さ mm	重量 kg	状態	備考	No	出土 位置	種類	石材	長さ 幅 厚さ mm	重量 kg	状態	備考
1 ~ 4 C	寄城遺跡 チャート	骨製刀頭	骨	21.0 18.0 2.0	1.2	先端欠損		67 ~ 11	石器類	輝葉石	16.0 14.5 4.0	1.1			骨をくりぬき、刃部無
2 ~ 4	先端部	骨製刀頭	骨	19.0 2.0 3.0	0.6			68 ~ 11	石器類	輝葉石	15.5 17.0 5.0	1.0			骨をくりぬき、刃部有
3 H1	石頭	輝葉石	25.0 4.0 7.0	1.8	断端欠損		69 ~ 11	石器類	輝葉石	15.0 15.0 4.5	0.7				
4 H1	石頭	輝葉石	20.0 14.0 5.0	0.9			70 ~ 11	石器類	輝葉石	15.5 17.0 5.0	1.0			骨をくりぬき、刃部無	
5 H1	石頭	輝葉石	20.0 16.0 6.0	1.5			71 ~ 11	石器類	輝葉石	17.0 15.5 4.0	1.1			骨をくりぬき、刃部無	
6 ~ 10	石頭	輝葉石	22.0 16.0 5.0	1.3			72 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 11.5 7.0	2.2			骨をくりぬき、刃部無	
7 H2	石頭	輝葉石	22.0 5.0 4.0	1.3			73 ~ 11	石器類	輝葉石	16.5 13.5 3.5	0.7			骨をくりぬき、刃部有	
8 12	石頭	輝葉石	13.0 6.0 3.0	0.8			74 ~ 11	石器類	輝葉石	15.0 5.0 3.0	0.3			骨をくりぬき	
9 ~ 3	石頭	輝葉石	16.0 1.0 4.0	0.5			75 ~ 11	石器類	輝葉石	27.5 1.0 3.0	1.8				
10	石頭	輝葉石	20.0 12.0 5.0	1.5			76 ~ 11	石器類	輝葉石	23.0 9.5 5.0	0.8			骨をくりぬき	
11 H1	石頭	輝葉石	22.5 3.5 4.0	0.9			77 ~ 11	石器類	輝葉石	21.0 10.0 5.0	2.9			骨をくりぬき	
12 H4	石頭	輝葉石	16.0 2.5 3.0	0.8			78 ~ 11	石器類	輝葉石	25.0 0.5 3.0	2.9			骨をくりぬき	
13 H4	石頭	輝葉石	25.0 18.5 4.0	1.6	断端欠損		79 ~ 11	石器類	輝葉石	36.5 2.0 1.0	7.0				
14 ~ 5	石頭	輝葉石	15.0 14.0 4.0	0.7	断端欠損		80 ~ 11	石器類	輝葉石	22.0 6.1 2.0	16.9	断端		骨をくりぬき	
15 ~ 6	石頭	チャート	18.0 13.5 2.0	0.4			81 ~ 11	石器類	輝葉石	32.0 3.0 0.6	1.3	断端欠損		骨をくりぬき	
16 ~ 19	石頭	輝葉石	16.0 1.0 4.0	0.5			82 ~ 11	石器類	輝葉石	9.0 7.3 2.0	46.0	断端欠損		骨をくりぬき	
17 H2	石頭	輝葉石	23.0 1.0 4.0	0.7			83 ~ 11	石器類	輝葉石	22.0 6.0 2.0	23.7	断端欠損		骨をくりぬき	
18 ~ 1	石頭	輝葉石	7.0 12.5 3.0	0.4			84 ~ 11	石器類	輝葉石	9.0 5.7 2.7	37.0	断端		骨をくりぬき	
19 ~ 7	石頭	輝葉石	17.0 12.0 4.0	0.6	断端欠損		85 ~ 11	石器類	輝葉石	22.0 5.3 1.0	14.7	断端欠損		骨をくりぬき	
20 ~ 7	石頭	輝葉石	17.0 16.0 2.0	0.7	断端欠損		86 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 6.1 2.0	1.8	断端欠損		骨をくりぬき	
21 H1	石頭	輝葉石	18.0 2.0 2.5	0.6	断端欠損		87 ~ 11	石器類	輝葉石	18.0 9.3 2.0	81.0			骨をくりぬき	
22 ~ 6	石頭	輝葉石	19.0 11.5 2.0	0.3	断端欠損		88 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
23 ~ 9	石頭	輝葉石	18.0 6.0 2.0	0.3	断端欠損		89 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
24 H1	石頭	輝葉石	18.0 14.0 3.0	0.7	断端欠損		90 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 6.1 2.0	1.8	断端欠損		骨をくりぬき	
25 ~ 10	石頭	輝葉石	18.0 14.0 3.0	0.7	断端欠損		91 ~ 11	石器類	輝葉石	18.0 4.7 0.9	48.2			骨をくりぬき	
26 ~ 11	石頭	輝葉石	18.0 14.0 3.0	0.7	断端欠損		92 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 6.1 2.0	1.8	断端欠損		骨をくりぬき	
27 ~ 12	石頭	輝葉石	18.0 14.0 3.0	0.7	断端欠損		93 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
28 ~ 13	石頭	輝葉石	18.0 14.0 3.0	0.7	断端欠損		94 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
29 ~ 14	石頭	輝葉石	22.0 11.5 4.0	0.8			95 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
30 H1	石頭	輝葉石	18.0 11.0 4.0	0.5			96 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
31 H1	石頭	輝葉石	15.0 7.0 2.0	0.4			97 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
32 H1	石頭	輝葉石	23.0 8.0 6.0	1.6			98 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
33 H5	石頭	輝葉石	15.0 12.0 3.0	0.8			99 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
34 H2	石頭	輝葉石	26.0 11.0 3.5	0.9			100 ~ 11	石器類	輝葉石	5.0 2.6 1.1	21.5	断端		骨をくりぬき	
35 H5	石頭	輝葉石	32.0 22.0 13.0	4.7			101 ~ 11	石器類	輝葉石	5.2 2.6 0.4	9.5	断端		骨をくりぬき	
36 H7	石頭	輝葉石	21.0 13.0 5.0	1.3			102 ~ 11	石器類	輝葉石	7.0 2.6 1.1	16.3	断端		骨をくりぬき	
37 H1	石頭	輝葉石	21.0 13.5 3.0	0.7			103 ~ 11	石器類	輝葉石	6.0 4.6 1.9	77.2	断端		骨をくりぬき	
38 ~ 47	石頭	輝葉石	15.0 8.0 2.0	0.4			104 ~ 11	石器類	輝葉石	3.7 4.3 2.8	74.5	断端		骨をくりぬき	
39 ~ 48	石頭	輝葉石	17.0 5.0 2.0	0.4			105 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
40 H1	石頭	輝葉石	15.0 14.0 4.0	0.6			106 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
41 H1	石頭	輝葉石	15.0 13.0 3.0	0.8			107 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
42 H1	石頭	輝葉石	15.0 13.0 3.0	0.8			108 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
43 H1	石頭	輝葉石	15.0 13.0 3.0	0.8			109 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
44 H1	石頭	輝葉石	15.0 13.0 3.0	0.8			110 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 9.3 2.0	35.1	断端		骨をくりぬき	
45 H2	石頭	輝葉石	15.0 8.0 3.0	0.4			111 ~ 11	石器類	輝葉石	4.7 4.9 3.6	106.0				
46 H1	石頭	輝葉石	17.5 7.0 6.0	1.6			112 ~ 11	石器類	輝葉石	4.7 6.4 1.0	26.3				
47 H1	石頭	輝葉石	15.0 7.0 6.0	1.6			113 ~ 11	石器類	輝葉石	3.0 8.1 1.1	43.0				
48 H1	石頭	輝葉石	18.0 5.0 4.0	1.2			114 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 6.6 4.8	86.7				
49 H1	石頭	輝葉石	17.5 7.0 6.0	1.6			115 ~ 11	石器類	輝葉石	9.0 8.9 6.5	73.0				
50 H1	石頭	輝葉石	17.5 7.0 6.0	1.6			116 ~ 11	石器類	輝葉石	9.0 7.0 6.0	29.4				
51 H1	石頭	輝葉石	18.0 7.0 6.0	1.6			117 ~ 11	石器類	輝葉石	6.0 4.7 2.4	48.0				
52 H1	石頭	輝葉石	20.0 15.0 7.0	2.0			118 ~ 11	石器類	輝葉石	4.7 6.4 1.0	26.3				
53 H1	石頭	輝葉石	19.0 11.0 3.0	0.4			119 ~ 11	石器類	輝葉石	3.0 8.1 1.1	43.0				
54 H1	石頭	輝葉石	22.0 10.0 4.0	0.6			120 ~ 11	石器類	輝葉石	8.0 4.6 3.6	42.3	断端		骨をくりぬき	
55 H1	石頭	輝葉石	22.0 10.0 4.0	0.6			121 ~ 11	石器類	輝葉石	8.0 4.7 3.1	45.5	断端		骨をくりぬき	
56 H1	石頭	輝葉石	22.0 22.0 7.0	3.1			122 ~ 11	石器類	輝葉石	5.0 4.6 1.8	33.8	断端		骨をくりぬき	
57 ~ 2	石頭	輝葉石	19.0 11.0 5.0	1.0			123 ~ 11	石器類	輝葉石	6.0 5.9 2.8	132.3				
58 H1	石頭	輝葉石	19.0 12.0 5.0	0.8			124 ~ 11	石器類	輝葉石	4.0 8.1 2.4	48.0				
59 H1	石頭	輝葉石	18.0 16.5 2.0	0.2			125 ~ 11	石器類	輝葉石	4.0 8.1 2.4	48.0				
60 H1	石頭	輝葉石	20.0 16.5 2.0	0.2			126 ~ 11	石器類	輝葉石	12.0 20.6 3.7	1.29				
61 H1	石頭	輝葉石	31.0 15.0 7.0	4.2			127 ~ 11	石器類	輝葉石	24.0 14.6 10.2	3.81				
62 H1	石頭	輝葉石	22.0 22.0 7.0	3.1			128 ~ 11	石器類	輝葉石	9.0 17.4 6.2	2.69				
63 H1	石頭	輝葉石	19.0 11.0 5.0	1.0			129 ~ 11	石器類	輝葉石	9.0 13.0 6.6	9.82				
64 H1	石頭	輝葉石	21.0 16.0 6.0	2.4			130 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 37.3 13.7	17.84				
65 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			131 ~ 11	石器類	輝葉石	2.0 44.8 8.1	23.74				
66 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			132 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
67 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			133 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
68 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			134 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
69 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			135 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
70 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			136 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
71 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			137 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
72 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			138 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
73 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			139 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
74 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			140 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
75 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			141 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
76 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			142 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
77 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			143 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
78 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			144 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
79 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			145 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
80 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			146 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
81 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			147 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
82 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			148 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
83 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			149 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
84 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			150 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
85 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			151 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
86 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			152 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
87 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			153 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
88 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			154 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
89 H1	石頭	輝葉石	19.0 8.5 7.0	2.4			155 ~ 11	石器類	輝葉石	1.0 44.8 8.1	23.74				
90 H1	石頭</td														

岩が2点、硬質砂岩が2点である。形態のわかる86・90~93は、すべて撥形である。78は短冊形の刃部加工途上の未製品、79・83・87は未製品のまま折れてしまったようだ。

#### 磨製石斧（第47図）

大形蛤刃石斧77、大形蛤刃石斧の断片75、扁平片刃石斧76が出土した。75・77が石英閃緑岩、76が綠巖片岩である。

#### 砥石（第47図）

扁平な円盤で側辺両刃状に摩滅する94・96、両面に線状痕、磨面がある95・97、98は摩耗して湾曲している。石材は94が安山岩、他は砂岩である。

#### 削器（第47図）

横長で鋭い縁辺に刃部を持つ、81・104が黒色緻密安山岩製、84が輝石安山岩製、99が硬質砂岩製である。

#### 磨石（第47・48図）

89・100~103・105・106は、光沢がある磨り面と敲き痕がみられる。108は円盤を用いており側面に赤色の付着物が観察できる。石材は多様で、安山岩・花崗岩・凝灰岩がみられる。

#### 台石・凹石（第48図）

輝石安山岩製で、円盤111と角がない亜角盤109・112・114がある。4点とも平坦面に光沢がある磨り面を持ち、いずれも付着物などは見られない。109の磨り面付近には、敲打による小穴が認められる。

台石はM4から出土し、ざらついた湾曲面を持つ。黒色多孔質安山岩製の110は13個の小穴を有す。

（引出・参考文献）馬場伸一郎 2006「下信濃石遺跡出土の石器群について」「下信濃石遺跡」佐久市教育委員会 91~99頁

## 第Ⅲ章 まとめ

本遺跡の眼下を湯川が西流している。標高710m以下の両岸は弥生時代の遺跡密集地帯である。右岸では、上流から岩村田遺跡群・西八日町遺跡・西一本柳遺跡・北西の久保遺跡・鳴沢遺跡群・根々井居屋敷遺跡・森平遺跡・大和田遺跡群川原端遺跡等で弥生時代中期後半~後期後半の集落址が調査されている。

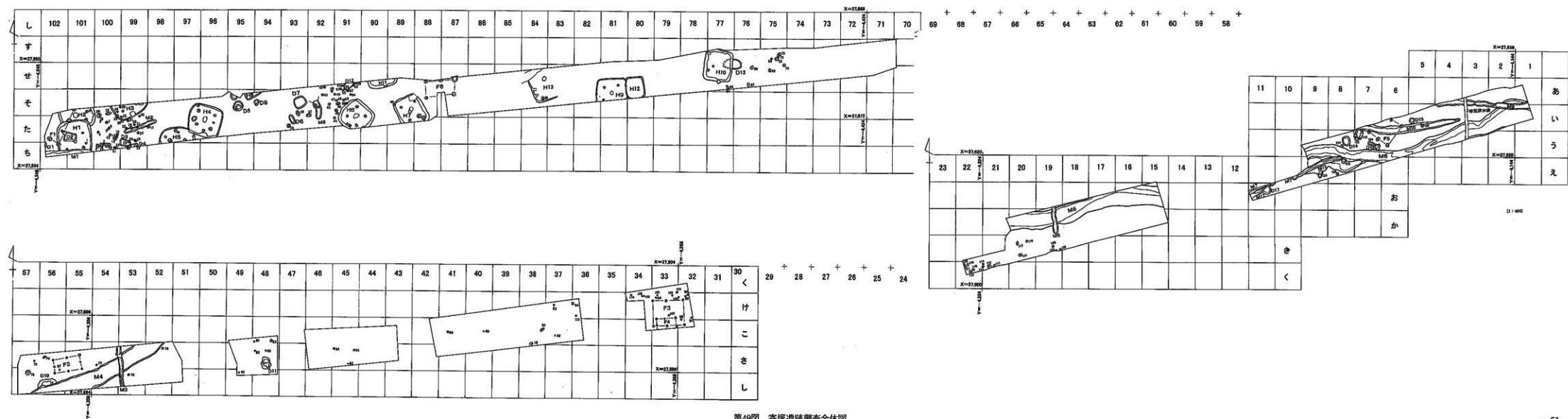
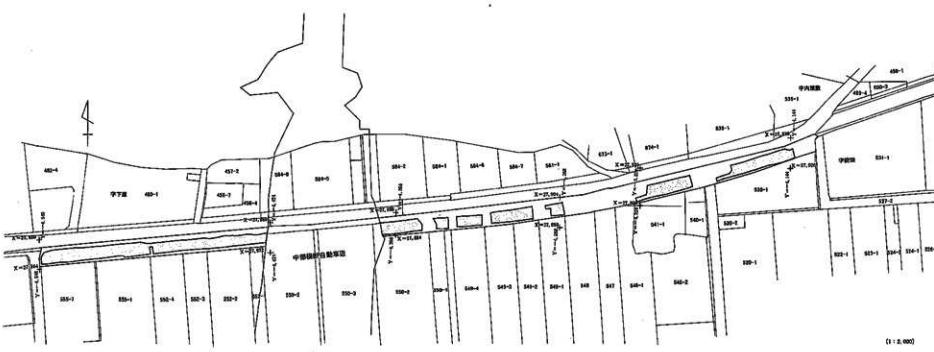
左岸では、上流から野馬塗遺跡群・宮の上遺跡群・寄塚遺跡群・白山遺跡群・上平遺跡群が知られている。しかし、調査されたのは野馬塗遺跡群野馬塗遺跡・宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡のみであった。弥生時代中期後半では、住居址43棟が隣接する根々井芝宮遺跡で検出されているが、今回の調査で新たに該期の資料を得た。

この地域の弥生時代中期後半の時期区分は、深堀遺跡II・III・V（小林 2002）で成果が提示されている。根々井芝宮遺跡は、弥生時代中期後半II期とIII期に位置づけられている。本遺跡出土の土器群は、全容のわかる一括資料に乏しいがH5号の壺脛部文様帶の在り方はII期、H9号はIII期に該当しよう。注視されるのは、住居址から未製品を伴う黒曜石の剥片・細片が多量に出土したことである。下信濃石遺跡や後家山遺跡で利用される黒曜石産地が時期により変化すると指摘されており、黒曜石流通の解明に、本遺跡も含めて北西の久保遺跡・根々井芝宮遺跡等の当該期の黒曜石産地推定分析が不可欠となつた。

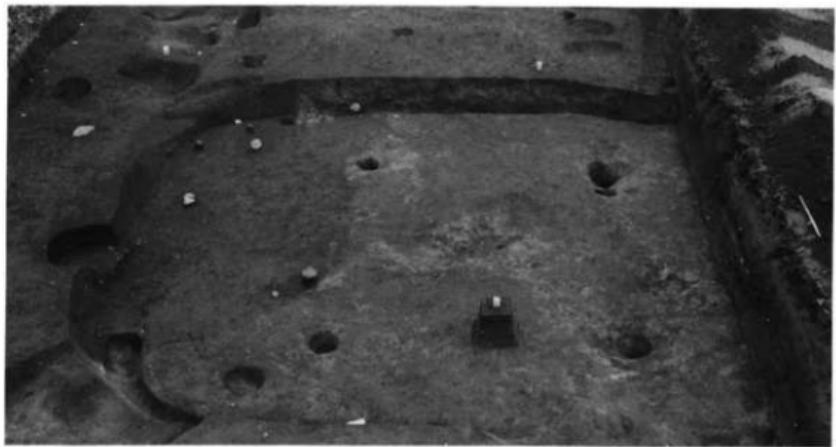
（引出・参考文献）小林真寿 2002「深堀 II・III・V」佐久市教育委員会

第18表 寄塚遺跡住居址・窓表

序号	発掘位置	平面形	南北幅	東西幅	壁厚	窓	柱	柱間	柱高	柱頭	備考	
41	9-101-1C2	南北方形	4.5	-	0.85	0.65	0.35	2.8	2.2	N-2°-W	焼成	
H7	モ-101-1D2	南北方形	-	4.1	0.75	0.45	0.35	2.1	N 25° W	未完成	△1+	
H3	モ-09-100	-	-	4.8	-	0.25	0.30	2.4	N-31°-W		F3コード90°Eれる	
H4	モ-09-100	南北方形	4.4	4.0	3.9	4.0	0.22	2.6	2.1	N-17°-W	焼成	H5を認める
H5	モ-07-198	南北方形	4.0	-	4.0	4.0	0.23	2.9	N 2° W		H4に認める	
I6	モ-10-91	南北方形	4.0	4.0	3.8	0.25	2.0	2.0	C/C	N-10°-E	火候足りない	
H7	モ-08-89	南北長方形	3.6	4.7	4.0	0.25	0.18	2.1	2.3	△-30°-W	焼成	火候足りない
H8	モ-04-55	-	-	2.5	-	0.10	0.20	-	-		火候足りない	
H9	モ-08-180	南北方形	4.1	-	0.15	0.15	0.22	2.0	1.9	N-2°-W	火候足りない	
H10	モ-07-77-78	南北式方形	3.6	3.9	4.2	4.4	0.05	-	-	N-10°-E	火候足りない	
H11	モ-09-90	-	-	4.0	0.25	<	0.10	-	-			
H12	モ-07-80	南北長方形	2.6	2.5	3.0	3.0	0.23	-	-			
H13	モ-03-84	南北長方形	4.1	-	0.10	-	-	N-2°-W	焼成	H5を認める		



第49図 寄塚遺跡調査全体圖



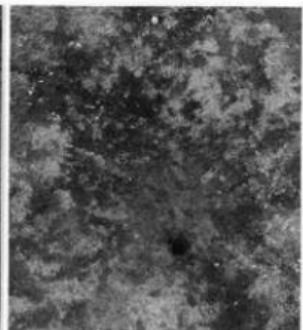
H1号住居址全景 西より



H1号住居址掘り方 東より



H1号住居址遺物出土状況 南より



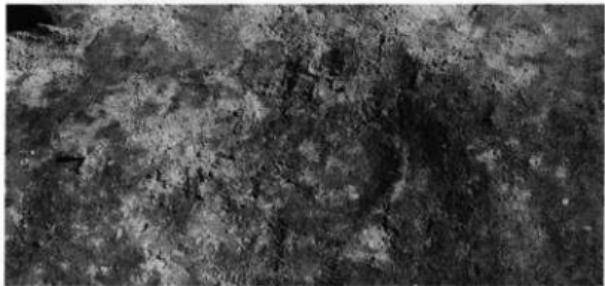
H1号住居址炉



H2号住居址全景 西より



H2号住居址掘り方 東より



H2号住居址炉 西より



H2号住居址炉掘り方 東より



H 3号住居址全景 西より

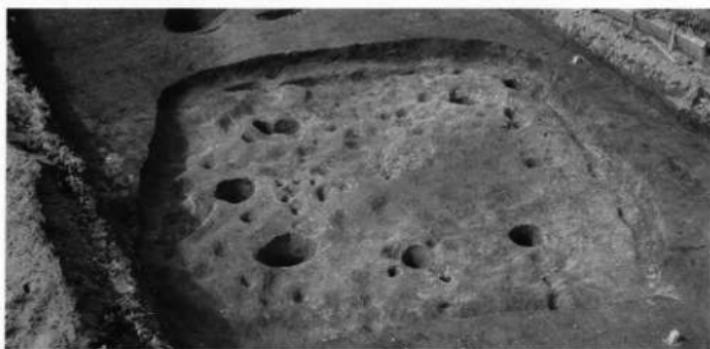


H 3号住居址掘り方 西より

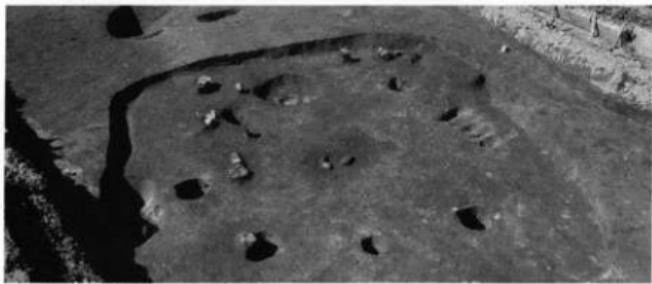
図版四



H4号住居址全景 東より



H4号住居址掘り方 東より



H4号住居址遺物出土状況 東より



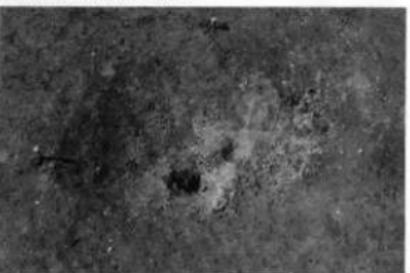
H4号住居址遺物出土状況



H4号住居址遺物出土状況



H4号住居址遺物



H4号住居址炉掘り方



H5号住居址全景 西より



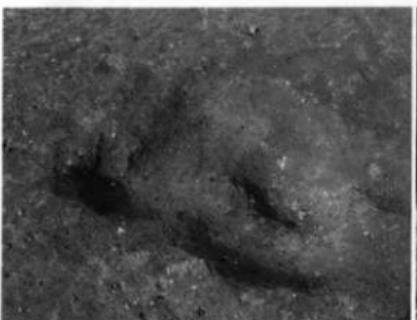
H5号住居址遺物出土状況



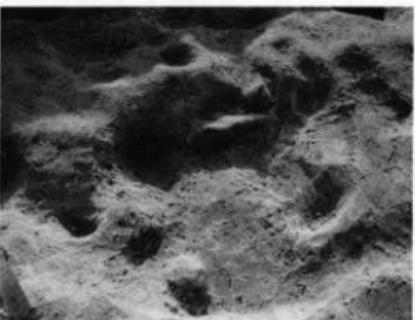
H5号住居址遺物出土状況



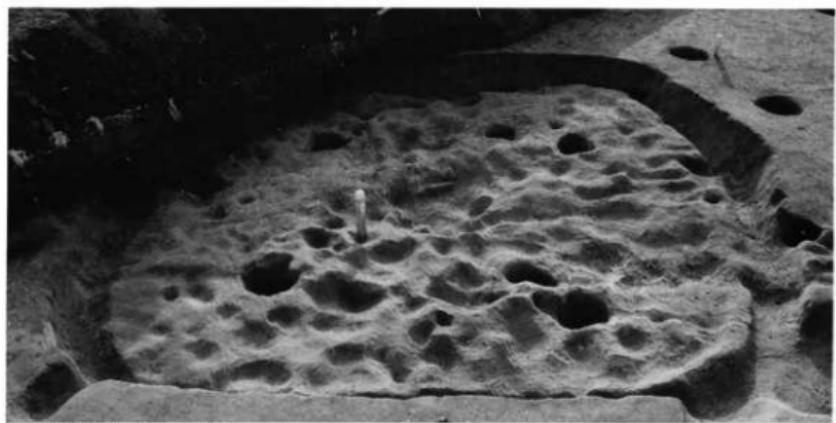
H6号住居址全貌 西より



H6号住居址炉



H6号住居址炉掘り方



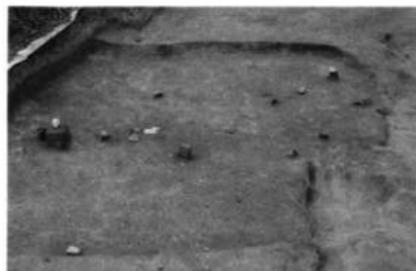
H6号住居址掘り方 北東より



H7号住居址全景 西より



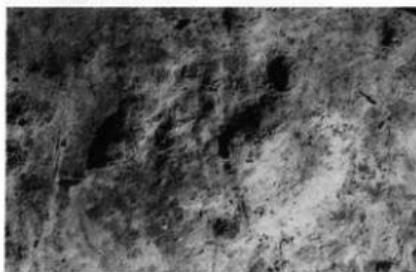
H7号住居址掘り方 北東より



H7号住居址遺物出土状況



H7号住居址炉1



H7号住居址炉2



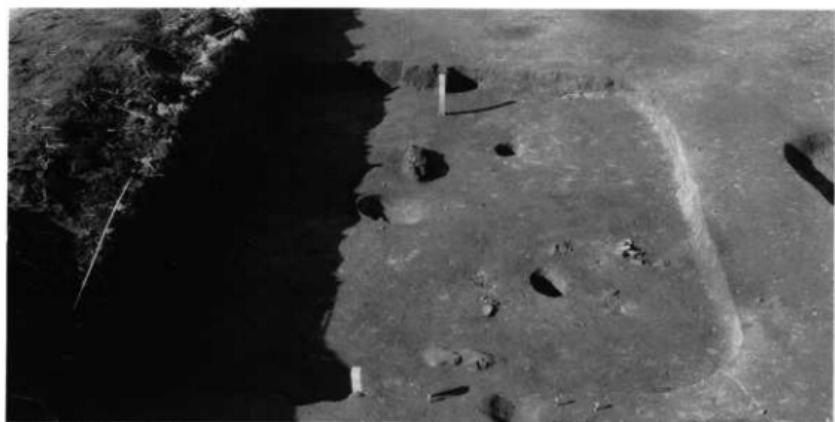
H7号住居址炉2掘り方



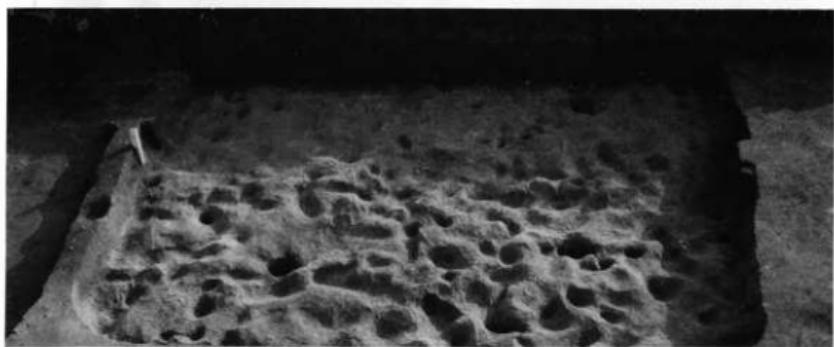
H8号住居址全景 東より



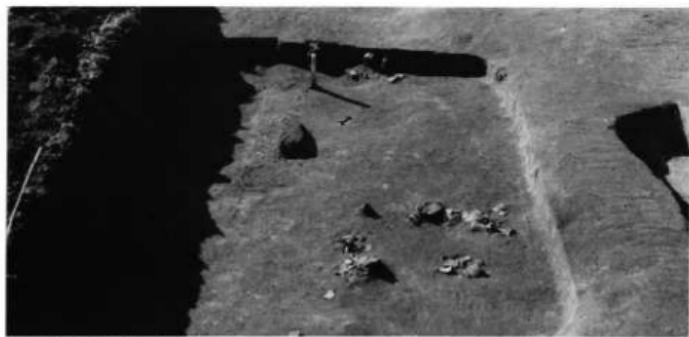
H8号住居址掘り方 西より



H9号住居址全景 東より



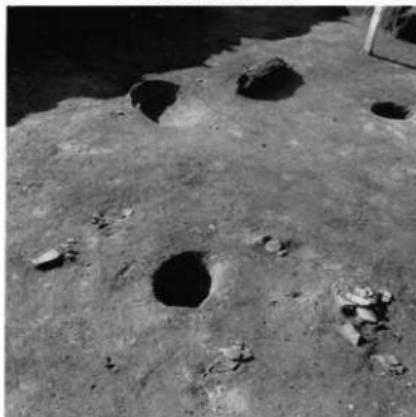
H9号住居址掘り方 北より



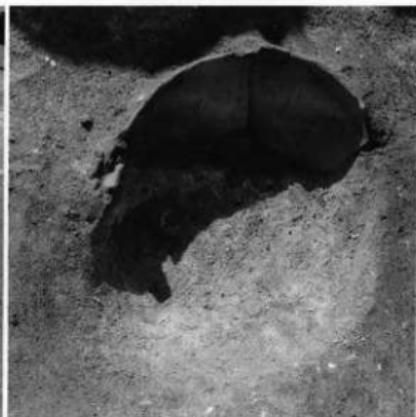
H9号住居址遺物出土状況 東より



H9号住居址遺物出土状況



H9号住居址遺物出土状況



H9号住居址炉



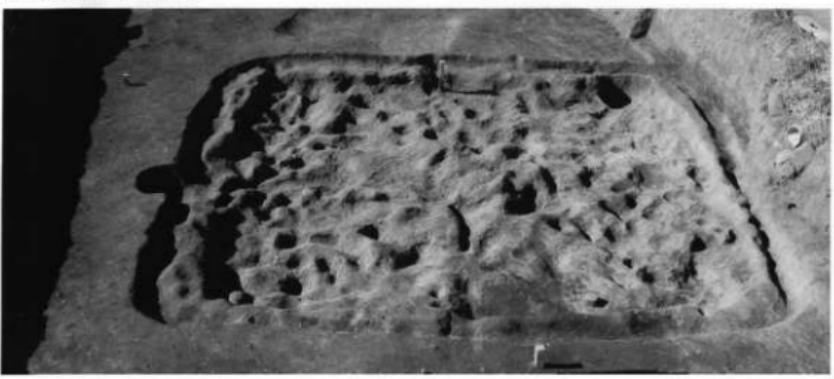
H10号住居址遺物出土状況 南より



H10号住居址遺物出土状況



H10号住居址全景 (南より)



H10号住居址掘り方 (北より)



H10号住居址遺物出土状況



H10号住居址炉



H10号住居址P 1 遺物出土状況



H10号住居址 P 1 遺物出土状況



H11号住居址全景 西より



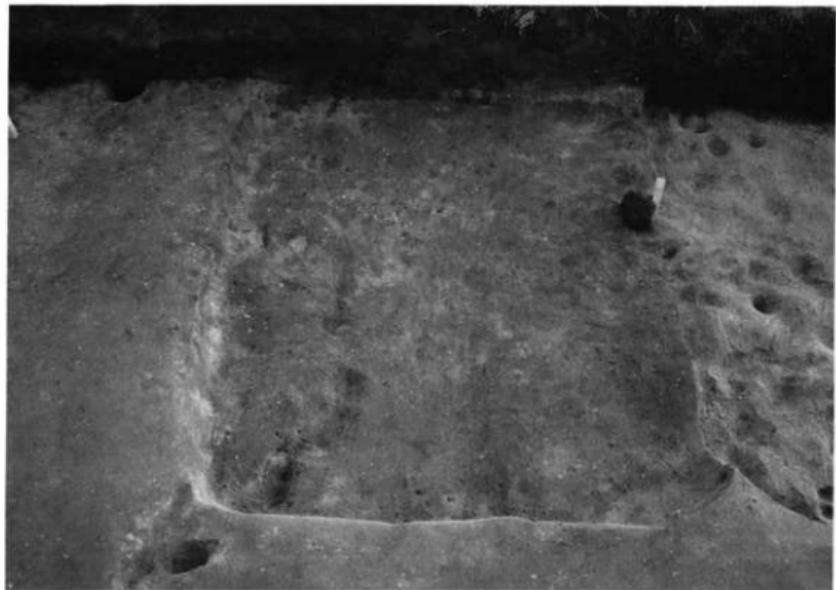
H11号住居址掘り方 東より



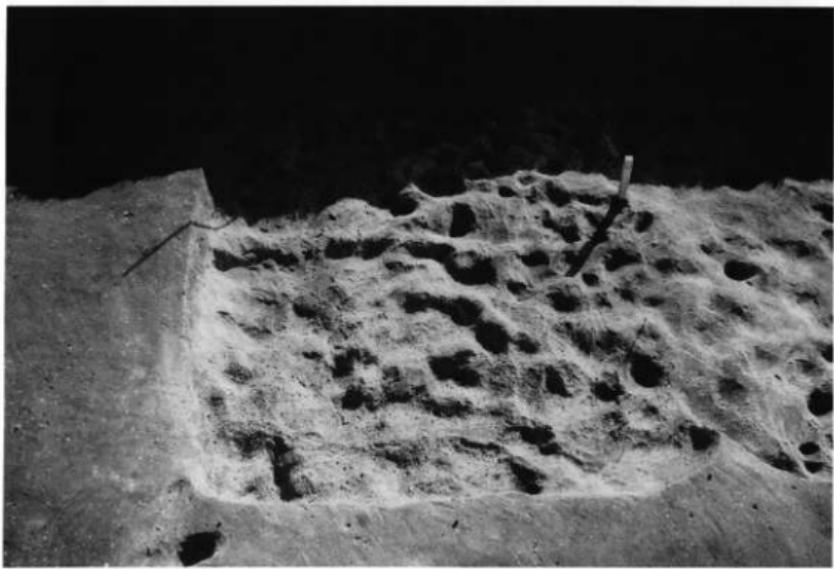
H11号住居址掘り方遺物出土状況



H11号住居址掘り方遺物出土状況



H12号住居址全景 北より



H12号住居址掘り方 東より

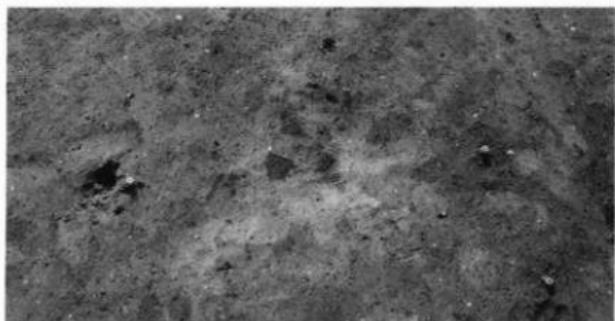
図版十四



H13号住居址全景 南より



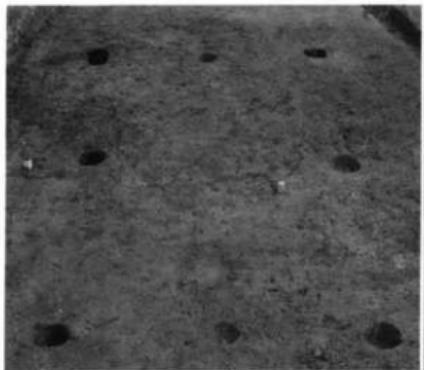
H13号住居址掘り方 東より



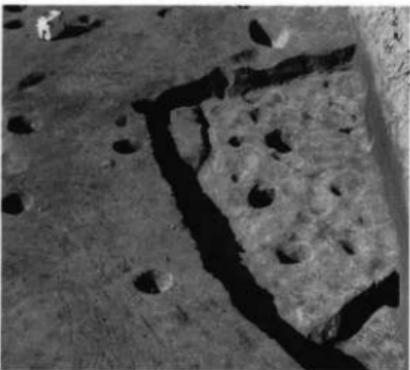
H13号住居址<sup>か</sup> 北より



F 1号掘立柱建物址



F 2号掘立柱建物址 西より



F 3・F 4号掘立柱建物址



F 5号掘立柱建物址 西より

図版十六



F 6号掘立柱建物址 西より



D 1号土坑 西より



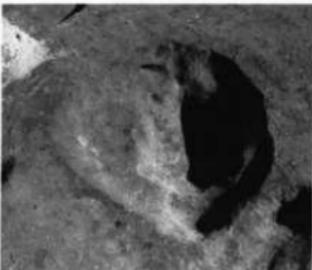
D 2号土坑



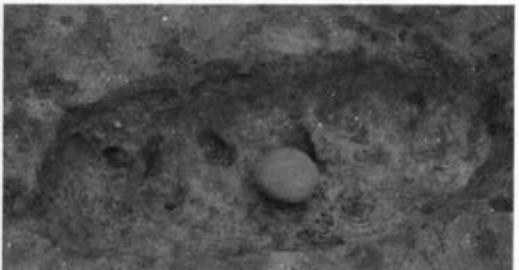
D 3号土坑



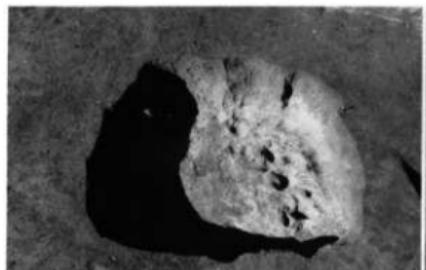
D 4号土坑



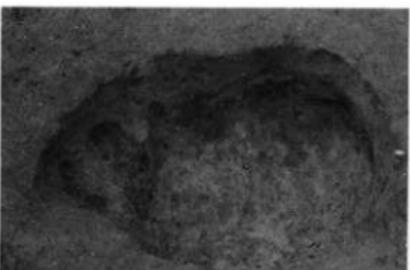
D 5号土坑



D 6号土坑



D 7号土坑



D 8号土坑



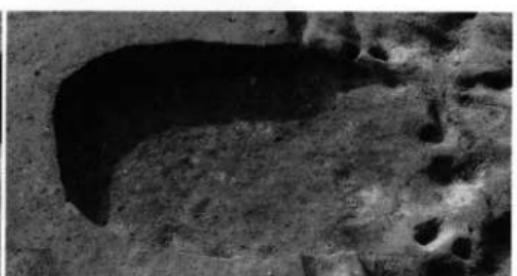
D 9号土坑



D 10号土坑



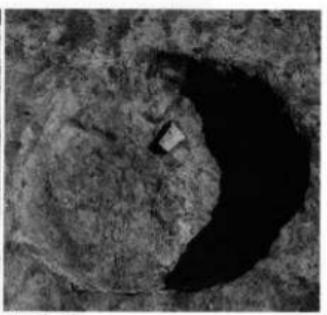
D 11号土坑



D 13号土坑



D 13号土坑

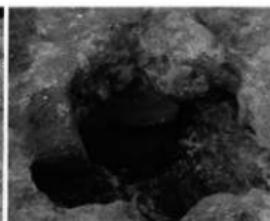


D 14号土坑

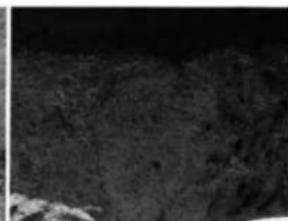
図版十八



D15号土坑



D16号土坑



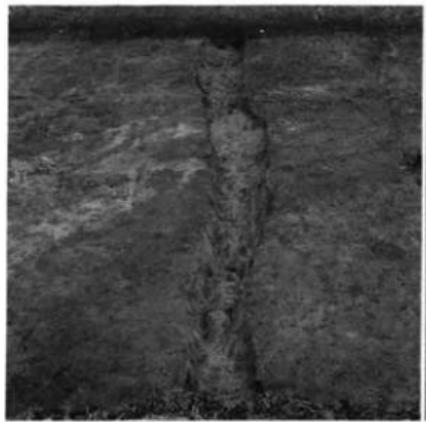
D17号土坑 北より



M1号溝状遺構



M2号溝状遺構



M3号溝状遺構



M4号溝状遺構



M5号溝状遺構



M6号溝状遺構



M6号溝状遺構遺物出土狀況



M6号溝状遺構遺物出土狀況

圖版二十



M7号溝状遺構



M8号溝状遺構



M9号溝状遺構



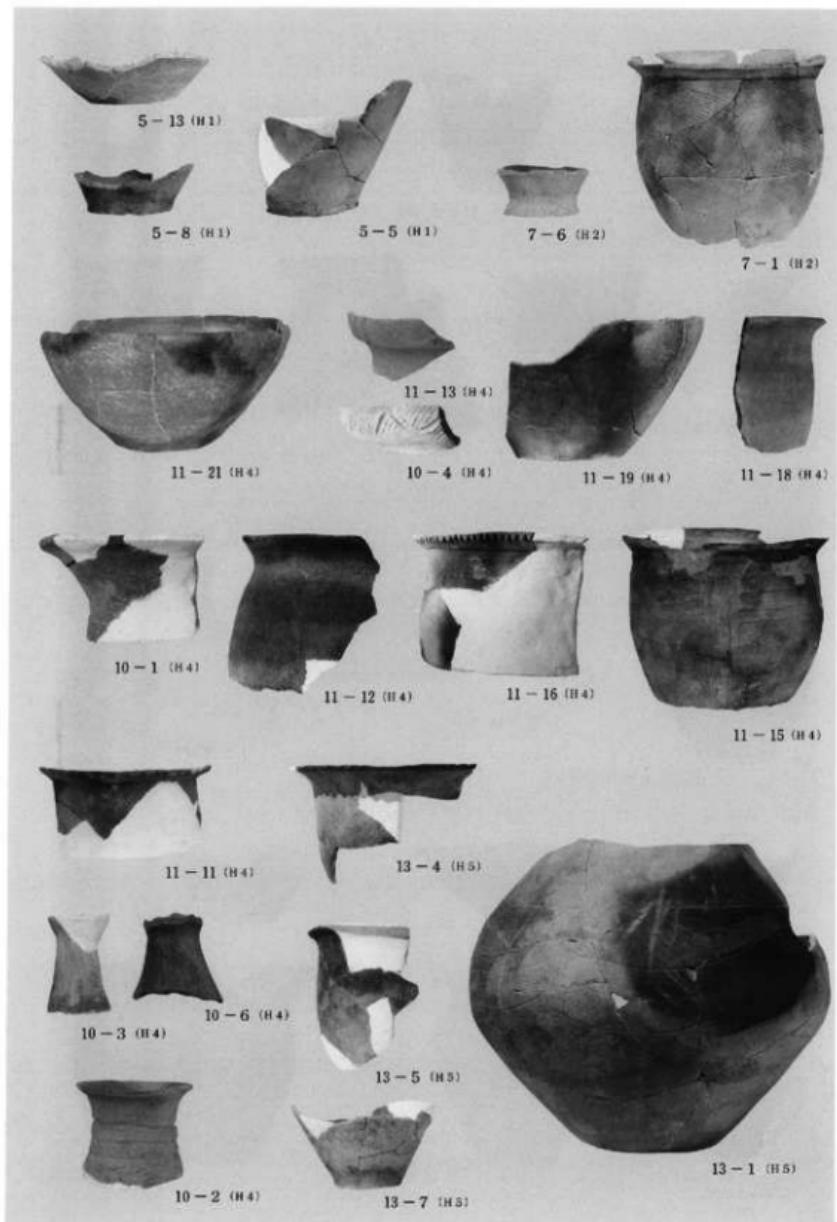
M10号溝状遺構



M11号溝状遺構



M12号溝状遺構





16-10 (H6)



15-5 (H6)



16-9 (H6)



15-4 (H6)



18-3 (H7)



18-18 (H7)



18-15 (H7)



18-14 (H7)



18-3 (H7)



18-16 (H7)



18-2 (H7)



18-6 (H7)



18-24 (H7)



23-17 (H9)



21-4 (H9)



18-19 (H7)



23-9 (H9)



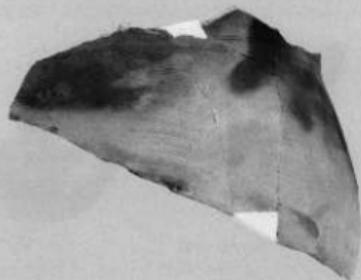
18-7 (H7)



23-10 (H9)



23-7 (H9)



23-8 (H9)



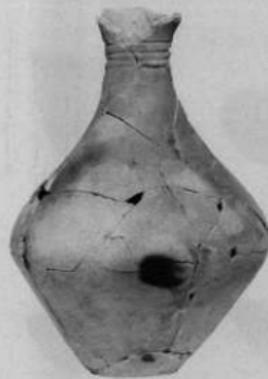
21-3 (H9)



23-12 (H9)



21-1 (H9)



21-2 (H9)



26-16 (H10)



26-15 (H10)



26-18 (H10)



23-16 (H9)



25-1 (H10)



26-11 (H10)



26-17 (H10)



26-8 (H10)



26-6 (H10)



27-13 (H11)



27-3 (H11)



27-14 (H11)



27-15 (H11)



27-2 (H11)



27-1 (H11)



31-1 (H13)



34-1 (D13)



34-6 (D13)



34-3 (D13)



34-4 (D13)



34-2 (D13)



41-1 (M1)



41-6 (M6)



41-8 (M6)



41-7 (M6)



41-3 (M6)



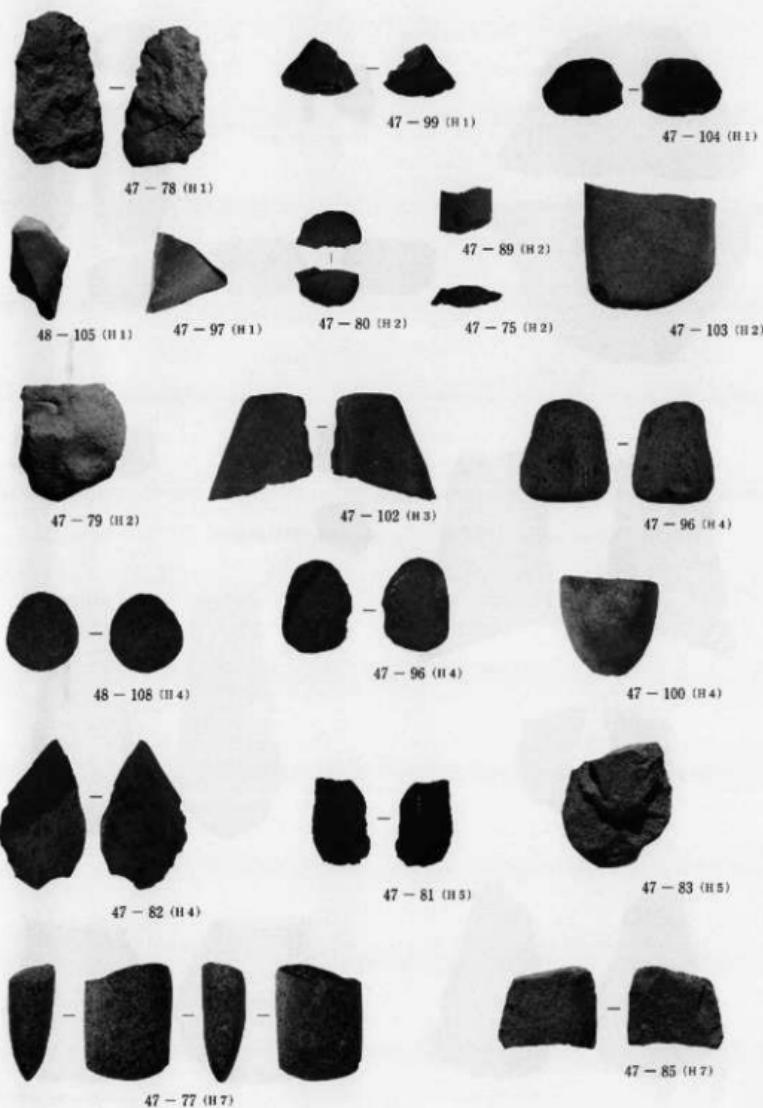
41-4 (M6)

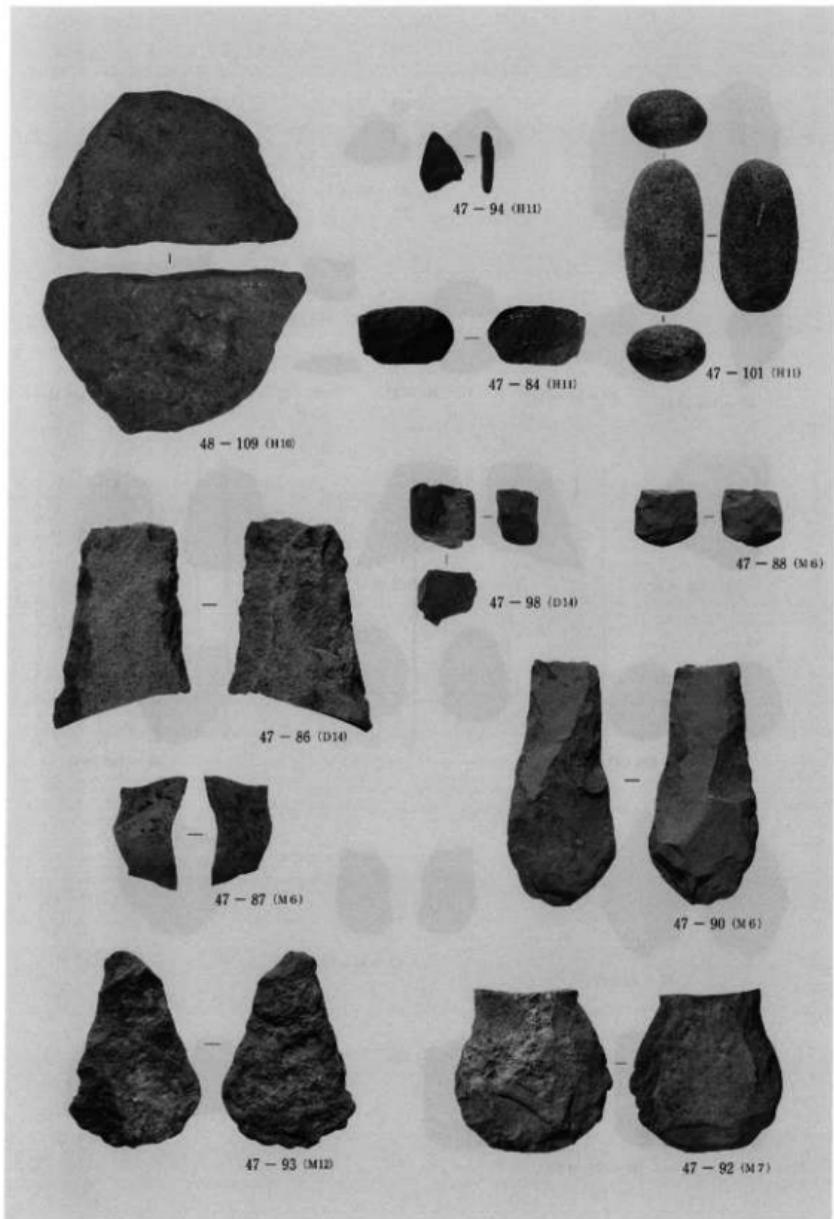


41-5 (M6)



41-2 (M6)







48-112 (H3)

48-110 (M4)



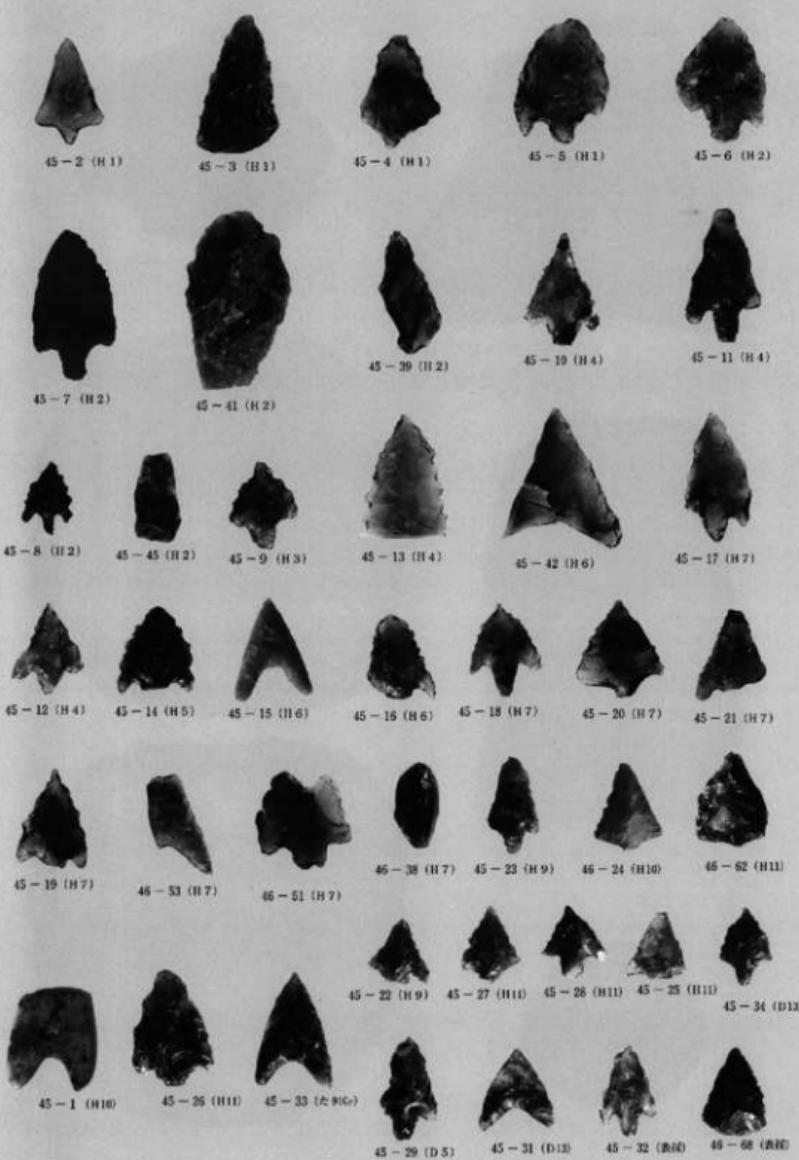
48-114 (H10)



48-111 (D6)

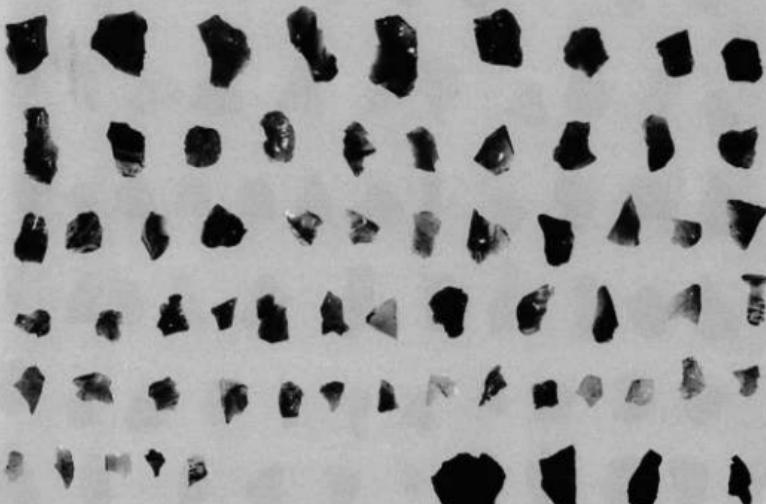


48-113 (M4)





H 1 石核・剥片・細片



H 2 本核・剥片・細片



H.4 石核・剥片・細片



H.7 原石・石核・剥片・細片



H 6 石核・剥片・細片

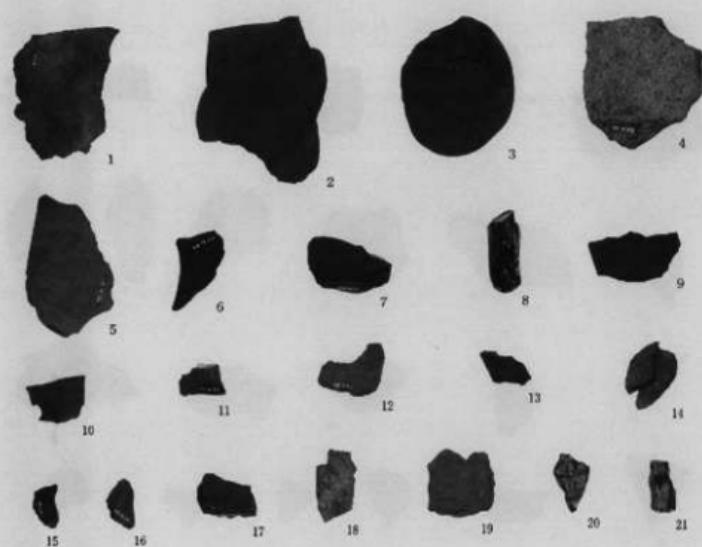


H10 剥片·細片

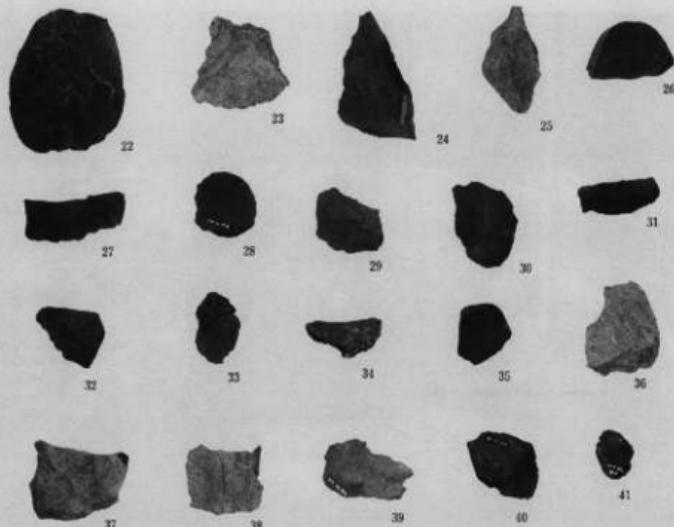


D 5 剥片·細片

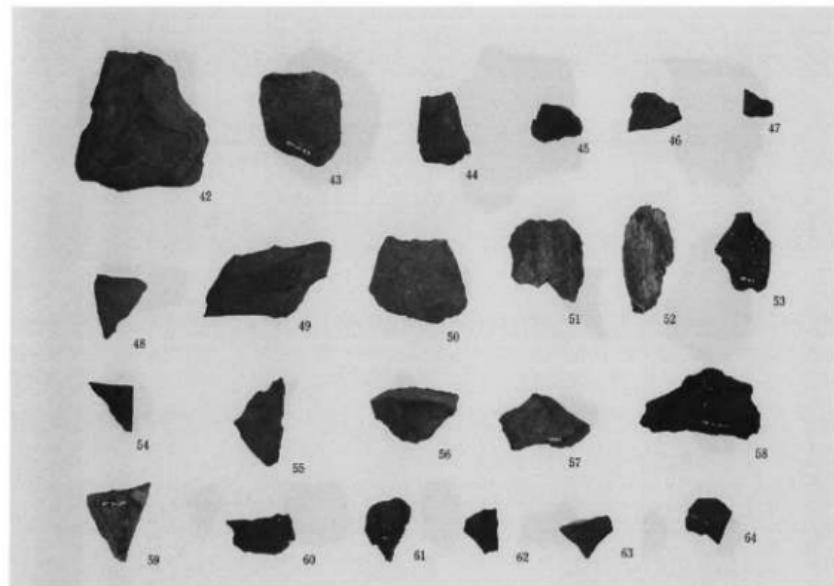




H 1 (1~17) H 2 (18~21) 出土剥片・細片



H 4 (22~34) H 5 (35~38) H 6 (39~41) 出土石核・剥片・細片



H 7 (42~47) H 10(48・49) H 11(50~55) M 1 (56・57) M 6 (58~64) 出土石核・剥片



調査区西側付近調査風景

---

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第157集

寄塚遺跡群

**寄 塚 遺 跡**

2009年3月

編集・発行 長野県佐久市教育委員会

〒385-8301 長野県佐久市中込3056番地

文化財課

〒385-0006 長野県佐久市志賀5953

Tel 0267-68-7321

印 刷 所 株式会社 佐久印刷所

---

## 報告書抄録

書名	寄塚遺跡群寄塚遺跡
ふりがな	よせづか よせづか
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第157集
編著者名	林 幸彦
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2008.3.19
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	寄塚遺跡群寄塚遺跡 (YYY)
遺跡所在地	佐久市横利555-7地
遺跡番号	231
経度	36°-15-18- (世界測地系)
緯度	138°-27-02- (世界測地系)
調査期間	2005.10.17~2005.12.26 (現場) 2006.7.13~2008.3.19 (修理)
調査面積	1,598m <sup>2</sup>
調査原因	道路改築事業
種別	散布地
主な時代	弥生時代~平安時代
遺跡概要	遺構 突穴住居址13軒 (弥生~古墳) 据立柱建物址6棟 土坑17基 溝状遺構12条他 遺物 弥生時代中期土器・土師器・須恵器・上製品・石器・石製品
特記事項	資料の少ない古墳時代前期後半の集落、弥生時代中期後半の石器製作の場も考えられる集落が検出された。